

SEIJU

1998年  
第 28 卷

# 成吉

秋解



謹啓

初秋の候

平素善光寺の専門興隆に賛美會にて  
桂別の御尽力を賜り厚く御礼申上げます。  
成壽二十六年論文集ソロ三(アメリカ禪籍集等)  
をお送り申上げます。

毎修不頃の折、善光寺の身の自慶トヤマサ  
ヨウ新ヒゲモ後共、何事もおあがま  
申す。

合掌

善光寺 里田成壽

北山道中往還圖

あじわむ

三玄齋



脚牌

衣(白) 繢枝但の道師持

子



# 黒田住職「国際栄誉賞」受賞

～スリランカ・サラナンダ財団から～



メダランカラ大僧正と黒田住職



喜びの受賞者の皆様（6月20日午後）



「栄誉賞」の表彰状



ラタナヤケ国會議長から記念の楯を受ける





受賞者を代表して挨拶



式典 壇上の皆様

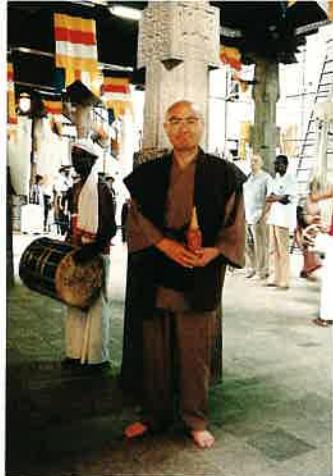




子どもたちの大歓迎パレード



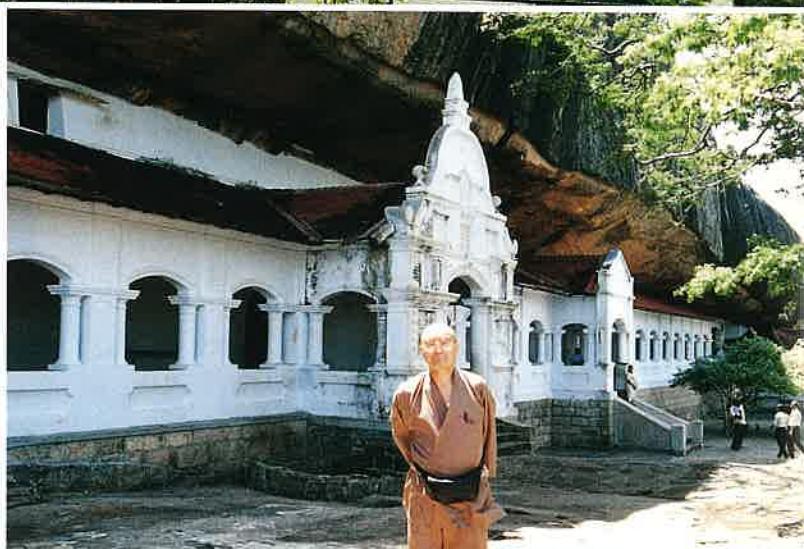
仏歯寺参拝（6月20日午前）

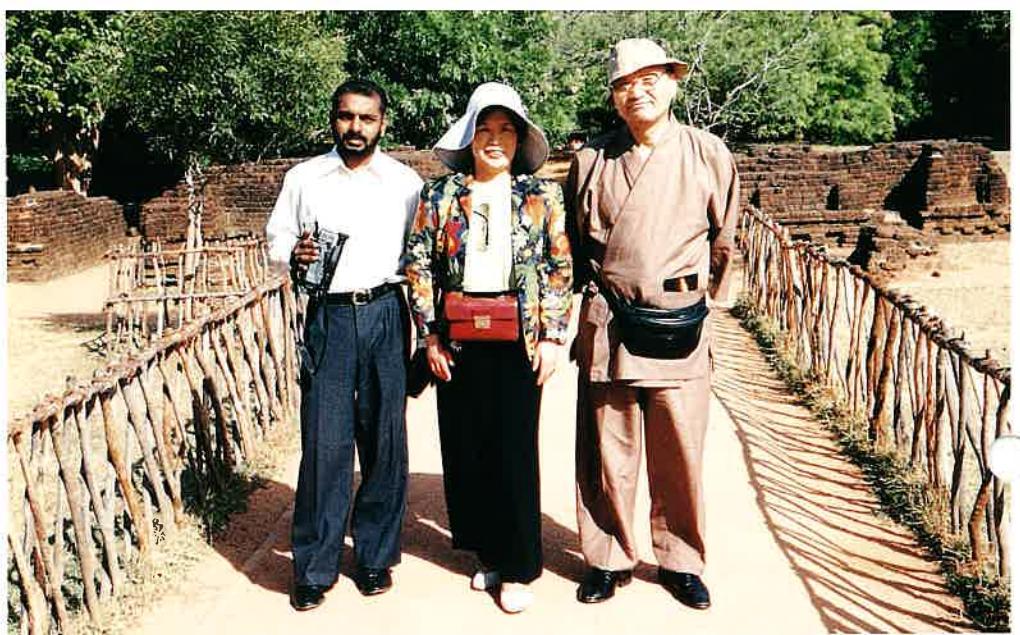


仏歯寺遠景



ダンブラ岩窟寺院  
(6月21日)

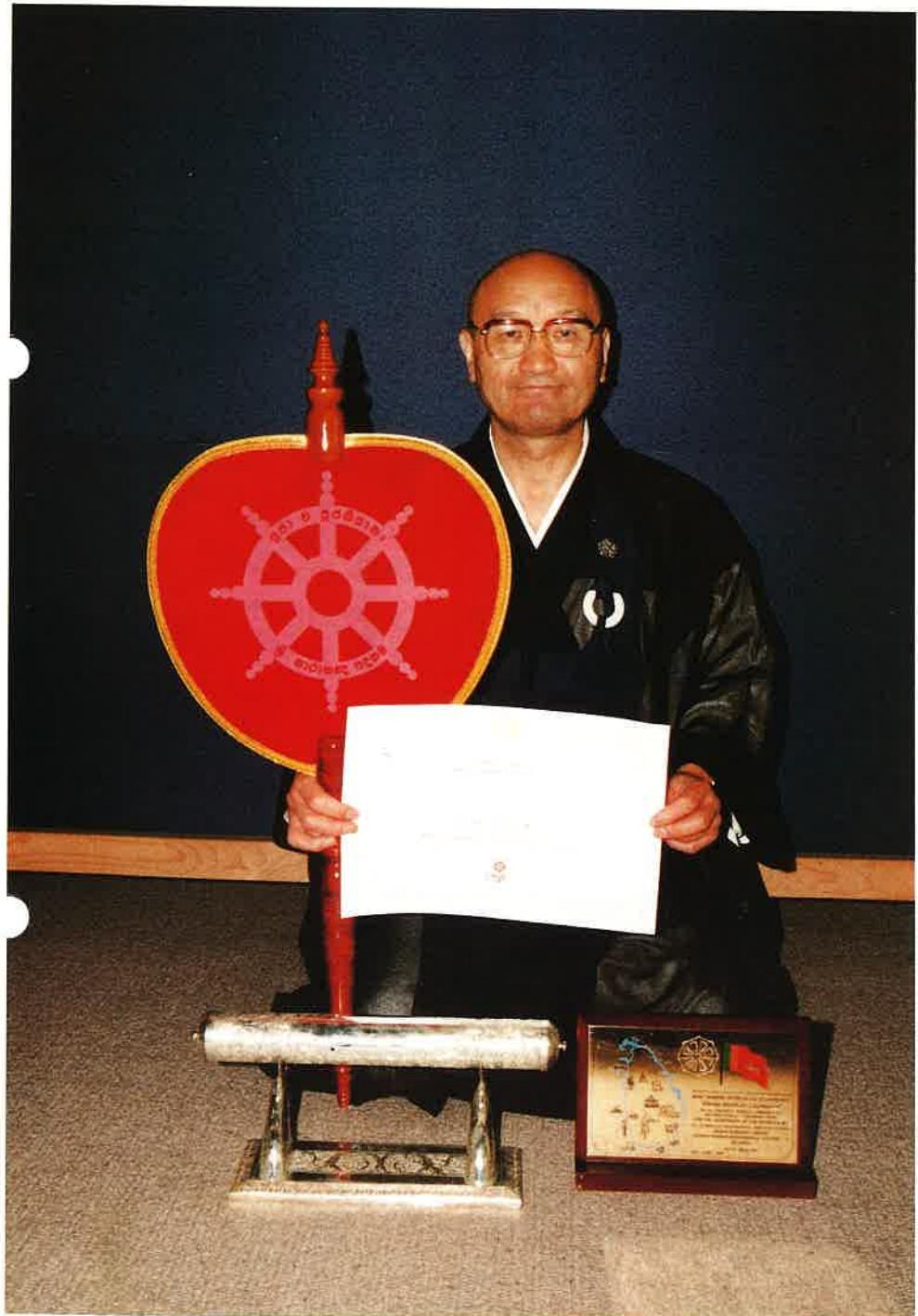




シーギリヤ・ロック  
(6月21日)

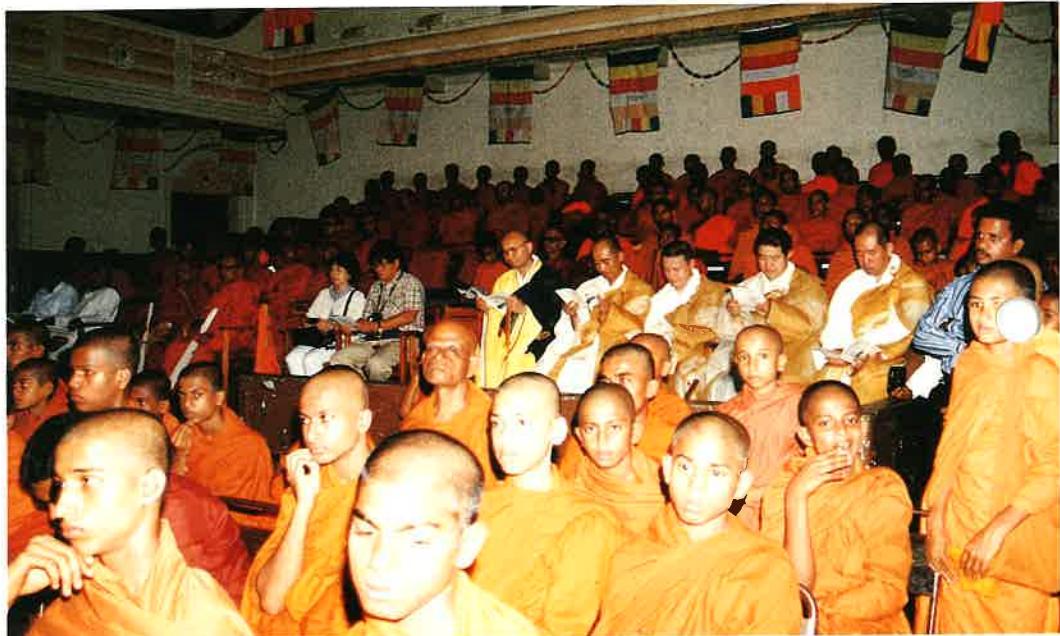
石窟の壁画  
「シーギリヤ・レディ」





記念楯と表彰状を持つ黒田住職（善光寺にて）

式典会場（クルネーガラ市公会堂）





大歓迎を受けて式典会場へ



お祭りのような歓迎ぶり





幼稚園訪問 子どもたちの歓迎（6月19日午前）



力 ラー ■ 黒田住職 「国際栄誉賞」受賞

● スリランカ・サラナンダ財団から「国際栄誉賞」受賞

福田 孝雄

特別読物 ● スリランカ仏教の潮流

黒田 武志

ご講話 ● 原点に戻つて素直に生きる

松本 富生

力 ラー ■ 東北福祉大学

萩野 浩基

学園めぐり ■ 二十一世紀が求める世界観

計良 龍成

特別読物 ● スイス・ローザンヌ大学 仏像・仏書贈呈報告

黒田 武志

力 ラー ■ ローザンヌ大学 仏像・仏書贈呈式

黒田 武志

● 仏像・仏書贈呈式を終えて

黒田 武志

力 ラー ■ スイス・ローザンヌ大学 贈呈仏書目録

黒田 武志

力 ラー ■ 亡き師を偲ぶ

黒田 武志

● 前角博雄老師三回忌・ロスアンゼルス禪センター三十周年

遠藤 博因

旅行記 ● パキスタン・ガンダーラの旅

伊藤 宣

父を語る ■ „わが父”伊藤喜三郎

伊藤 一章

特別読物 ● 唐招提寺舍利会開山忌に隨喜して

阿部 慈園

● 京都祖跡拝登について

黒田 博志

● 四育英生に辞令交付

錦戸 節子

特別読物 ● 山口勝隆上座法戰式

声 読者のたより

留学育英生からのたより

# 卷頭

善光寺住職 黒田武志

此の度、スリランカ政府公認の慈善団体「カラナダ財團」より一仏教を学ぶ若い僧侶や研究生の海外留学と、外国からの日本への留学生を支援する育英事業を高く評価するとの理由で国際部門の『栄誉賞と称号』を授与されました。

称号は「ダルマ・ケーラルティ・スマ・ローカルタ・チャーチ」(Dharma Keerthi Sri Lokartha Charie)で、仏教の発展に寄与した世界人類の幸福と繁栄に貢献するところの意味でおつさず。

これまでお世話になった育英会に関係された方々、又檀信徒の皆々様の大力の賜であり、深謝し心から厚くお礼を申し上げます。

去る五月には、ロサンゼルス禅センターの開創二十周年の式典に参列いたしました。前角博雄老師亡き後も、禅がアメリカに根強く息づいていることをひしひしと感じて帰りました。

成願寺山口晴通住職は白人社会での禅修行の実態を見聞しむじに禅を語り合つて

「垂米利加の禅堂を訪つ」と題して

拈來公案共論禪

公案を拈じ来つて共に禪を論じ

碧眼僧衆衣鉢伝

碧眼の僧衆衣鉢伝の

誰識往時開教志

誰か識る往時開教の志

坐堂窓外聽清泉

坐堂窓外清泉を聴く

と感激をよまれてあります。

また、今回、宗門関係の大学めぐりは、東北福祉大学をたずねました。萩野浩基学長は、「二十一世紀は心の時代であつ、大自然、大宇宙から逆に自己を照りし出し、自己をふりかえり、責任ある実践が明日の道」と語つてあります。

釈尊は「足る」と知るものは心安らかなり、足る」と知らざるもののは、富ありといえども貧し」と申されてあります。日々の生活を反省し、心して生きて行きたいものであります。

今こそ、我々は心から「社会」との調和をはかり、生もとし生むものの生命と自然を大切にし、国際社会の平和と繁栄と人類の幸福に向けて、皆様と共に大いに貢献をいたしたこと念じております。

スリランカ・サラナンダ財団から

## 「国際栄誉賞」受賞

——黒田住職と日蓮宗の石井師ら四人——

六月二十日に授賞式

スリランカで長年にわたり、教育・文化・宗教活動を展開した高僧、ウドウヌワラ・サラナンダ・セロの業績を世に広めるために創設された政府公認の慈善団体「サラナンダ財団」は「国際栄誉賞」として日本の横浜善光寺留学僧育英会の黒田武志理事長（曹洞宗善光寺住職）と、法華仏教国際交流協会の石井英雄会長（日蓮宗長照寺住職）をはじめ四人を選び、授賞式が六

月二十日に現地で執り行われた。

財団の名称になつてゐるウドウヌワラ・サラナンダ・セロは、今から約百三十年前に生まれた僧で、幼少の頃から聖職者に惹かれ、小学生



の時に出家した。その後、ダルマ・パーラ居士と出会い、インドの大菩提会に入会。以後二十二年間、インドで教育・社会・宗教活動に従事した。パーリ語を教え、大菩提会が発行する英文雑誌の編集者としても活躍した。

一九〇九年、スリランカの虐げられた人々の救済を目指して母国へ戻ると、寺院を建立し、出家を希望する子供たちを育て、寺を与えた。

セロの僧伽は大きな勢力を形成し、さまざまな社会活動を展開した。一九四七年にセロが死去した時には、僧侶の数は三千人を超えていたといふ。

セロの死後、宗教・教育・文化・民族活動など幅広い分野で活躍したセロの偉大な足跡を顕彰するために財団が設立された。財団では毎年、若い僧侶や社会活動家、学者、仏教の外護に尽くした信徒などを選んで「栄誉賞」を贈り、その業績を称えている。

スリランカから日本への留学生は三人、日本からスリランカへの留学生は四人にのぼつてい

今年度の受賞者は十一人で、そのうち、日本人の黒田師と石井師はじめ法華仏教国際交流協会のメンバー四人は「国際栄誉賞」に選ばれた。

黒田住職は横浜善光寺留学僧育英会を設立し、仏教を学ぶ若い僧侶や研究生の海外留学、外国から日本への留学生を支援する育英事業を長年続けてきた。また、石井師ら四人は、法華仏教国際交流協会の活動を通じて、湾岸戦争の際の平和運動や、子供に対する福祉活動、古代遺跡の保護、スリランカの民族問題などに努力してきたことが高く評価された。

る。

授賞理由の中で、財団は黒田師に対し「この育英会は世界の仏教修学僧に奨学金を与えていた。これまで師は七人の者にスリランカに対する留学奨学金を与えてきた。他の十七カ国へも八十一人に奨学金を提供している。われわれは尊師の活動と献身を評価する」と称えている。

### 「ブッダの心で生きてゆく」

授賞式は六月二十日、シンハラ王国の首都だったクルネーガラ市の公会堂で挙行され、会場には千人を超える僧侶や信徒が参集し、スリランカ仏教の最長老であるマハナヤカ派のウエヴェデラニヤ・メダランカラ大僧正、ラタナヤケ国会議長、ロクバンダラ前文化教育宗教大臣、セクラジヤパティ中央州議長、財団のゲムノアビヌマル理事長、クレトウンガ文化教育宗教大臣、シニセーティクレ建設大臣ら要人が参列す

る中で栄誉が称えられた。  
盛大な歓迎を受けて式典に臨んだ方丈は、ラタナヤケ国會議長から团扇の形をした記念楯（タラパット）と称号「ダルマ・ケールティ・スリ・ローカルタ・チャリエ」の表彰状を受けた。

受賞者を代表して黒田住職が謝辞を述べ、「伝統ある古い都で栄誉ある賞を受けたことを光榮に思う。日本とスリランカは共に仏教の国であり、釈尊の教えを信奉している。人類が釈尊の教えにより平和になるよう願い、ブッダの心で生きていく」と決意を披瀝した。

# スリランカ仏教の潮流

福田孝雄  
(駒大非常勤講師)

善光寺方丈黒田老師の長年に亘り取り組んで  
こられた留学僧育英会の事業が、国際的に高い  
評価を受けてきた。今般、スリランカの権威あ  
る財團から特に選ばれて、表彰されたことは、  
まさにその証左であろう。

ここで、仏教国スリランカの歴史を仏教史の

面から、ご紹介しよう。

スリランカの歴史書は『ディーパワーンサ』(島  
史)、『マハーワンサ』(大史)、『チユーラワンサ』

(小史)、及びその注釈書が中心である。それら  
によると、ブッダは在世中三度スリランカを訪  
れたと言う。(一)同島中央部のマヒヤンガナを訪  
れ、ヤツカ(夜叉)の集団を追い払った。(二)次  
に北部ジャフナ近くのナーガディーパ島で、王  
達の紛争を止めさせるため訪れた。(三)カリヤー  
ニ地方(コロンボ郊外のケラニヤ)の統治者ナ  
ーガ王の招請によるものだと言う。以上三つの  
地は聖地として、現在篤い信仰の対象となつて

いる。この仏足跡の由来は、神話的領域に属し、史実とは言えない。

スリランカに仏教が伝来したのは、デーヴアナム・ピヤティッサ即位の翌年である。インド統

一最初の王アソーカの即位十九年に、アソーカ王の王子で出家したマヒンダ長老と四人の比丘及びマヒンダの甥の沙弥（少年僧）スマナが、首都アヌラーダプラの近郊の山に来た。王はアヌラーダプラに大精舎（僧院）を建立し住せしめ、王自ら帰依し人々にも帰依させた。この大精舎に伝来した上座部仏教は、現在まで存続している。その後インドから仏舎利を請來、塔園に塔を建て崇拜し、ブッダゆかりの菩提樹も貢い植えたと言う。

ワッダガーマニ・アバヤ王（B.C.四三年頃）の時代、正法伝持の目的で聖典の書写が行われた。この王はマハーティッサ長老のために新たにアバヤギリ（無畏山）に寺を建て、その弟子達が

そこに拠つて一派を立てた（無畏山寺派）。この王の將軍ウッティヤがダッキナーギリ（南山）に新寺を建立、後にこの住僧が一派を立てるようになる。

インドに大乗仏教が興り、三世紀前半頃にスリランカにも伝来した。三世紀後半在位のウォーハーラカ・ティッサ王が方広派（大乗派）を、大臣カプラに破壊させた。ゴーターバヤ王の時、無畏山寺派の方広派六十人を対岸に放逐したと言ふ。その後、マハーセーナ王の時、方広派の一人サンガミッタ長老の進言により大精舎寺が破壊され、無畏山寺に移されて無畏山寺派は隆盛を極めた。

次のシリ・メーガワンナ王は敬虔な仏教徒として無畏山、大精舎両寺を資助し、インドより仏牙（歯）を請來し王宮内に奉安した。以後仏牙はスリランカの至宝、特に正統の王のシンボルとされた。中国僧法顯、三藏はインド巡歴の帰

途A.D四一〇—四一二年の間に来訪『仏国記』に、  
仏牙の無畏山寺での祭について詳述している。  
法顯三蔵はスリランカで得た弥沙塞律、長阿含、  
説一切有部系の雜阿含などを中国に将来してい  
る。

五世紀中頃、大註釈家ブッダゴーサが、大精  
舎伝の教義を整理しヴィスッディマッガ（清淨  
道論）を著わし、パーリ語の沢山の註釈書類を  
も書いた。

唐の玄奘三蔵法師はA.D六二八年頃南インドを  
巡歴し、スリランカについて耳にしたことを『西  
域記』に記している。ダートー・パティッサの晩  
年からカッサパ二世の初め頃、仏教の迫害があ  
つた。王統史の作為的変更により、カッサパ二  
世以後釈尊入滅年代はB.C五四四年となり、現在  
南方仏教ではこの説に従っている。

八世紀初め密教を中国に伝えた南インドの金  
剛智三蔵が、またその弟子の不空三蔵も、スリ



シーギリヤ・ロックから見たジャングル

ラカの地に足跡を残している。一時、密教がインドより伝来、盛んになつたこともあつた。十世紀—十一世紀インドのチョーラ国の侵入で、仏教は衰退した。十一世紀後半ヴィージャヤバーフ王はラーマンニヤ（現ミャンマー）王アノーラタに依頼して、三藏に通曉の高徳の僧を招聘、仏教復興に尽力した。その後、上座部仏教が勢力を回復した。十二世紀から十四世紀にかけて、スリランカの王室も仏教も受難の時代であった。

一五〇六年初めてポルトガル人がコロンボに来て欧洲人との交渉が盛んになつた。一六五〇年頃からはオランダがポルトガルに代つて、コロンボを中心とする海岸一帯を領有した。その間一五九二年即位のヴィマラ・ダンマ・シリヤ王は、ミャンマーのアラカン地方から長老を迎えて上座部仏教復興をはたし、シリヴィージャヤ・ラージャシーサ王、キッティシリ・ラージャシ

ー・ハ王などが、ミャンマー・タイから仏教を逆輸入して復興をはかつた。一八一五年にスリランカは英領となつたが、その後も上座部仏教の牙城として存続し今日に至っている。十九世紀後半に西欧人の仏教の「発見」により仏教研究が盛んとなり、パーリ語仏典の整理編纂の事業が活発に行われ、リイス・ディヴィス夫妻やオルデンブルクの偉大な業績が陸續として世に出された。

上座部仏教ないしテーラワーダ（長老派の意味）はブッダの直接的説法の記録と伝えられるパーリ語仏典を奉じ、戒律の遵守を徹底し僧侶は完全出家制である。第二次世界大戦後、独立国家となつた。現代のスリランカでは仏教が宗教的存在として国家統合から個々人の心の平安などに至るまで、集団と個人のあらゆるレベルで重要な役割を果している。

—ご講話—

# 原点に戻つて素直に生きて

善光寺住職 黒田武志



私は常日頃から、世界は一つだとかたく信じています。韓国国立精神文化研究院で哲学博士の丁海昌先生にお話を聞いていただきましたが、言葉は違つても、意味するところは私の思つていることとまったく同じ。やはり心は一つ、世界は一つなのだなあとあらためて実感いたしました。

として宗教がとても大切になつてくる…。神仏をおそれ敬つていた頃の人々は、世界のあらゆる人と、そして自然と調和して生きていく術を知つていました。そんな人間の原点の、清らかな魂に戻つて日々を生きていきたい、そんな気持ちになりました。

私は毎朝五時前に起床し、朝のおつとめをさせていただいております。この頃起きるのがつらいときがあつて、もう私も六十歳ですし、も

しかしたら仏さまが、「あんまり無理をするなよ」とおっしゃっているのかなあと思うこともあります。

しかし、身体がいうことをきかなくなるまでは、みなさまに喜ばれるように、仏さまに「よくやつた」といっていただけるように、命けずつてでもやつてみようと考えております。「ああ、これでよかつたんだ」と思えるような生活をしてみたいと。

『気は長く 勘めは堅く 色うすく

食細うして こころ広かれ』

これは天海大僧正が徳川家康に送った言葉ですが、私もこの言葉を一日一分たりとも忘れず、心に念じつつ生きていくことが大切と考えています。

毎朝聖徳太子さまのお姿にお参りし、一時間半ほどかけて六十数個のお水を差し上げながら、私はこう念じております。

「天海大僧正のお言葉のように、人の意見に素直に耳を傾けて、しつかりと仕事をし、欲を抑えて、感謝しながらただける分だけ少し食べ、そして、和顔、愛語でやさしく思いやりの深い心を持って世界の平和のために生きたいと願った自分の原点・出発点に戻るんだ」。

たとえば、みなさまから、

「方丈さん、それではダメだよ」

とか、

「それは間違いだよ」

とおっしゃつていただいたら、大きな声で、

「ハイッ！」

と返事をして素直に、ありがたくお受けしたい。今年は、還暦を迎えてとくに、この“素直に生きていく”ということを目指に、一日一日を歩んでいきたいと考えております。

( 平成十年一月十日 )



# 心やわらかに今を生きる

善光寺住職 黒田武志

私は今年で満六十歳になりました。人生の一つの節目となる年に、そして九十六年の歴史と伝統を持つ大田原高校が新制高校となつて五十年を迎えるという記念すべき年に、母校でみなさんと会い、お話をさせていただく機会がいただけたことを、たいへん嬉しく思っています。

私の人生は今、三分の一を終わろうとし、大田原高校を卒業してからは四十二年が過ぎようとしています。何十年ぶりかで母校の前に立ち、

自分がこの地で青春を送った日々のことを、昨日のことのように思い出しました。私が入学したのは、敗戦した日本が驚異的な立ち上がりを見せようと努力していた昭和二十九年。物質的に裕福な時代に生まれ育つたみなさんは想像がつかないかもしれないが、螢光灯のスタンドが開発され、入学祝いとしてもらつたり、LP版のレコードがやっと出始めた、そんな時代でした。町の中には、石炭を燃料とする機関車が、

ポップポーツというかわいい汽笛をあげて走つていた……。

四十数年前、堀内肖吉同窓会会長ご指導による剣道部が優勝し日本一となり提灯行列が行われた。新しい校舎の前に立ち、そんな四十数年前のできごとを思い出し感無量になりました。学問だけではなく、体の鍛錬の方でもトップクラスという伝統が今も続いていることに喜びでいっぱいの気持ちになります。

うわべを飾るのではなく、中身を磨いて生きる、「質素堅実」という校訓は、私たちの一万七千人の先輩の時代から脈々と受け継がれてきたすばらしい精神です。学問を深めながら心身をよく鍛錬し、真に内面のしつかりした人格形成を目指しているこの高校に学んでいるということとは、誇るべきことだと思います。

きっとみなさんも、四十年後、五十年後、人生の二分の二ほどを終えた年齢となり、高校時

代を思い出す日がくることでしょう。もしかしたら、母校で講演する人もいるでしょう。自分の歩んできた道を振り返り、無限の可能性を持つ若い人たちに、何を言えるか。自分はこんなふうに生きてきたと、胸をはつていえるよう、一日一日を大切に生きていくほしい。

私の場合は、あつという間に月日が過ぎて、振り返れば、「俺は何もしてこなかつたなあ」というのが本当の感想です。「黒田、おまえは六年何やつてきたんだ?」と誰かに聞かれたら、「別に何もしてないよ」と飄々として答えると思いません。ただ、私は僧侶ですから、周りにいる方をみな師として、何千年も伝わるすばらしい仏の話を聞かせてもらえ学ばせていただける機会があり、私もまた、その話を伝えすることができるだけです。みなさん、一人ひとり、その話の中から何かを感じてください



ありました。しかし、今思えば、過去のすべての苦しみや辛さは、自分を磨く貴重な体験であり、未来に大きくジャンプするためのバネとなつたことをしみじみ実感しています。かれ三十年前に私は、「人間は死はない。何か大きな力に生かされている」ということに、さまざまな体験を経て気がつきました。私が、大田原高校の校訓「質素堅実」を改めて胸に刻みこんだのは、それから本気で仏の道を学びはじめた三十年間だったように思います。

### みな等しく苦しく、みな等しく尊い

さて、みなさんは、仏教の教えというのは、どういうものかご存じでしょうか。仏教という

のは、仏陀（目覚めた人・釈迦の尊称）が説いた教えることで、今から二五〇〇年前にインドに起こり、ほぼアジア全域に広がりました。

お釈迦さまは、本名をゴーダマ・シッダルダ

といいカピラ王国の王様の子、つまり王子として何不自由のない裕福な環境でお生まれになりました。しかし、幼い頃から、大きな樹の陰でもの思いにふけつてじつとしているような、考え深い子どもだったそうです。郊外に出て農耕する人びとをみれば、「牛や馬はなぜムチ打たれ働くかなければならないか、人はなぜ泥まみれになつて働くかねばならないか」また、自然の中にいれば、「蛙が虫を、蛇が蛙を、雉が蛇を、獵師が雉を……」というように、この世の中はなぜ何かを殺さなければ生きていけないのでだろうかなど、深く深く考えておられました。青年になるとますます、考えに沈まる日が多くなりました。

父親の王様は心配して、気晴らしに外出するよう言いました。お城には東西南北に門がありましたが、従者に言つて、東の門から馬車に乗つて出かけられるようにしました。するとそこ

には、顔は皺だらけ、頭は真っ白の腰の曲がったみすぼらしい人間がいたのです。

「あれは何者か?」とおたずねになると、

「あれは、老人です。人は誰でもあるのようになっていくのです」

と教えられ、お釈迦さまはよけいに物思いに沈みました。

日を改めて南の門から出ると、そこには、青白い顔をしてやせ衰えた人が倒れています。

「あれは病人。肉体を持つていても、誰しも病気になることを免ることはできません」とのこと。西の門から出ると、大勢の人が泣きながら白い布に包んだものを扱いでいくのが見えました。

「あれは、死人。人は誰でも一度は死なねばならないのです」

すつかりふさぎ込むお釈迦さまが最後に北の門から出たとき、そこにいたのは、大きな樹の

陰に静かに座っている人でした。やせており、身なりも粗末でしたが、たいへん平和的で気高く清らかな顔をした人でした。

「あれは修行者です。いつさいの欲望を捨て、ひたすら真理を求めておられるのです」

お釈迦さまはこの言葉を聞き、「これこそ私が進む道だ」と、出家をする決心をしたのです。

その他にも、親子・好きな人とも別れなければならぬ『愛別離苦』、嫌な人・嫌いな人といつしょに暮らさなければいけない『怨憎会苦』、財産・地位・名譽・知識・技能など欲しいものが思つように手に入らないという『求不得苦』、生まれて体を持っているから食べたり着たり、家庭を持つたりしなければならないという『五蘊盛苦』——といった四つの苦しみがあり、それらを総合して、『四苦八苦』と数える人生の苦しみ

とされるのです。いつたいこの苦しみからどうしたら逃れられると思いますか。

仏教は、これらの苦しみ・迷いからすべての生きとし生けるものを救おうとする教えなのです。お釈迦さまはこの答えを求め、そして悟り、八十二歳で入滅されるまで歩いて歩いて歩き抜いて仏の道を説いて回られました。

有名なお話の一つに、『四河に入つて元の名なし』というものがあります。お悟りになつたお釈迦さまが生まれ故郷に戻つてまいりました。

感動的なすばらしいお話に貴族の青年たち、また、お釈迦さまの実の弟王子までみな弟子になりました。お釈迦さまの頭を剃りました。そして、その床屋さんも「私も弟子となつてついていきたい」と頭を剃りました。さあ、入門の式である得度式では、兄弟子の足を三度礼拝する儀式があります。貴族の青年たちは、これまでの奢り高ぶつた心を捨てて無一文で托鉢する生活に

入るのだから、謙虚な気持ちになるためにこれまで身分の低かつた床屋さんを自分たちの先頭に立たせることにしました。床屋さんの次が弟王子という順番です。しかし、弟王子はどうしても床屋さんの汚い足を拝むことができません。ついさきまで自分は王子の身分、相手はかけ離れた身分だったのです。どうしても頭が下げられず心で苦しんでいる弟王子にお釈迦さまは言いました。

「インドを流れる大きな四つの河は陸地を流れれるうちには別々の名がついているが、海に流れこんでしまえばみな同じ海の水となるのだよ」

これは、人間は平等に尊厳であることを示されたものです。貧富・学習能力・運動能力・体格：みなさんは人とのさまざま違いやつて、優越感を持つたり劣等感を持つたりしたことがあるかもしれません。しかし、人間はそれぞれ、みんな違つて、そしてみんな尊いものな

のです。みんな同じ尊さを持つ海の水なのです。

苦しみなしでは歓喜なし

お釈迦さまの教えを伝え受けられた高僧に、  
達磨大師だるまたいしという方がおられます。中国禪宗の初代の祖師で、今から一五〇〇年ほど前にインドから中国の梁りょうという国に渡つてこられました。

梁という国には、武帝という、たいへん熱心な仏教信者である王様がおりました。インドから名高い高僧・達磨大師が来たということできつそく城に招きもてなそっとしました。

「インドからこられた高僧方は、みなすばらしい經典を持ってきてくださいますが、あなたさまはどのようなものを持ってきてくださったのですか」

と武帝が聞くと、

「私はお経みたいなものは一冊も持つてきていません」

とそつけない返事。びっくりして武帝は、

「私は大きな寺もたくさん建て、坊さん方に供養し、困つた人民を助け、お仏像も造らせ、自らも修行にはげみ、世間では私のことを“仏心天子”などと言つてゐるそうです。どんな功德があるでしょうか」

と問うと、

「どれもこれも功德にはならない。無功德だ」という手厳しい答えでした。

どんなよいことをしても、それを鼻にかけたり、自慢したり、報酬代償を求めようとするようでは、高慢になるだけで功德にはならない。人が私のことを尊敬するだろうというものは、自分の感情や欲望に縛られるものであり、そんなものは功德とは言わない、と、達磨大師はおっしゃりましたかつたのです。

「ではどうしたらいいんです。仏法の究極にありがたく尊いことは何なんですか？」

「廓然無聖（カラリと晴れた青空のように、何もない。ありがたいものなど仏法には何もないのだ）」

武帝は驚き、

「では高僧であるあなたは、尊い聖者ではないのですか」

「さあ、知らんねえ」

と達磨大師。

ここで武帝の機嫌をとつておけば、ぜいたくな生活ができただろうに、達磨大師は迷える人々を救う誓願一筋に生き、小さな蘆の葉の船で揚子江を渡られたと伝えられています。

人は、高慢な心になりやすい生き物です。最初は無償の愛で施していくても、人からほめられたりおだてられると、澄みきった心ににごりが見えてきます。

日本にも、光明皇后という、貧しい人々のために献身的に尽くした方がいました。聖武天皇

のお妃だつたその方は、聰明で容姿端麗、その上仏教に帰依して貧しい人の医療所や孤児院を建てたりして尊敬を集めた方でした。しかし、あまりみなに褒め讃えられ、光明皇后の心にほんの少し、傲慢な気持ちが生まれそうになりました。そんなとき、天からの声がして、

「あなたはこれから千人の貧しい人びとを風呂に入れ、体の垢も心の垢も落とし清めていきなさい」

とお告げがありました。光明皇后はその通り、貧しく汚れ切つた人々の体を愛情こめてていねいに洗つていきました。そして、九百九十九人洗い終え、最後の一人となつたとき…。そこにあらわれたのは、全身膿<sup>うみ</sup>だらけの老人でした。皇后は一瞬ひるみました。洗つても洗つても膿は落ちない。しかしそのうち仏のような気持ちになり自然に、自分の口で、一ヵ所ずつ膿を吸い出していったのです。最後の膿まで吸いおわ

つたとき、その老人の姿は阿閦仏あしづぶつという仏さまの化身に変わりました。光明皇后の傲慢になり、そうな心を試そうとしたのです。光明皇后は、多くの苦しみのあと、眞の歓喜を味わうことができました。

本当の歓びは、苦しみのあとでやつてきます。今、みなさんが苦しいと感じているのなら、それは試されているのかもしません。より、尊くすばらしい人間となるために。

先にも言いましたように、世の中にはいろいろな苦しみがあります。精神的苦痛、肉体的苦痛。たとえば、大田原高校では、二十六時間かけて那須野が原八十五キロを歩くという伝統行事がありますね。「質素堅実」という校訓をはつきりしたかたちで具現化した行事で、強歩を通じて規律ある態度と相互協力の精神を培い、校訓に相応しい不撓不屈の精神と強健な体力を養うのを目的としているそうです。これは私たち

の想像を絶する精神的肉体的苦痛をともなう、すさまじい鍛練法・苦行だと思います。私は、小学生が大高生にあてて書いた手紙を読み、涙が止まらなくなりました。

『大高生のおにいさんたちが、今年も八十五キロ強歩をやると聞きました。去年は、真っ暗い中、夜も寝ないで歩き、ねむくてねむくて道路に座りこんだ人もいたとききました。足にマメがいっぱいできて、足を引きずるようにして歩いたというお話を聞いて、胸がいっぱいになりました。つかれても、ねむくとも、足がいたくてもがんばり続けたおにいさんたちは、すぐくらいなあと思いました。今年はぜひ応援に行きたいと思います。大高生のおにいさんが最後まで歩き続けて、全員がぶじに大高にとうちやくするように戸田小学校のみんなで応援しています。がんばってください』

ああしなさい、こうしなさいと口で説明する

よりも、汗しているその後ろ姿が一番心を揺さ

ぶる。感動させるんですね。強烈な苦痛に耐え、完歩したあの達成感、満足感、充実感、そして自信。そうした歓喜をかみしめられる瞬間というのには、最高のものです。人生は苦しい。でも必ず、歓喜の瞬間がおとずれるということを、みなさんは高校時代に体験的に得られているんですね。本当に、すばらしい、世界一の宝です。

### 心明るく 心清く

八十五キロ強歩というのは、まさに、人間の本質的な修行の一つであると私は思います。戦

後は、人間の本質的な修行をしていない秀才というのが世の中にはたくさん出ていき、指導者となつて近代の組織を動かしてきました。日本

は、知識的・技能的にたいへんな伸び方をし、優れた人材が数多く生まれました。政府は学校制度をつくり、小学校から大学まで知識・技能

を中心とした教育を行つてきました。

その結果、人間にとつて最も大切な“心”的教育がおろそかになつたように私には思われます。みなさんはいずれ、”父親“になるだろうし、教師の道を選び歩んでいく人もいるかもしれません。人間としての”心“”特性“”習性“を次代に伝えてくれたらと願わずにはいられません。

心中でも、「親孝行の心」ほど美しいものはないと私は思います。みなさんは、今、胸をはつて孝行していると言えますか。今は言えなくともいい。でも、いつかは気づいてほしいのです。

野口英世博士という人とお母さんの話をします

しよう。

ご存じの通り、野口博士は黄熱病という恐ろしい風土病研究のためアフリカへ渡られ、苦しむ人を救つているうちに自分が感染し亡くなられたという日本の誇る世界的なドクターです。

福島県磐梯山のふもとの農村で生まれ、幼いときには圍炉裏に転がり落ちて手に大やけどをし、右手の指がかたまつてしましました。『てんぼう』と蔑まれるのを、お母さんは血を吐くような苦労をして医者にかけ、使える手にしてもらいました。その頃から野口博士は、自分も気の毒な人を救いたいと医学の道を選ばれたのです。

世界的有名になつた野口博士がアフリカからいつたん帰国したとき、全国から講演依頼が殺到しました。野口博士はそのとき、「少しでも母のそばにいたいので、ともに連れていけるのなら」

という条件で講演を引受けたのです。東京、大阪、名古屋、京都などへ行くにも、福島から連れてきたお百姓さんであるお母さんといつしよ。講演会あと紳士がざらりとならば晩餐会でもお母さんを横にすえて、ていねいに洋食の説

明をし、自分のナイフとフォークで小さく切って食べさせたとか。また、お母さんの手を引いて、大阪の箕面へ紅葉狩りにいったときは、休憩した茶店でも「おつ母さん、おつ母さん」と子どもが甘えるように慕つていろいろと世話をしたそうです。その様子を見ていた茶店の女将は涙を流し、後年へそくり何十万円をはたいて、箕面公園に野口英世博士の銅像を建てられました。

偉大になつても変わらず母を尊ぶ野口英世博士の心というものは、質素堅実そのものであると私は思います。

こんな親孝行な話とは逆に、日本には身を引き裂かれるような悲しい話も残っています。姥捨て山という実際にあつた話です。

日本などとくに東北地方は昔はたいへん貧しく、食いぶちを減らすため間引きも行われたし、老いて役に立たなくなつた自分の両親を二度と

戻れない山奥へおぶつて捨てにいったのです。

ある男も、泣き泣き母親を背負つて山へ入つていきました。途中途中で母親がボキンボキンと小枝を折つている音がする。この枝を目印にうちにどつてくるつもりだろうかと男が思つて、母親をトンッと降ろしたとき、母親は男に言いました。

「今までどうもありがとう。おまえ気をつけて

帰りなさいよ。迷わないように小枝を落としといたから、それを見ながら帰りなさい」。

親というものは、こういうものなのです。

みなさんに、親孝行していただきたいと願う理由がわかつていただけたと思います。

さて、大田原高校の学習の指針は一つ一つがまさに仮の教えに通ずるすばらしいものです。

一、夢なきところに努力なし

一、目標なきところに到達なし

一、計画なきところに実行なし

一、練成なきところに熟成なし

一、反省なきところに進歩なし

一、苦悩なきところに歡喜なし

この指針は、学習ばかりでなく、運動部、文化部、そして大きくみれば人生指針と言つてもさしつかえなく、この六つの指針を胸に刻みこんで生きる大高生のみなさんは、卒業してもどんな困難をも乗り越えていけると思います。

では私の方からは、このような言葉をみなさんに送りたい。

『心明るく、心清く。そして心やわらかに』。

学習も大切。運動も大切。しかし、まずは心を明るく清らかにすること。そして、『ねばならない』という気構えを捨てて、ありのままを柔らかく包み込み受け止める心を持つこと。布施をすればするほど富が得られるように、心さえ明るく清らかであれば、学習能力も運動能力も、自分が必要だと思ったものは自然に備わつてしま

ます。

仏の教えの中には、八正道—正見（ものごとを正しく見る）・正思惟（正しい考え方）・正語（正しい言葉）・正業（正しい行為）・正命（規律ある生活）・正精進（正しい努力）・正念（正しい自覚）・正定（静かな心）というものがあります。また、六波羅蜜—布施（思いやり）・持戒（まじめ、しつかり）・忍辱（質素・我慢強い）・精進（勤労意欲）・禪定（落ちつき、物静か）・

智慧（向学心・向上心）というものもあります。これらを常に頭の中ににおいて歩んでいくことが、心明るく清らかな人となる一つの方法だと思います。

一、ありがとうございます感謝の心  
と唱えてみるのもいいでしよう。できるだけ、声を出して。幼稚園時代に戻ったように、恥ずかしがらず大きな声で。

さて、いろいろと私なりの話をしてまいりました。最後に、本当に心から、このようにみなさんと会える機会がいただけたことに、三顧の礼をもつて感謝いたします。一期一会—私はすべての出会いを、一生にただ一度だけかもしれませんこの上なく大切なチャンスだといつも思つております。このすばらしい出会いを私の宝として生きていたいと思っております。

（第96回栃木県立大田原高等学校創立記念講演  
より抄録）

日常はもつと簡単な言葉で、  
一、すみませんという反省の心  
一、はいという素直な心  
一、おかげさまという謙虚の心  
一、私がしますという奉仕の心

# 羅漢の如くに

——講演を聴いて——

作家 松本富生

(日本ペンクラブ会員)

去る四月十八日、黒田武志君の、「心やわから  
に今を生きる」という演題のもとでの講演を聴  
いた。その折りの、私なりに感じた幾つかのこ  
とを記してみたい。

栃木県々北の中心都市とも言える、人口五万  
余の大田原市に県立大田原高等学校がある。黒  
田君と私はその高校の、昭和三十一年三月に卒  
業した同期生である。同校は明治三十五年に栃  
木県立大田原中学校として創立され、昭和二十  
三年には新制度のもとで栃木県立大田原高等学

校として生まれ変つて九十五年の歴史を刻みつ  
つ今日に至つてゐる。「質素堅実」を校訓として  
今日まで一万九千余の卒業生を世に送り出し、  
各界に著名な卒業生がいる。

私たちが卒業した昭和三十一年という年は、政治的には日ソ共同宣言（日ソ国交回復）が行われ、日本の国連加盟が決まった年であり、経済的には神武景気が云々された時でもあった。

文化的には週刊誌ブームの始まった年であり、その前年の昭和三十年には、「もはや戦後ではない」という言葉が生まれた。経済的・社会的情況を背景として戦後世代の最初の自己主張として世間の注目を集めた、石原慎太郎の小説『太陽の季節』が芥川賞を受賞した。いわゆる「太陽族」という言葉がはやり、「慎太郎刈」というヘアースタイルが若者達の間で流行した。

しかし、そう言つた現象は経済的に恵まれた都會派の若者達の間でのことであり、私たち田舎出の苦学生には無縁の世界でもあつた。

黒田君は講演の冒頭に於いて、「四十数年前のことを様々に思い浮かべると感慨無量たるもののが迫つて来る」と言つてその面立ちを紅潮させ

ていた。その心底には、貧しさの中での青春時代の様々な呻吟の思いがよぎっていたのかもしれない。

多くの来賓の先輩方と私たち八回卒の同期生、千名近い生徒達を前にして、黒田君はやや緊張の面持ちで話しを進めていた。母校にかかる多くの人々の前で講演をするという気負いがあつたことは当然のことであろう。

「一期一会という言葉があるけれども、私が君達を前にして話しをするのは今日が最初で、かつ、最後かもしれない」と、生徒達に眼差しを向けて黒田君は言つた。だから、私の言うことによく耳を傾けよ、という意おもいがあつたのに違ひない。生徒達は静かに聴き入つていた。中にはねむつてしまつてゐる生徒もいたが、それは多勢の中での一つの姿であり、致し方のないことではあつた。

黒田君は生徒達を諭すように話しかけてい

た。その表情は喜怒哀樂の色ゆたかに、時には喜びの情に歯を白くし、時には怒りに燃え立ち、或る時には涙を浮かべんばかりに哀しげであり、そして、時には楽しげでもあつた。

私は黒田君の様々な表情を見ていて、ふと、かつて埼玉県のある高等学校に講演に出かけた日のことを思い起こしていた。生徒達に私の話したことが理解出来ていたのかどうかと思いまどいつつの帰路に立ち寄った、寄居町の小林寺の五百羅漢の様々な姿を思い出していたのだ。

幾多の羅漢像の、ある者は天を仰いで腹をかかえて笑つており、ある者は地に目を落としてもの哀しげであり、ある者はおどけて踊つているようでもあり、そしてある者は苦行の様につたり、怒りをあらわにしている者もあつた。山頂に至る道に座している（或いは横になつている）様々な羅漢像は現世の私たちの、生きとし生けるものたちそのものの姿であらうと思



つた。私に似ている羅漢像もあるような気がした。黒田君に似ている羅漢像も、私の記憶の中から甦つて来ていた。羅漢の様々な姿で黒田君は生徒達に語りかけていたのだ。

黒田君は托鉢僧としての修行時代の苦しかつたことなどを話していた。十円のパンを食べ、十六円の銭湯で埃まみれの身体を洗い、一合三十八円の酒を飲んだ時代のことである。極限とも思える経験が基となっていたのであろう。人間は精一杯生きればどんなことがあっても絶対に死にはしないのだと力をこめて言つた。

四苦八苦することが人生であるとも言つた。四苦八苦とは、人生の、考えられる限りのあらゆる苦しみのことを意味する。仏教に於いては、人生に於ける生・老・病・死の四苦に、愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五蘊盛苦の四苦とを合わせて八苦と言うのだが、生徒達には少々難解なことであつたのかもしない。

どうしたら四苦八苦を取り除くことが出来るだろうか。

人間は本来百年単位で生きられるはずで、その、生きている過程に於いて答えをさがし出せばよいのだと言つた。

人生とは、何が不幸で、何が幸運かわからぬ。つまり、『人間万事塞翁が馬である』とも言つていた。古代中国に於ける五胡十六国時代、国境の塞の近くに住んでいた翁の馬が胡の国に逃げて行ってしまった。数ヶ月もたつてからのこと、なんと、その馬が胡の国の名馬を連れて帰つて來た。翁の息子が喜び勇んでその名馬に乗つたのだが、どんな弾みなのか息子は馬から落ちてしまつた。それで足を悪くしてしまつたのだ。その一年後のこと、胡人が攻め込んで來た。國中の若者は皆戦いに出て戦死してしまつたのだが、翁の息子は足を悪くしていでの兵役を免れていて無事であつた。人生に

於ける禍福・幸不幸は変転して定まりのないものであるという諭話を語つた。

黒田君は故事を借りて無常なる人生哲学を生徒達に話しかけ、更に、世阿弥の能の世界でもある「姥捨山」の伝説を引き出した。

昔話に於ける姥捨伝説は日本全国至る所にあり、その基本的な筋立ては決まっている。村里に於いて、年老いた者はある年令に達すると口べらしのために人里離れた山奥の地に、その子によつて捨てられてしまうという内容である。

地方によつて基本的な筋立ては変えないで、小さな所では内容が少しづつ異つてしまふのだが、黒田君が生徒達に話した伝説は次のようなものであつた。

昔、ある若者が口べらしのために山奥に捨てようと、年老いた母親を背負つて奥へ奥へと分け入つて行くのだが、背中の老婆は道々小枝をポキリ、ポキリと折つていた。若者は母親のそ

のような仕種をいまいましいと思つていた。せつかく山の奥深くに分け入つてゐるというのに、母親自身が帰るための道しるべをしていると若者は思つてしまつたのだ。若者でさえ帰るべき道がわからなくなつてしまふほどの奥深い所に辿り着き、母親を背中から降ろした所、母親は若者に次のように言つた。「ご苦労だつたね、お前が無事に帰ることが出来るよう、道々に小枝を折つて道しるべを作つて置いたので、暗くならないうちに早くお帰り」と言つたのだ。若者自身が無事に帰ることが出来るようになると作つた道しるべと知つた息子は、己の心の浅はかさを思い知られ、ただただ絶句するのみだった。

そこの所を黒田君は羅漢のごとくなつて感動的に語り、会場は静まり返つていた。人生とは思うようにはならないのだ、曰く言い難いほどにつらいことがあるものだと、つまり、四苦

八苦するのが人生なのだと黒田君は語りかけているようであつた。そして又、子に対する親の愛情とはまさにこのように切ないものであると。

人間は傲慢になつてはいけないとも説いた。

何事もほどほどの所で、中道・中庸が仏教の教えもあり、たとえば、才能があつてあれもこれもいろいろなことをすると、人はどうしても傲りたかぶつた心になつてしまふ、誠めなければならぬことだと言つた。

終りの頃になつて黒田君は、「日常の五心」なるものに言及した。

### 一、すみませんという 反省の心

：（以下略）

各々の心のありかたが現代の子供達に欠けているものであり、翻つて考えると私たち大人の社会に於いても欠けているものであり、改めて考えさせられる「五心」であつた。演題の「心やわらかに今を生きる」には、この「日常の五

心」が大切なのだということを学ばさせられるひとときであつた。

以上、黒田君が講演した内容の大要を記してみたが、生徒達を前にして語つたものとは筋立てが相前後するものがあつたり、私なりの解釈を加えてみたりで、必ずしも講演を忠実に記したものではない。その上で私が記述したことが黒田君の講演の趣旨を削ぐものでないことを念じながら、多くの後輩達に人生に於ける教えの一つを説いたことに私なりの感謝の心を黒田君にささげたいと思う。

講演終了後、既に還暦を迎えた私たち同期生の二十数名の者は黒田君を慰勞すべく塩原温泉郷に集い、旧交を暖め合い、回顧の話に花を咲かせたのである。横浜善光寺の住職として、また、二十一世紀に生きる仏教徒の育成を目的とした海外留学僧育英会の理事長としての黒田武志君の今後のさらなる活躍を祈つてやまない。

# 仏教・禅の心が建学の精神

## 東北福祉大学



はぎ の こう き  
**萩野浩基**  
学長

1940年生。早稲田大学大学院(政治学)終了。  
ロンドン大学研究客員教授(外務省斡旋)、ア  
メリカセントオラフ大学客員教授、ハワイ大  
学客員教授及び、南京師範大学名誉教授・名  
誉理事を歴任、現在衆議院議員。  
主著:「感性のときめき・INSIDE JAPAN  
bilingual」(ぎょうせい)「転換期の社会福祉  
論」(学陽書房)「環境・都市問題」(教育社)  
「世界政治ハンドブック」(有斐閣)



本館

2号館

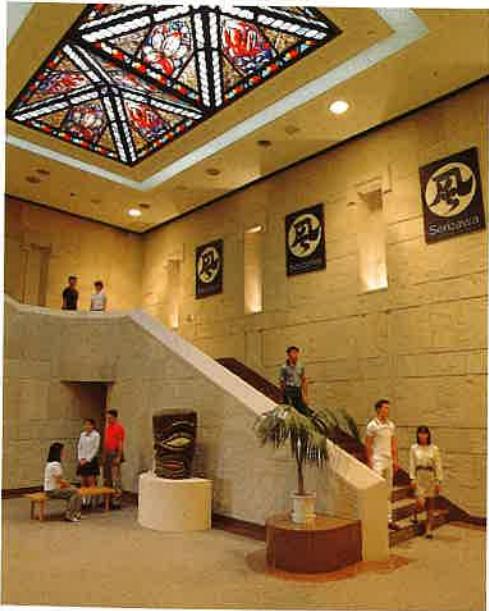


せんだんの柱(全景正面)



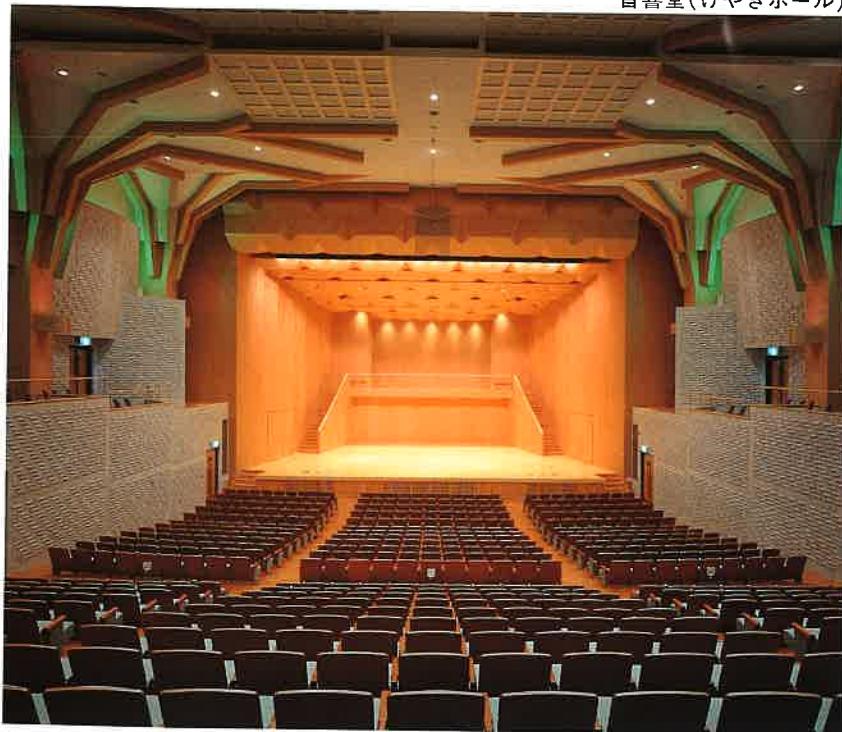
美術館正門





芹沢銈介美術工芸館

音響堂(けやきホール)



# 二十一世紀が求める世界観

—Toward the 21st Century New Ways of Thinking—

東北福祉大学学長 萩野 浩基

「己」を振り返り、責任を帯びることこそ再起の原点である。

「自己」をはりびて万法を修證するを迷とす、  
万法すすみて自己を修證するはさとりなり」(道元)

哲学・倫理・宗教なき科学技術は羅針盤のない船であり、科学技術なき哲学・倫理・宗教は帆を失った船である。

今や、人間社会は「羅針盤」を失った船のようである。人は進む道に迷うとき、自己を疑い、側面を内にもつた社会にしてしまった。

その典型が大量生産と大量消費である。さらにお金を公分母にし、すべての価値を計り、知らぬ間に今日の現実社会を作ってしまった。大量生産、大量消費とは、言い換えれば「物」を無駄にしましようという運動である。

「物」を無駄にしましようということは「物」を作る人間の労働を無駄にしましようということになる。労働を無駄にしましようとは、人間を無駄にし、自然も無駄にしましようということに繋がる。

二十一世紀はもつと大自然の中の人間存在といふことを中心にした世界観を必要としている。

人間を中心におくといつても、十七世紀の近代哲学の父デカルトやフランシス・ベーコン以来の個人主義的なものに偏った世界観では人類は自滅の道を歩むことになりかねない。地球という惑星の中で生きる人間、太古より

四大・火水気地から成るとみてきた大自然の中で他の生き物と共に生きる人間としての捉え方がなければ、やがて人間の生存そのものを否定することになる。多岐多様の社会で「量」(quantity)から「質」(quality)への変化こそ必要条件である。いくら知識を量的にたしても、知識は知識であり智慧に変化しないのである。

個人主義的哲学では「個人」として知的に「ひと」を高めることに比重がおかれたよう思える。しかし「人」と「自然の中の人間」との間には大きな差があること知らねばならない。「人」をいくら分析しても「人間」にはならない。

また「人間」という概念 (conception) が捉えられても、これまで疑うこともなく絶対視されてきたヒューマニズム（人道主義）の捉え方では二十一世紀には限界があるよう思えてならない。すなわち「人間中心主義」では二十一

世紀は人類が生存できないとさえ思える。

人間は地球的自然環境のシステム（体系）の中において初めて生存が許されることを忘れてはならないであろう。いずれにしても二十一世紀は今日の物質的文明社会の生みの親であるアングロサクソン流の二元論のみでは限界があると思えてならない。

もつと視野を広げ、多元的な東洋の多種多様の文化や宗教、特に仏教に見る寛容さと、自然との一体感からくる東洋的宇宙観に謙虚に目を向ける必要がある。

今までの個人主義的ヒューマニズムを絶対視するのではなく、東洋の文化や宗教をも視野に入れた新たな二十一世紀の価値観・世界観が創造されなくてはならない時にいたつたといえ。自己中心的な世界観からのみでなく、もつと大自然・大宇宙の摂理に自己を写して観ることが今、肝要ではなかろうか。

冒頭に示した『正法眼藏』現成公案の「自己をはこびて万法を修證するを迷とす。万法をすみて自己を修證するはさとりなり」は深く切にさとすところがある。

つまり大自然、大宇宙の摂理から逆に自己を照らし出し、自己をふりかえり責任ある実践こそ明日への道と思える。

## 二

東北では「山背やませ」という、時には雪混じりの風が夏近くまで吹くこともある。人間が東北に住み着いて以来「冷害」という死とも直面する自然の中で、次の年の収穫を夢見てけなげに生きてきた。

「一年二年の計は米の出来高にあり、二十年三十年の計は山に樹木を植える。五十年百年の計は国に人を植えるにある。」

古く中国・春秋時代に既に「終身の計は人を樹う」

うに如かず」という名言がある。人を育てる教育はいつの時代でも事の始まりの原点であった。

明日の社会を思うとき、時の経済生活をおろそかにしてはならないが、明日への教育の大切さは決して忘れてはならない最重要課題である。

東北福祉大学は明治八年曹洞宗仙台専門支校として誕生し今日に至っている。そこに脈々と受け継がれている建学の精神は仏教・禪の心である。この建学の精神こそ広義の福祉であるとの信念の基に発展を続けている。

日本で学問としての狭義の「社会福祉学」は外国の影響により特殊な発展をした。その一つの流れはアメリカ流の社会適応を援助するソーシャルワークを中心に方法論が展開される。もう一つの流れはイギリス流の慈善事業から始まつた社会事業と社会保障を中心とした社会福被を押し進めてきた。現在本大学は四学科構成であるが、この四学科構成は日本の福祉系の大

の発展のためには確かに貢献があつたといえる。しかし、何の実現のためのソーシャル・ワーカーか、何を今、本当に保障しなければならないかを考えるとき、これまでの福祉の概念に限界がみえてきた。

社会福祉はもつとグローバルな視点から捉えられるべきだと考え、当東北福祉大学は常に新たなチャレンジを試みてきた。二十一世紀の福祉が担う課題は多岐にわたり、その重要性は益々深まるであろう。「新しい価値の創造」を目指しての新しい福祉が構築されなければならぬいときにある。

東北福祉大学のカリキュラムは政治、経済、法律、社会学、教育学、心理学、人間学、等々の「人文・社会科学」に加え医学、栄養学、芸術、体育を積極的に取り入れ、総合的に社会福祉を押し進めてきた。現在本大学は四学科構成であるが、この四学科構成は日本の福祉系の大

学や各種専門学校の一つのモデルとなつてそれなりの貢献をしてきた。

しかし二十一世紀を節目として新たな発想を持つて総合福祉学部の再構築を考えている。社会福祉・産業福祉・教育福祉・福祉心理・環境福祉など二十一世紀に答える福祉のコンセプト（概念）を確立すべく総合福祉を目指して着々と新しい歩みを始めた。

さらに、本大学では建学の精神を社会化するための切り口の一つとして、福祉と感性との関係において捉える試みを行っている。

インドの仏教やヒンズー教は著しく分析的でありまた哲学的である。中国の儒教や道教は実利的であり、また道徳・倫理的であると思える。インドや中国の強い影響を受けた日本の宗教特に仏教は、日本特有の風土により、特に「感性」的に鎌倉仏教の内に開花したように思えてならない。

「春は花、夏はととぎす秋は月、冬雪さえてすずしかりけり」（道元）の歌にあるように実に自然と感性的に日本に伝統としての心が伝わつてくる。

この感性的心の社会化を目指し東北福祉大学は日々努力している。

### 三

福祉の目指すところは生きる喜びに満ちた人間生活の実現にある。福祉の実現のための努力は健常者（しづうちがい）も障碍者も、人間がよりよく生きるために、環境、身体、精神、そして社会体系を二十一世紀に向けて再構築しようとするものである。この目的達成のために人間の「感性」に視点を当て、絶対でない人間であるが故に自然科学をベースに人文社会科学、そして芸術・宗教の分野まで視野に入れた学際的福祉研究をおしすすめる必要がある。

現代社会で起る諸々の諸課題の問題点の根源を探るとき、人間の持つ本来備わった「感性」の衰弱に起因する点が大であることを知る。とすると失いかけている「感性」を甦らせる事が人間として人間らしい生活を取り戻すためにも急務で不可欠の要件であろう。今こそ「感性のとき」である。

二十一世紀にむけて文部省もはじめて私立の社会科学系の大学でフロンティア的研究を進めている大学に思い切った研究予算をつけた。「学術フロンティア構想」予算がそれである。

東北福祉大学の感性福祉研究所の「生命科学を基礎とする感性と環境の相互作用に関する学術的研究」が第一号として幸いにも文部省より選ばれた。本大学の使命は重いとスタッフ一同張り切っている。

ここまで東北福祉大学がくるには幾つかの試練があつたことは事実である。感性を育てる教育のために幾つかの努力をしてきた。教壇で教授が教えて「感性」が身に付くものではなく、学生自らが、つかみ、感性を伸ばしていくものである。そのための手助けとして施設の充実も図ってきた。

感性福祉研究所は四つの研究部門に分かれ、各分野の基礎研究と「癒し」の応用研究を行う。

例えば「芹沢鉢介美術工芸館」があげられる。大学独自の美術館としては全国にも例がないと

いう評価を得ている。人間国宝であり、染色界の巨匠故芹沢銈介氏の遺作千点余と、氏が世界、特にアフリカから集めた民族学的にも価値の高い美術工芸品が二千四百余点を収めている。

さらに約三ヶ月のローテーションでテーマを決め学生のみだけでなく一般にも公開し、喧噪とした社会での一服の清涼剤として市民にも学生にも喜ばれている。最近特に海外から訪れる人も多くなり、アメリカのリバーサイド市立博物館で芹沢銈介展を開催し市民に喜ばれ親しい交流を深めている。

また注目されている本格的音楽鑑賞専用の「けやきホール」を持つている。宮城の県木の「けやき」と青葉通り、定禪師通り、広瀬通りの緑をイメージして造られたものである。仙台、国内、そして世界各国から有名なアーティストが集まっている。

人間の創造した実物の美術工芸作品や生の音

樂に直に接することにより学生の心の中に豊かな感性が日々培われていることはやがて必ず花ひらく信じている。

また、学生に福祉の心を体で直接体得してもらう目的でやつとのことで実験的施設を造ることが出来た。せんだんりん梅檀林にちなんで「せんだんの杜」と名付け園長とせず「杜長」とした。地域社会も含む概念として命名したが、地域にも親しまれその効果もあり、全国から見学者が絶えず、対応に困っているのも事実である。「せんだんの杜」をモデルとした施設が東北のみでなく全国に広がっていることに喜びを感じている。

オールド・エイジッド・マンとはエクスペリエンスド・マンのことである。つまり経験と智慧を蓄積した大切な人が高齢者であり、老人である。中国では老人とは老人星という龍骨座のもつとも大切な首星であり尊ばれてきた。また、道元は正法眼藏の溪声山色の中で「大慈悲の深

く、広度衆生の老大なるには……」とあり、老大とはまさに経験と智慧と慈悲を備えたことになる。

高齢者・老人のお世話を做的ではなく、人生の大先輩から学ばせて頂くという姿勢を「せんだんの杜」の精神としている。その精神は地味ではあるが着々と根付き、他では学べないものをこの杜で学生達は日々修證<sup>じゅしやう</sup>している。

#### 四

「小さな小さな事が人の心を喜ばす。小さな小さな事が人の心を悲しませるから」。

目や耳や手足の不自由な方々、生活年齢は成人になつても心身の発達の遅れている方々と接した時を思い起こしてみよう。障碍<sup>しょうがい</sup>を負いながら力一杯生きようとされている方々にどこまで近づき、正しく理解し、共感し喜びを分かち合うことが出来るであろうか。

残念ながら距離感が存在しているのが健常者

の実感かもしれない。健常者の側からの論理は所詮健常者の論理であり、障碍者に代わられない限り差別的見方が存在していないか。まず己<sup>おの</sup>を疑うことから福祉の一歩が始まる。

しかし共に生き、共感しあう喜びを分かち得れるのも人間であることを忘れたくない。東洋的思惟方法と西洋的思惟方法には風土から生じるのであると思われるが大きな違いがみられる。

仏陀の言葉として有名なスッタニペータには

「大きくとも、小さくとも、見えるものも、見えないものも全て生きとし生けるものそれなりに他にかえられない尊嚴がある。」という意味の言葉が強く述べられている。また枕草子には次のような言葉がある。「何も何もちいさきものは、いとうつくし。」

たとえ弱く、小さな命でも、生きるものへ心ひかれるのが人間であろう。この「うつくし」「美し」はもとより「愛しい」つまり、「いと

しい」慈愛の心にあふれている。生活での身近なもの、小さき命への「慈しみ」は対象と受け合う心であり、慈悲の心、福祉の心の原点でもある。

福祉の実践記録の中には涙なくしては語れないとものが多い。また、クライアントの方々に対して「己」の力の及ばぬ限界を知る人も多い。そのときクライアントとの方に、何も為す術もなく、ただ痛むところに、そつと手を当てる、古くから日本にある「手当」の心こそ大切な人間の行為であろう。

東洋的思惟の表れとして古くウパニシャッド(Upanisad)哲学がある。この「ウパニシャッド」とは「側に座り、限りなく近づく」という意味を持っている。ここに人間の限りなき他との融合に向かっての姿勢を見る。この語彙の中には対象のうちに自己と他と共感する生命観を感じる。

知的障壁を持った私の知る山田ミキちゃん

(現在生活年齢三十歳)のことである。ベランダにミキちゃんの妹が観察用に育てたトマトが夏になり、やっと赤く色づいてきた。これを見たミキちゃんはなんと叫んだであろうか。

「トマトが咲いた。トマトが咲いた。」と喜び叫び続けたのである。

またミキちゃんは、湖にボートが浮かんでおり、ボートを人が一生懸命漕いでいるのを見て喜びの声を上げた。「ほら、あそこに、ボートが泳いでいる、ほらボートが泳いでいる。」

何百冊の哲学書を読むよりも、どんな学識のある人の話を聞くよりも、「トマトが咲いた。」「ボートが泳いでいる。」が感性的に心の底に深く響いてくる。

知識と合理性、能率と物欲とで頭の中がいっぱいになっている現代人に「カツ」を入れ、忘れているものを思い出させるのに十分な言葉である。

# スイス・ローザンヌ大学 仏像・仏書贈呈報告

横浜善光寺留学僧育英会第十二回選学生  
現Swiss National Science Foundation研究生

計 良 龍 成

昨年十二月十二日、スイス・ローザンヌ大学に、仏像と多数の仏書が曹洞宗大本山總持寺監院江川辰三老師と横浜善光寺留学僧育英会理事長黒田武志老師により寄贈された。そのことについて、そこに至るまでの経緯も含めて、簡単に報告したいと思う。

現在ヨーロッパでは、オーストリアのウイーン大学を始めとして、ドイツのハンブルグ大学、ゲッティンゲン大学、オランダのライデン大学

等の優れた仏教研究機関が存在するが、スイスのローザンヌ大学もその一つに数えることが出来るであろう。ローザンヌ大学における仏教研究は一九六八年、Jacques May氏が文学部東洋言語文化学科の教授に就任したことに始まり、一九九一年、J.May氏の後継者として、Tom J. F.Tillemans氏が大学に入り、現在に至るので、その歴史は比較的新しく、丁度今年で二十年目である。それ故、ローザンヌ大学の図書館には、

テキストを含め、仏教を研究するのに必要な書籍が十分に備わっておらず、しばしば不便を感じざるを得なかつた。

一九九五年十月、そのローザンヌ大学に、筆者は第十二回横浜善光寺留学僧育英会奨学生として留学することを許された。既に多くの方々に知られていると思うが、横浜善光寺留学僧育英会は、曹洞宗善光寺住職黒田武志老師が後輩達に国際性を身に付けさせる機会を与えるため始めたものである。このような海外留学奨学金制度は、本来なら、少なくとも宗門単位で為すべきことのようにも思えるが、残念ながら現在、曹洞宗には若手研究者を育成するための有効な奨学金制度はないようであるから、善光寺育英会は曹洞宗に關係する研究者達には、非常に貴重で且つありがたい存在である。

さて、筆者はスイスに渡航後、黒田理事長に葉書で二、三度、近況報告をかねて、ローザン

ヌ大学の研究環境状況を伝えた。そしてその際、図書館の仏教研究図書の不十分さを伝えたことが今回の仏書寄贈のきっかけとなつたのである。黒田理事長はそのことを聞くと、スイスにおける仏教研究の発展とそこに留学する日本人研究者の便宜をはかるために、仏書を寄贈する計画を立てること申し出て下さつた。筆者には、この計画を実行するには、多くの難関が待ち構えているようと思われたのだが、しかし幸いにも、大本山總持寺監院江川辰三老師の御理解と御協力を得ることが出来たため、両師による仏書寄贈は、そう多くの困難もなく、実現される運びとなつた。

寄贈された書籍は、曹洞宗の典籍を含めて、日本で出版された、インド、チベット、中国、日本仏教に関する研究書と校訂テキストで、総冊数にして、約二百冊である。ローザンヌ大学には日本語を理解する教授、学生は殆ど居らず、

また日本文学、文化等を研究する学科もないの  
で、我々日本人留学生以外に、実際どれだけの  
人々が、テキスト以外のこれら日本語の研究書  
を利用するかは分らないが、曹洞宗関係の書籍  
については、ヨーロッパに曹洞禪を伝えた弟子  
丸泰仙老師の弟子達が、スイスにも多数居るの  
で、彼らがそれらを利用することになりそうで  
ある。

ローザンヌ大学図書館で行われた贈呈式には、  
会場の正面に今回書籍と共に贈呈された高さ約  
一メートルの白木彫りの釈迦牟尼仏が置かれ、  
既に延べたJ.May元教授、T.Tilemans教授、そ  
の他インデ学専門のJohannes Bronkhorst教授、  
文学部長のWimistörfer Jörg氏、図書館館長代  
理のSilvia Kimmeier氏、宗教学科教授のMaya  
Burger氏等に学生も加えて、多くの方々が出席  
し、江川監院を導師として、簡略な法要が行わ  
れた。図書館関係者の話によると、大学の図

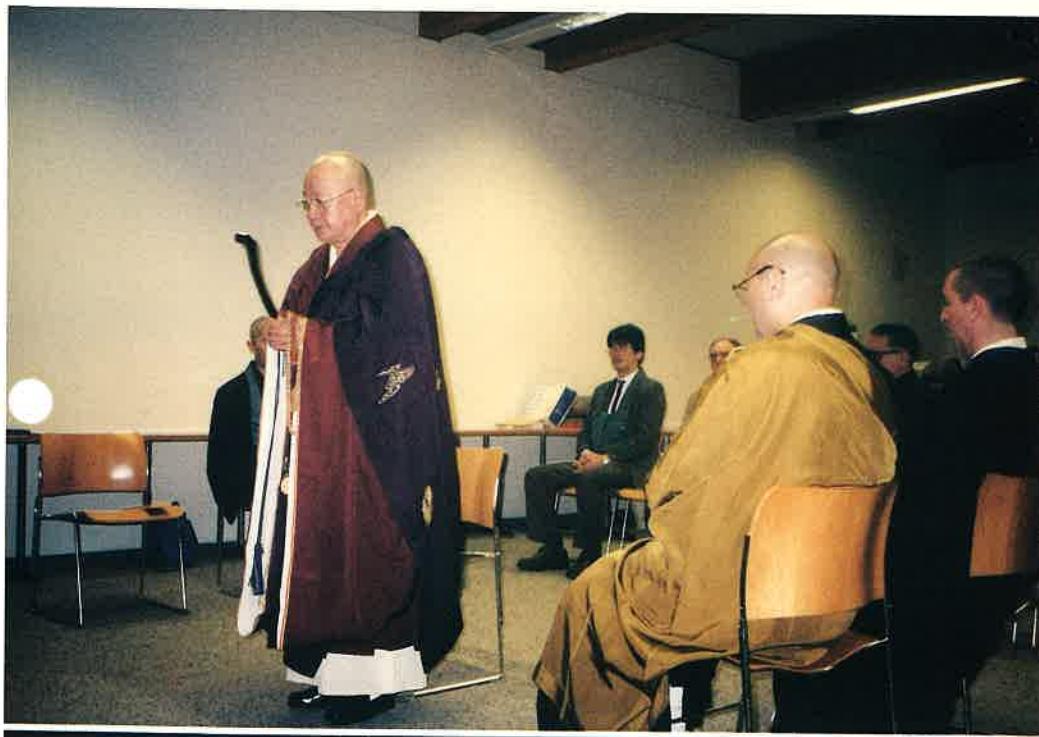
書館の一室が、聖なる空間と変わることとなつ  
たのは、図書館の歴史上初めてのことだそうで  
ある。式の後、出席者一同、共に夕食を摂り、  
和やかな一時を過した。

さて、今回のスイス・ローザンヌ大学への仏  
像・仏書の贈呈は、筆者を含め、スイスにおい  
て仏教を研究する者達にとっては、非常に意義  
あることであり、また感謝すべきことである。

そしてこの贈呈の意義の大きさは、既に確定さ  
れたことではなく、これから我々によつて明ら  
かにされていかねばならないことである。江川  
監院老師と黒田老師の御好意と御期待に応えら  
れるよう、感謝の心を以て、一同努力してゆき  
たいと思う。

# ローザンヌ大学 仏像・仏書贈呈式







ローザンヌ大学側の皆様と

仏像開眼式・贈呈式

夕食会にて





ピラトゥス山頂



ルツェルンにて  
(背後はピラトゥス山)



無畏城寺にて

壮大な自然——仏の恵みに感謝するスイスの旅

# 仏像・仏書贈呈式を終えて

—スイス・ローザンヌ大学—

横浜善光寺留学僧  
育英会理事長 黒田武志

昨年（平成九年）十二月十一日から十六日までの六日間、私は澄み切った空気に包まれた風光明媚な山の国・スイスの旅に出かけてまいりました。

スイスは日本の九州とほぼ同じ国土をもつといいう小さい国ですが、その標高差は四千四百メートル。国土の六十パーセントがアルプス山系

で、あの『アルプスの少女ハイジ』の心温まるお話もここで生まれました。小さな国ではありますが、その中に多くの民族、そしてドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシユ語という多くの言語が平和的に共存しています。また、ちょっと鉄道やバスに乗ってトンネルを抜けただけで、ドイツ、フランス、イタリアといった

異国に行ってしまうという不思議さ。国境や言葉や習慣や貧富…すべての垣根を越えて一つの世界平和に向かって進んでいきたいと願つてきました私にとって、スイスという国はまさに、私の理想をかたちにした國のような気がして、常々とても魅力を感じておりました。

さて、今回のスイス訪問の一番の目的は、イス・ローザンヌ大学に、日本の仏像と仏書を贈呈するということで、その贈呈式に招かれたものでした。

横浜善光寺留学僧育英会では、仏教を修学する身心堅固で優秀な若者を海外に派遣、または海外より日本に受け入れ、仏教の興隆、国家社会の進運に寄与しうる人材を育成することを目的として、毎年、すばらしい育英生を誕生させています。その第十二回生に計良龍成さんがいますが、彼は東京大学からスイスのローザンヌ大学に留学し、その熱心さと志しの高さ、そし

て頭脳明晰さによってスイス政府から研究助成金が出てきらに三年間学ぶことができるようになったという優秀な人。この計良さんから、日本仏像と仏教書をぜひ、我がローザンヌ大学に…と要請があつたのでした。

ローザンヌ大学というところは生徒数約七千人、あらゆる学部の中でもとくに文学部の東洋言語学科は優秀で、りっぱな言語学研究所も設置されていると聞きます。仏さまのみ教えと日本のかみの美しい言葉が遠くスイスの地にも広がり、ヨーロッパの方々に禪の精神が伝わっていくことは私にとってもこの上なく嬉しいことで、さつそく大本山總持寺の江川辰三監院老師とご相談してスイス訪問の準備が始まつたのでした。

日本時間の十二月十一日のお昼に成田を発ち、チューリッヒで乗り継ぎ、ジュネーブに着いたのは夜の八時近くになつてからでした。ずっとスイス道中の案内役をしてくださつた、フ

ランス・ヴァンヌ市にある海印道場の修行僧、泰天道環（ピエール・クレポン）と計良氏が空港で私たちを出迎えてくださいました。その夜はジュネーブから車で四十分ほどローザンヌ市内で一泊し、翌十二日の午後、私たちは市の郊外にあるローザンヌ大学に向かつたのでした。

### ローザンヌ大学仏像・仏書贈呈式

レマン湖畔にあるブドウ畠の斜面をせり上がるようにして出来た街・ローザンヌは、大学の他、美術館、博物館も多く、文化学術の伝統の残る街としても知られています。

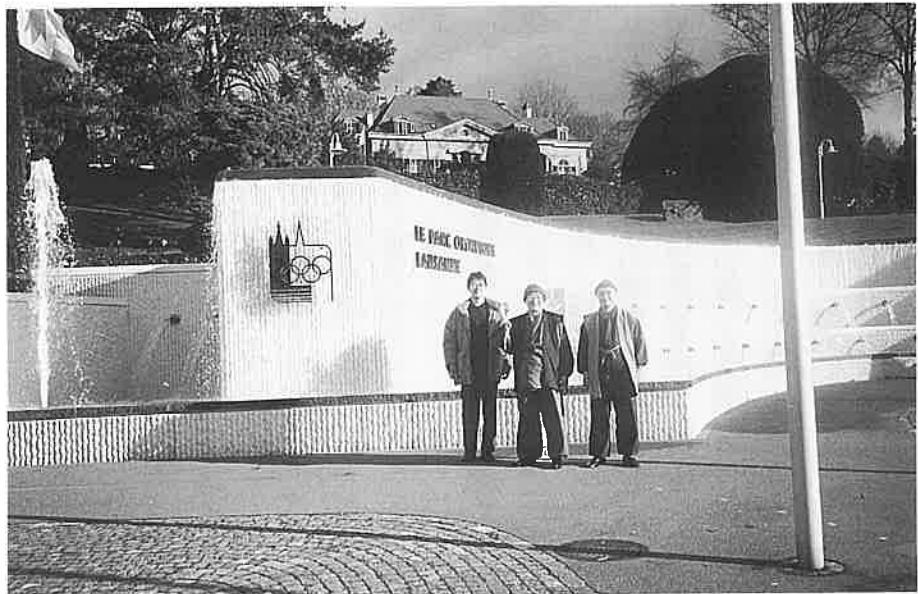
スイスにおける最も美しい教会とうたわれる「ノートルダム大聖堂」は、今から七百年もの昔に建てられたゴシック様式の巨大建築物で、旧市街の中心地にそびえています。ステンドグラスも美しく、鮮やかな色調の調和もみ

ごとでため息が出そうになり、また、仏に通じる靈的な空氣に包まれ、宗教宗派は違えど、万教は一つ、人の心は一つ、きっと釈尊に還つていくのだなあとしみじみ感じたものでした。行き交う人々が話すのは、流れるようなフランス語ですが、異邦人の私たちが入つてきても、とても暖かい瞳と態度で迎え入れてくれたことが印象的でした。

市の中心地にはこの他、アール・ブリュット美術館、州立美術館、また一九一七年からローザンヌにはオリンピック委員会（IOC）があるところから新しくできたオリンピック博物館などがあります。計良氏に案内されて歩き、ローザンヌの街を見て聞いて肌で感じて、興味深さと親近感と、心地好い緊張感に胸を膨らませて、午後、私たちはいよいよローザンヌ大学へと向かいました。

ローザンヌ大学はもともとは市内にありまし





オリンピックミュージアム



たが、現在はキャンパスを広大な自然に囲まれた山のふもとに移したそうです。そのキャンパスの広さは、日本の大学のそれとはとても比較になりません。約五万坪もあるうかというほどの牧草地で、羊が穏やかに鳴いている、そんな中に白く輝く校舎が建っているのです。このようなところで学ぶ学生は、のびのびとおおらかに、好きな勉強に集中できるであろうと思われました。

ローザンヌ大学仏像・仏書贈呈式は東洋言語学科主任教授トム・ティルマン Tom J.F. Tillemans氏の司会進行、厳肅な雰囲気の中般若心経が流れ、まず仏像の開眼式から始まりました。贈呈した仏書は江川監院老師から、「道元禪師全集」(全七巻)、「本山版 正法眼藏」「瑩山禪」(全十一巻)など全二十七書。横浜善光寺留学僧育英会理事長として、私黒田武志は、「仏教ことわざ辞典」『東洋叢書 チベット』(上・下)、

『仏教思想』など全四十八書の仏書を贈呈させていただきました。(後ページ贈呈書籍目録ご参考照)

そして、江川監院老師から次のようにご挨拶がありました。

「一言、ご挨拶申し上げます。このたび、イス・ローザンヌ大学東洋言語学科に仏像ならびに仏書を贈呈させていただきます。これらの仏書により、皆様のご研究が、なお一層飛躍なさることをご期待申しております。皆様のご関心は、インドとチベットの仏教思想にあると聞いておりますが、この機会に、日本の曹洞禪にもご関心を持つていただき、近い将来、皆様の中から禪の研究者が生まれますことを期待しております。また、禪に関心がない方でも、この機会に、我々とともに、未来に向かつて、自分の勤めを果たしつつ、他人の幸せを願い、多くの人々に光明を与えるように努力なさつて

いただけるならば、我々の今回の目的は果たされたものと信じております。皆様のご活躍をお

祈り申し上げ、ご挨拶とさせていただきます」

ローザンヌ大学の教授の方々から割れるような拍手があがりました。続いて、ローザンヌ大学側から、図書館長のご挨拶があり、

「このたびはすばらしい仏像、仏書をまことにありがとうございました。このように尊く貴重なものをいただけるのは、ローザンヌ大学開校以来の快挙です。この上ない喜びでござります。心からお礼を申し上げます」

とフランス語で述べられました。

皮膚の色や言葉は違つても、ともに理解しあつて、ともに学びあつて幸福への道を歩んでいきたいと願う心はあつという間に通じ合い、仏像・仏書贈呈式は感動のうちに終了となりました。

その感動のままに、私たちは、教授や関係者のみなさんと夕食をともにし、すばらしいお

もてなしを受け、さらに友好を深めたのでした。

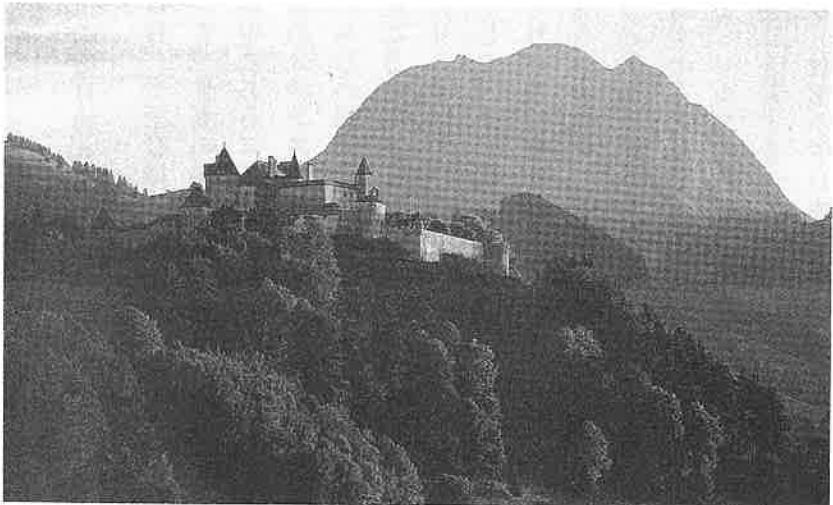
### 中世の香り残るベルン

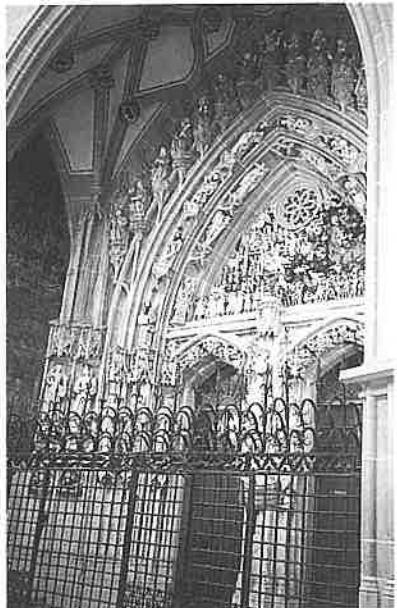
第三日目、十三日は、ローザンヌからワゴン車に乗つて、世界の遺産都市ベルンに向かいました。途中にあるグリュイエールというところは、石畳のメインストリートと中世の城からなるかわいらしい村。そこだけ時が止まつたかと錯覚を起こせるような村を代表する素朴な味わいのグリュイエールチーズは、それはおいしいものでした。十七世紀から伝わる手法でのチーズづくりが受け継がれていると聞き、合理化の嵐に巻き込まれず、昔ながらのよさを伝え続けることの大切さをあらためて感じました。

ほのぼのとした風景眺めながら車を北へと走らせて、ベルンの街に入りました。スイスのほぼ中央に位置するベルンは、スイス連邦の首都であり、政治の中心地ともなっています。中



グリュイエール





ベルン

心地というと、都会の喧騒を思い浮かべる方もいるかもしれません。ベルンは街の三分の一が公園や緑でおおわれているため、中世のたたずまいが色濃く残り、やはり穏やかな気持ちにさせてくれました。

シュピタール通りというメインストリートを

歩いていると、中世にタイムスリップしたような感覚になるたいへんおもしろい街です。音楽家のギルドにちなんだ“バグパイプ吹きの噴水”など、多くの噴水はすべて十六世紀中期に制作されたものだそうで、日本も戦争がなければ、このように美しい中世の建造物がもつとたくさん残されたであろうと思ふと残念でなりません。町中に十一もある噴水の石像彫刻からは、当時の人びとの生活や信仰の深さが感じられるものが多くありました。

計良氏の説明によれば、ここはアーレ川の湾曲部に設けられた砦から発展した都市だそうで

す。ニーデック橋はそのアーレ川を谷ごとひとまたぎする石造のアーチ型の橋。ニーデック橋の近くには、一三四一年來の歴史を持つ教会など、まるで街全体が小さな歴史博物館かと思われるような建造物も多く、感嘆のため息がもれました。

アーレ川を見下ろすように建つてある“大寺院”を私たちは参拝することにしました。この大寺院はスイスで一番大きなゴシック建築で、塔の高さは百メートル。スイスの教会の塔の中では一番高いということでした。二百五十四段のらせん階段を登つて展望回廊から眺める風景は、魂をゆさぶられるようななみごとなものでした。ステンドグラスから外の光が入れば、幻想的な空間がつくり出され、遠く中世の人びとはここで、神さまと対話をしたのでしよう。その非日常空間に、日本の寺院との共通点をいくつも発見することができました。清められたよう

な気持ちになるときの人間の心は宗教は違つて  
もみな同じなのです。

彫刻の“正義の女神”的表情に、観音さまの  
お姿を私には観ることができました。

### 魂淨められる純白の世界・ピラトウス

第四日目、十四日はベルンから、ブライムス  
も愛したというトゥーンの町を通つてルツエル  
ンへ。トゥーン湖のアーレ河口付近から見える  
トゥーン城は、今にも本物のお姫様が窓からの  
ぞきそうな昔ながらのとんがり屋根のお城で、  
スイスの少女たちの憧れなのだろうなあと思わ  
れました。ブライムス河岸となつてゐる散歩道  
から離れれば、古い町並にはほどよい活気があ  
ふれ、また、小高い丘に登ればアルプスの峰々  
が望されます。

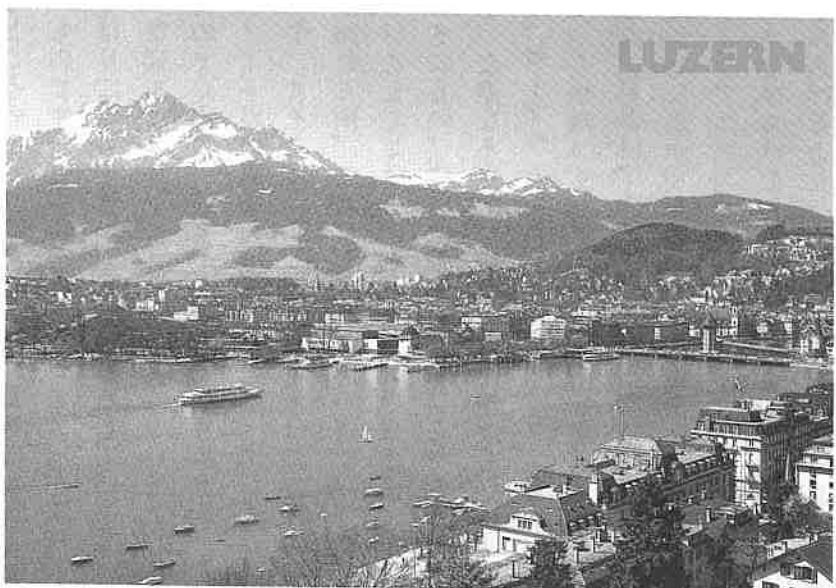
されルツエルンは、雪と氷の都といわれてい  
ます。スイスで「四つの森の国の湖」といわれ

るところのほとりにあり、その景觀はすばらし  
いものです。町中は清らかなロイス川が流れ、  
やはりここも中世の面影を強く残しています。  
なぜルツエルンが雪と氷の都かといふと、市

街のすぐ南に、『ピラトウス』という標高二一二  
〇メートルの岩山に登る起点となつてゐるから  
です。スイスという国は長い冬とほんの短い夏  
が訪れる国。すぐに雪景色を思い浮かべる人も  
多いことでしょう。ピラトウスはまさに、スイ  
スそのもの。純白におおわれ、ひんやりと澄み  
切つた聖なる空気に満たされた清々しい山でし  
た。ロープウェイと登山鉄道を降り、私たちは、  
ゆつくりゆつくりと山頂を目指し登つていきました。  
気温はマイナス十一度。はく息は真っ白。  
たしかに寒かつたのですが、山頂から息をのむ  
ようなアルプスの山々のパノラマが目の前にパ  
ーッとひらけたときは、寒さなどまったく忘れ、  
こみあげるような感動で、茫然としておりまし



ルツエルンにて



た。それは言葉ではいい表せないほど、あまりにもみごとな景観がありました。

このピラトウス山は、不思議な伝説と風習が生き続ける聖域だということでした。昔、キリストを処刑したローマ総督ピントイウス・ピラトの亡靈が、各地をさまよつたあとこのピラトウス山にたどりついたとされ、スイスの人には

「魔の山」と呼ばれ、長く恐れられていたのだとか。今ではそれを信じる人もなく、美しい觀光地として有名になつてはいますが、僧である私はやはり、そつと手を合わさずにはいられませんでした。この山で、何人かの方は遭難したかもしれません。しかし、今は仮の手の中に包まれて、この清浄な空氣の中で私たちを見守つていてくださつてていること思います。

### 禅の精神を学ぶヨーロッパの人びと

ヒへ向かうことになりました。二千年以上の歴史の厚みを持つ古い都市ですが、一方どんどん外からの新しい空氣を取り入れ、受け入れる柔軟性を兼ね備えており、スイスを代表する国際都市ともなっています。伝統と、新しい文化が混沌と混じり合う不思議さにとても魅力を感じました。

そんなチューリッヒの市内に、禅道場『無畏城寺』<sup>じょうじ</sup>はあります。住職は蜜仙明峰（ミツシエル・ボベ）老師。私と江川監院老師はお招きにより、早朝よりこの道場の禅堂で坐禅の指導をすることになりました。

「このたび、スイスの無畏城寺を訪れることができましたことを心より嬉しく思います。

皆様は、ヨーロッパの禅の先駆者である、弟子丸泰仙老師の法系、またはお弟子の方々と承つております。

第五日目は、スイス第一の都市・チューリッ

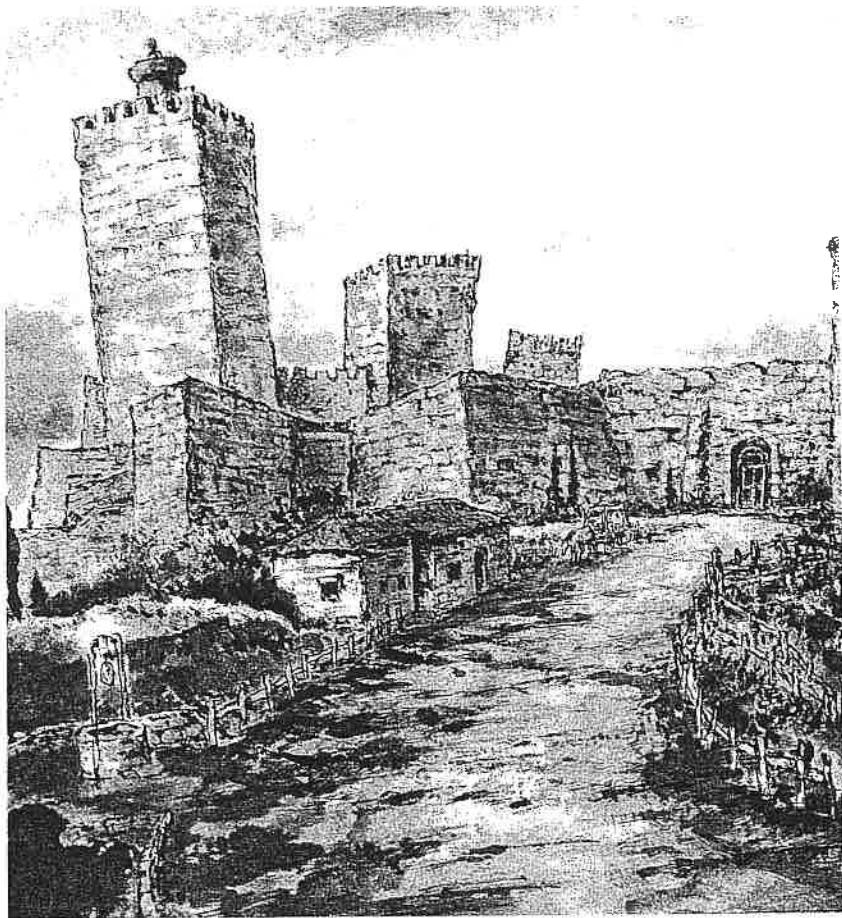
今回、我々はスイスのローザンヌ大学に仏像



▲無畏城寺にて

▼チューリッヒにて





並びに仏書を謹呈する機会を得、スイスを訪問することになりました。ローザンヌ大学関係の方々にはたいへん喜んでいただき、また、暖かいもてなしを受けました。謹呈いたしました仏書は大学の方々だけではなく、皆様にもぜひご利用していただきたく思います。

道元禅師は、次のようにおつしやつておられます。

『菩提心をおこすといふは、おのれいまだわたらざるさきに一切衆生をわたさんと発願しいとなむなり、そのかたちいやしといふとも、この心をおこせば、すでに一切衆生の導師なり』

道元禅師がこのようにおつしやつておりますように、菩提心を起こし、弁道と実践を通して、人びとの導師となり、世界を平和に導けるよう、共に精進していかれることを心から願い、挨拶とさせていただきたく思います』

それは心に染み入る、すばらしいご挨拶でした。

私自身もさらに精進して、世界平和のために尽くしていくことが、自分の使命だとあらためて誓わずにいられませんでした。目の前で坐禅を組む、スイス人をはじめフランス、ドイツ、イタリア、ベルギー・ヨーロッパで生まれ育ちながら、禅に関心を持ち、禅の修行をしようと志す人たちの真剣な姿勢を見て、私は感無量になりました。この人びとが今後、さらに学んでいくってくれたらきっと世界は早く心繋ぎ合わせることができるでしょう。争いも不安もない世界が、二十一世紀には実現することでしょう。

現在、留学僧育英会が派遣し受け入れてきた留学僧は八十四名、派遣国はアメリカ、タイ、インド、スリランカ、イギリス、フランス、イタリア、オランダ、韓国、カンボジア、ドイツ、スイス、オーストリアなど十三カ国。受入れ国

はアメリカ、スリランカ、韓国、中国、フランス、バングラデイシュ、日本、台湾、ポーランドなど九カ国にのぼるようになりました。海外で学ぶ一人ひとりが、これからも広い視野を持ち、禅の精神を受け継ぎ、伝えていくてくれる私に信じています。今回のようにスイスと日本のはばらしい架け橋となつてくれた、第十二回生の計良龍成さんのように…。蜜仙明峰老師も早朝からのこの訪問をたいへん喜んでくださいつて、

「眞の禅を見せていただきました。このように心が洗われた気持ちになつたのは初めてです。私もますます修行を重ね、そしてお弟子のみなさんに眞の禅の精神をお伝えしていきたいと思います」

と手を合わせて語られました。

その夜はスイスでの最後の夜ということもあり、蜜仙住職のメンバーに招かれ、とても楽し

い晩餐会が開かれました。クリスマスも近いと  
いうことで、壁にはリースが飾られ、テーブル  
の上には赤いろうそく。そんな中で、観音像の  
絵や、『佛』という書が飾られてあつたり…。日  
本とスイスの心が融合、調和したお部屋はまさ  
に、境界を越えた新しい空間がありました。青  
い目と金髪のかわいい子どもたちを抱きよせ  
て、心から、「あなたたちの二十一世紀をよろし  
くお願いしますよ」と祈りました。国境を一番  
感じさせないのは、子どもたちの笑顔です。ど  
の国の子も本当に美しい魂そのままの笑顔を持  
っています。私は世界のいろんな国を訪問しま  
したが、世の中にこれほど尊いものはないと感  
じることがよくあります。この子どもたちの笑  
顔を消すようなことは、絶対あつてはならない  
のです。

その夜、ホテルに戻り翌十六日の朝、チューリッヒ空港を発ちました。

飛行機の窓から見える、絵はがきのようにも美しいスイスアルプスの風景。何世紀も、これほどどの美しさを保っているのは、スイスの人びとが、この大自然を仏から、あるいは神から、宇宙から、人間にいただいたす素晴らしい恵みとして、感謝し、大切にする心を祖先から何代も受け継いできたからなのでしょう。かつては日本人も、自然と共に存し、調和してその日必要なものだけを神仏からの恵みとしていただき、感謝してきました。しかし、現代は、不必要に森林を伐採し、排水で川や海を汚し、自然を破壊しつつあります。

今回、私たちが、スイスに届けた仏さまのみ心。自然を大切に保護するスイスの人は、もしかしたら、現代の日本人よりずっと早く、深く、理解するかもしません。日本は世界で最大の仏教国のはずなのですが…。

壮大なスイスの大自然は、私にさまざまなもの

とを教えてくださいました。日本とはスケールの違う、"生きている自然"を体験し、私はまた心新たに、「人間は、地球的規模でこの自然を護つていかなければならない！」と決意したのでした。

本当にすばらしい旅でした。最後にこの旅の間たいへん親切に案内役をしてくださった泰天道環ことピエール・クレポン氏、そしてお世話になつたスイス・チューリッヒ市無畏城寺、蜜仙明峰ことミツシェル・ボベ氏、ポルトガル・リスボン市竜門寺、大雲道光ことラツフル・トウリエ氏、愛知県曹流寺住職堀部明宏師ほか、いろいろとお手配を下さつた数多くの方々の誠に尊い仏縁に心から感謝を申し上げます。

(了)



# □スイス・ローザンヌ大学贈呈仏書目録□

へ一↙

道元禅師全集	(全七卷	一セツト)	道元禅師全集	(全七卷	一セツト)	本山版 正法眼藏	(一部)	本山版 正法眼藏	(一部)	鑑山禪	(全十二卷	一セツト)	鑑山禪	(全十二卷	一セツト)	永澤寺本 傳光錄	(一部)	永澤寺本 傳光錄	(一部)	禪籍善本 無門關	(一部)	禪籍善本 無門關	(一部)		
禪籍善本 宏智錄	(上中下	一セツト)	禪籍善本 宏智錄	(上中下	一セツト)	禪籍善本 宏智錄	(一部)	禪籍善本 宏智錄	(一部)	景徳伝灯錄	(4	一部)	景徳伝灯錄	(4	一部)	瑜伽師地論菩薩地戒品	(一部)	瑜伽師地論菩薩地戒品	(一部)	ラリタヴィスターの研究	(一部)	ラリタヴィスターの研究	(一部)		
梵文無量寿經写本口一マ字集成	(全三卷	一セツト)	梵文無量寿經写本口一マ字集成	(全三卷	一セツト)	西藏文獻撰集	(全三卷	一セツト)	西藏文獻撰集	(全三卷	一セツト)	梵文二万五千頌般若經	(5	一部)	梵文二万五千頌般若經	(5	一部)	新・ギルキット法華經梵本	(一部)	新・ギルキット法華經梵本	(一部)	ギルキット出土法華經梵本	(一部)	ギルキット出土法華經梵本	(一部)
唐高僧傳索引	(中一部)	唐高僧傳索引	(中一部)	古タントラ全集解題目錄	(一部)	古タントラ全集解題目錄	(一部)	法華經原典總索引	(全十一卷	一セツト)	法華經原典總索引	(全十一卷	一セツト)	梵語仏典の研究	(一部)	梵語仏典の研究	(一部)	論書編	(一部)	論書編	(一部)	論書編	(一部)		

5	4	3	2	1		31	30	29	28	27	26	25	24	23
印度の実在論	自我と無我	東洋叢書	東洋叢書	仏教ことわざ辞典		図説仏教語大辞典	仏教語大辞典	日本仏教人名辞典	浄土宗大辞典	仏教比喩例語辞典	宋高僧伝索引	宋高僧伝索引	唐高僧伝索引	
(一 部)	(一 部)	(一 部)	(一 部)	(一 部)		(一 部)	(一 部)	(一 部)	(一 部)	(一 部)	(一 部)	(一 部)	(一 部)	
(下)	(上)					(全四卷)				(全四卷)				
(一 部)	(一 部)	(一 部)	(一 部)	(一 部)		(一 セット)			(一 セット)	(一 部)				
10	9	8	7	6		37	36	35		34	33	32		
高崎直道博士還暦記念論集	中国古代写本識語集録	チベットの仏教と社会	唐五代禪宗史	輪廻の論証		講座大乗仏教	シリーズ東アジア仏教	講座敦煌	(3~9 七冊)	(全三十卷 一セット)	大乗仏典	中国、日本	新仏教辞典	(一部)
(一 部)	(一 部)	(一 部)	(一 部)	(一 部)		(一 部)	(全五卷 一セット)	(全十卷 一セット)	(3~9 七冊)	(全十五卷 一セット)	印度編			
(一 部)	(一 部)	(一 部)	(一 部)	(一 部)		(一 部)	(一 部)	(一 部)	(一 部)	(一 部)	(一 部)	(一 部)	(一 部)	

△△

学論集

真野龍海頌寿記念論文集 般若波羅蜜多思

想論集

前田専学頌寿記念 仏教文化学論集

牧尾良海喜寿記念 儒佛道三教思想論攷

東北大学印度学講座六十五周年記念論集・

インド思想における人間観

伊原照蓮博士古希記念論文集

西蔵文献撰集(3) ギエルツアップ造リクテル  
ル

藏梵漢对照初會金剛頂經索引 (一部)

仏教思想 愛 (一部)

仏教思想 悪 (一部)

仏教思想 恩 (一部)

仏教思想 苦 (一部)

仏教思想 空(上) (一部)

仏教思想 空(下) (一部)

仏教思想 解説 (一部)

24

23

22

21

20

19

18

17

16

15

14

13

12

11

仏教思想 心

仏教思想 死

仏教思想 信

インド古典叢書 宝性論

インド古典叢書 摂大乘論

インド古典叢書 摂大乘論

インド古典叢書 摂大乘論

インド古典叢書 摂大乘論

パーリー語 仏教辞典

総合仏教大辞典 (全三巻)

水野弘元著作選集

水野弘元著作選集

チベット・インド学集成

チベット・インド学集成

チベット・インド学集成

チベット・インド学集成

チベット・インド学集成

河口慧海請來チベット資料図録

28 27 26 25 仏教思想 心

28 27 26 25 仏教思想 死

(一)

10 9 一部

一部

11 一部

一部

一部

一部

一部

一部

聖入楞伽經註

(一部)

大谷大學所藏外文獻叢書

中觀學說決擇集  
(一部)

43 42

44  
大谷大學所藏外文獻叢書  
註・善說要集

知識論決擇廣  
(一部)

45

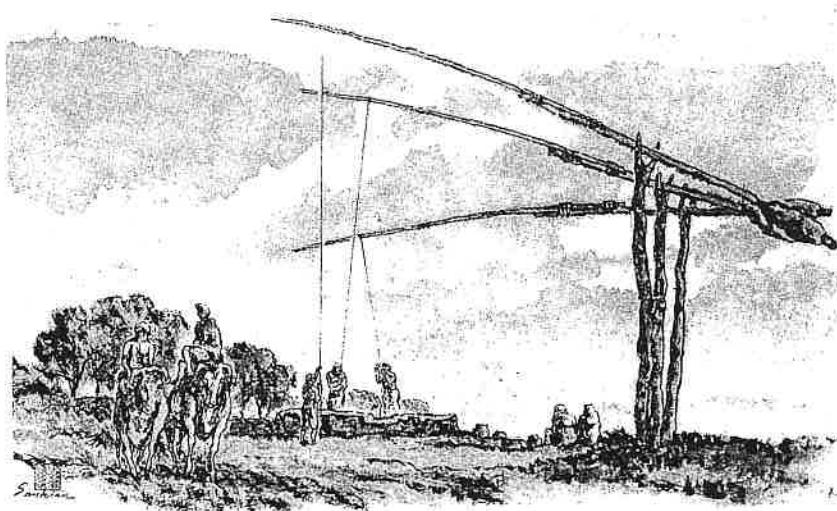
46  
大谷大學所藏外文獻叢書  
俱舍論語義解  
(一部)

47

明・善說の陽光  
前田專學博士還曆記念論集「我」の思想

48

47 46  
講座敦煌  
敦煌の自然と現状 (1 部)  
講座敦煌  
敦煌の歴史  
(2 部)





# 亡き師を偲ぶ

前角博雄老師三回忌・ロスアンゼルス禪センター30周年

1998年5月15日～17日



三回忌法要(導師・黒田武志老師 禪センター仏殿)

逮  
夜(五月十五日)



開山堂

導師・黒田純夫老師  
(東京・桐ヶ谷寺住職)



坐禪堂





開山堂



焼香される家族

参集された皆さん



五月十六日(禪センター)

朝  
課



報恩坐禪



前角老師を偲ぶスピーチ

## 三回忌法要

導師・黒田老師



◀焼香される恵玉尼  
(禪センター主管)

▼禪センターに心は一つ



晋山式(五月十七日 マウンテンセンター)

陽光寺の寺印を前に



問答する二人の新命

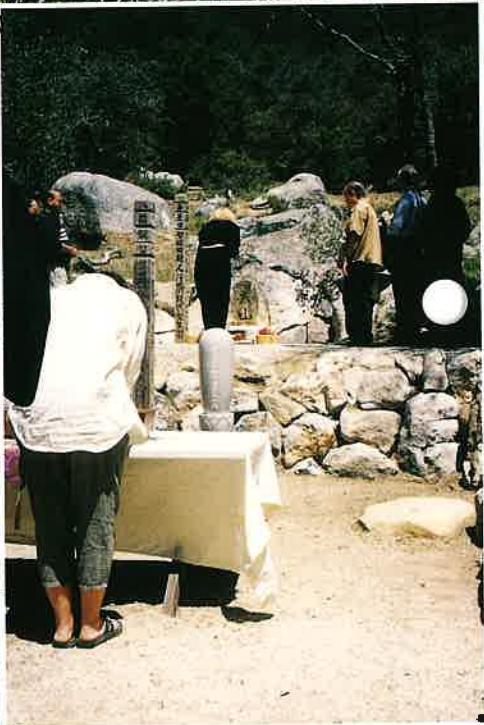


『般若心経』を唱和





けい塔諷経(導師・黒田老師)



墓前に参拝する人びと

亡き師を偲ぶ



故前角老師のご家族と



中食(五月十六日 禅センター)



バンケット(五月十六日夕刻)

# 前角博雄老師三回忌

## ロスアンゼルス禪センター三十周年

横浜善光寺育英僧  
ロスアンゼルス禪センター 遠藤博因

渡米四十年、アメリカの大地にて「禪」という種を蒔かれ育てあげた故前角博雄老師の三回忌が師の開創されたロスアンゼルス禪センターの三十周年行事と共に行われました。

去る五月十五・十六日両日、ロサンゼルス禪

センター佛真寺において三十周年記念式典及び、故前角博雄老師三回忌法要が厳修されるとともに、十七日には禪マウンテンセンター陽光寺においては、チャールズ天心・アネ清泉フレ

センター佛真寺において三十周年記念式典及び、故前角博雄老師三回忌法要が厳修されるとともに、十七日には禪マウンテンセンター陽光寺においては、チャールズ天心・アネ清泉フレ

ロスアンゼルス禪センターは一九六七年、ダウントンより西へ七キロメートル程の住宅街において、一軒の民家より発足いたしました。以来前角老師の人血惜しみない弁道のもと、主

に白人を中心とした参禅者の指導さらには後継者の育成に努められ、米国はもとよりメキシコ、ヨーロッパ諸国に十二人の法嗣を輩出されました。一九七〇年代には、参禅者の増加にともない土地や建物を拡張し、ノルマンディー通りのブロックをも占有し、実に百名余りのスタッフ及び二百名余りの住居者を擁護するまでに至りました。当禅堂では、月例の一週間の摂心をはじめ首座（雲水修行者の第一座）をたてた安居（九十日間の集中修行）が行われるなど、まさに日本の僧堂さながらの参禅修行が実践されて参りました。

また、さらなる本格的禅叢林・修行道場設立という強い参禅者の要望に伴い、ロスアンゼルス郊外東へ約三百キロメートルのサン・ハッシュトン連峰の中腹（海拔一、六〇〇メートル）に、大自然の恵みに満ちた二十万坪の敷地に七堂伽藍建設の誓願が打ち立てられました。一九

七九年、多大な援助を惜しまなかつた神戸・八王寺・故志保見道雲老師を開山に迎え、禅マウンテンセンター・陽光寺として開創されました。当初は、建物の基礎の上にテントを張った仮設禅堂にて摂心を行うなど幾多もの苦労を重ね、現在の百人以上を収用する座禅堂・仏殿・開山堂・庫院・典座寮他、大小の宿泊施設の完備に至っています。

現在、街のセンターでは前角老師に十年以上師事されたウェンディ恵玉尼、山のセンターでは法繼者の一人チャールズ天心フレッチャー老師と妻のアネ清泉尼が各センターの指導運営にあたっております。

## 亡き師傳ぶ三十周年

街の禅センターでは、まず十五日夕方より、前角老師の実弟・桐ヶ谷寺住職・黒田純夫老師による密湯をささげる逮夜式が執り行われまし

た。詰めかけた参列者は二階の開山堂から階下の座禅堂へ焼香の列をつくり、最後の焼香者が済むまで幾度となく般若心経を唱えるそのしめやかな雰囲気に、眼を湿らせる参禅者の姿も多く見受けられました。

翌十六日は、八時半より玄法師による朝課が満場の参詣者が集う仏殿において行われました。引き続き、法要隨喜者並びに参詣者は禅堂に移動、前角老師を偲んだ報恩坐禅を行いました。その後、当禅センター主事・恵玉尼が開口、隨喜者に前角老師を偲ぶ話を請われました。まずははじめに、前角老師の実弟・善光寺住職黒田武志老師が、三十年前の禅堂設立當時を振り返り、前角老師とのエピソードを皆に話されました。続いて、黒田純夫老師より第一回安居について思い出を語られました。さらに、北美開教総監・秋葉玄吾老師より三十年の祝辞、及び故前角老師三回忌に因み、仏典からシーパン・ジ

一パカの古則を引用し法話がなされました。この古則は、一つの胴体より二つの首が伸びる可憐なジー・パカ鳥が互いの美声に嫉妬し、ある日一首の方が他方の餌にこつそり毒を盛ったという話であります。その悲しき愚かな結末をふまえ、秋葉総監は、師亡き後のサンガにおいて相互が協力和合しあうことの大切さを強調されました。引き続き、前角老師の法系者である獅心老師から、禅センター初期の様子や御本人の体験談を頂きました。その後マイクは次々と禅センターのメンバーに渡され、各々の前角老師に対する思い出を語り合いました。

続いて、十一時半から、仏殿・須彌壇上に前角老師の位牌・遺影が設置され、黒田武志方丈を導師に迎え三回忌法要が厳修されました。導師の唱える英語による渾身の香語は堂内に厳肅さを加え、英訳參同契を全員で唱和して法要を厳かに執り行いました。



逮夜

報恩坐禪





三回忌法要会場に向う行列

フレッチャー夫婦の晋山式



お昼には、緑鮮やかな芝の覆う中庭にて、禅

### センターのメンバーによる手作りの中食が供養

されました。また、隠寮（住職の住居）が一般の参詣者に開放され、居間の壁に展示された写真の数々はセンター三十年の歩みを克明に物語っていました。老師が書斎として使われていた部屋には、座右におかれていた祖禄、庭仕事に使われた麦藁帽、剪定鉗<sup>せんていばさみ</sup>が展示され、感傷に浸る人の後ろ姿も見受けられました。

夕方六時より近隣のホテルの大広間において、バンケットが催されました。ここでは、センターカ創立以来のメンバー達や老師の知人等、百名余りの人々が参集し、三十年の歴史を振り返るスライドショーが上映されるなか、一同は思い

思いの昔話に興じて、和やかな一時を楽しみました。

### 夫婦そろつての晋山式

翌十七日は前述のマウンテンセンターにおいて、晋山式が執り行われました。ロサンゼルスよりフリーウエイを東へ向かわせ、乾いた茶色砂肌の大地を走ること一時間半、さらに、サン・ハッシュントン連峰へのきつい勾配の坂道を登ること小一時間、松の大木が林立するマウンテンセンターの境内に辿り着きます。今年は折から多雨のため下草が青々と生い茂り、近年まれにみる緑豊かな光景だそうです。まず午前十時半より隠寮において、秋葉總監・黒田両方丈の見守る中、陽光寺の寺印が玄法師から新命の天心師・清泉尼へと手渡されました。

次に、砂利道を登つて山の斜面が切り開かれた前角老師の墓前にて、黒田武志老師を導師にけい塔諷経が営まれました。斜面に沿つて白人の参詣者が黒の坐禅用の着物や作務衣を身にま



故前角老師の墓前

禅マウンテンセンターにて新命住職を中心に



とい焼香の列を作る姿は、故前角老師の無量なる御遺風の一面を感じさせられました。

さて、新命を率いた行列は諸堂の祭壇前にて香を焚きつつ巡堂し、大雷（太鼓）の鳴り響くなか人でびっしり埋まつた禅堂へと上段しました。まず般若心経を唱和後、二人の新命は須彌壇上に拝上して垂語（新住職の決意表明）を垂れました。次に修行者らが新命の力量を問うために行う問答が開始され先の十問を清泉尼が、残りの十問を天心師が返答に立たれました。数ある問答の中には清泉尼に対し「二人が住職になつたら翌朝目覚めたときにはあなたは夫の天心師をどういう風に呼びますか？」という質問も飛び出し、満場を沸かせる一幕もありました。そして式は尊宿方々の祝語を以て次第し、無事円成いたしました。

その後、お昼は境内に円テーブルが並べられ、菜食のランチが供養されました。その席にて今

回ドイツ、エンシェンバッハ禅センター晋門寺より飛来された中川老師が祝辞を述べられました。天心師がイギリス出身ということもあります。マウンテンセンターが常にヨーロッパからの参籠者受け入れに積極的である事実をふまえ、人との交流の大切さを力説されました。

### 新たな歩み着実に

“ZEN”（ゼン）という単語がアメリカ社会に久しく膾炙されて以来、現在は、事実アメリカ人の師がアメリカ人に禅を語る時代といえます。最後の日本人の師と言われる前角老師が遷化されて二年の月日が過ぎました。しかしながら、今回二つの禅センターにおいて、ことに肯定的な局面を見て取ることができます。街のセンターで老師の思い出を皆が語り合い、そしてその思い出をその場にいるもの皆で共有しあうという、そこには外見や見栄などにこだわらな

い、きわめて純粹で正直な人と人との交流と空間の分かち合いがもたらされるように思われました。

一昨年のタイム誌 (Time Oct, 13, 1997) では、アメリカ仏教特集においてこの禅センターがとりあげられました。伝統的な座禅に加えて、参禅者が車座になりお互いの心の問題やサンガの運営について心を開いて語り合う機会を積極的にもうけていることが報道されています。昨今、心の癒しがアメリカ社会でも強く呼ばれていますが、禅仏教自体がアメリカ人の精神を深く支えるべく変容を余儀なくされていることが看取できると思います。

またマウンテンセンターでは夫婦による晋式が行われた訳ですが、これはアメリカの禅堂を象徴する建設的な出来事でもあります。他にも夫婦で禅センター やグループを運営するところは多数あります。これは、そもそも男性、女性が同等に参禅修行を行う現代アメリカの禅の状況を省みれば、ごく自然の成り行きであるといえるのではないでしようか。

今回の両禅センターでの行事を通して、前角老師ご自身が禅がアメリカ社会に根ざす様子を遙か遠くから見守つていらつしやる気がしておられます。

合掌

# パキスタン・ガンダーラの旅

ニューヨーク州立大学 伊藤宣博

## ラホール

ラホールの飛行場に着くと国立大学のラフク・カーン教授が出迎えてくれました。教授は二時間位待つたという事でしたが、民族衣装の腰下まで長いシャツの背中がビシヤビシヤで、もう暗くなっているのに三十四、五度もありそな暑さでした。我々が夏に行つた事もあってホテルに案内してもらつてもホテル内もそれ程涼しくなく、ラホールの第一印象は噂どおり何

しろ暑いという事でした。ラフク・カーン教授は科学を永年教え、奥様もアラブ語を大学で教えています。教授は一日割いて車で市内を案内してくれたり、二晩も続けて夕食に招待してくれ、地元の食事を御馳走してくれました。話によると、パキスタン人のほとんどが農業に携わるか、兵士として生計を立てています。政治が安定せず、從來の地主・豪農制度と軍部の影響が強く、近代化、産業化には未だほど遠い感じがします。殊にカシミヤ地方はインドとパキス

タン両国にとり唯一の風光明媚で肥沃な山岳地帯なので、一九四八年の独立以来国境紛争が絶えません。

ラホールはパキスタンで二番目に大きい、人口五百万の都市ですが、文化的にはムガール時代の建築物が多く見られ非常に美しい町です。ラホールは盆地の為か、パキスタンで一番暑い地域の一つだそうですが、灌漑水路が町の至る

所に作られ、その両脇に並木が続いて国内でも一番きれいな古都という感じでした。次の日は早速そのムガール建築の粹を極めたバードシャーヒ・モスクとラホール砦を旧市街へ見に行きました。バードシャーヒ・モスクは十七世紀にムガールの皇帝によって建てられ縦百三十メートル、横百六十メートルあり、中庭は一面巨大な石だたみで、一遍に十万人が礼拝できるという世界最大級のモスクです。我々が行った時には何しろ暑く、石が焼けてしまうので、人が通

る場所には雑布が切れ目無く並べられ、歩く人が火傷をしない様にその上から絶えずバケツで水をかけて雑布を濡らしていました。モスクの四隅には赤砂岩で作られた高いミナールがあり、西側には大きな葱坊主型の大理石ドームがあります。その中が礼拝堂で天井のドームや壁全体に色とりどりのアラベスク模様が施されています。

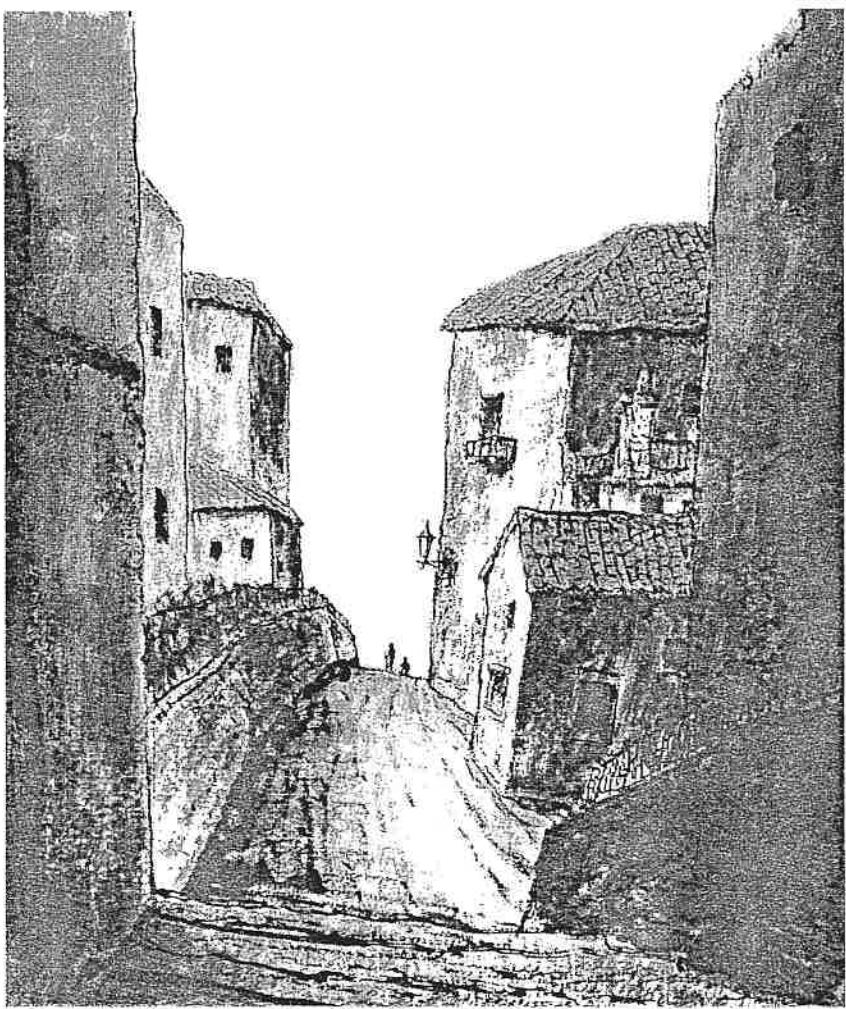
このモスクと隣り合わせにあるのがラホール砦です。ムガール朝三代のアクバル帝の時代に原型が作られました。巨大な建物で各皇帝が好んで使った広間や閲見の間があります。この砦の特徴は赤砂岩をレンガ状に積んである事と屋根の水落しにライオン・象・孔雀などの動物をあしらつてある事です。この様にアクバル時代のムガール建築にはヒンドゥ教の影響が強く、五代目のシャージャハン帝の時代になるとペルシャ風に赤砂岩のかわりに大理石を利用してペ

ルシャ風の図柄や象眼細工のタイルによるモザイクが見られるようになります。

旧市街から出てすぐの所にラホール博物館があります。この博物館もムガール式ゴシック建築で、パキスタンでも一番有名で立派です。ガンダーラの仏教美術品の他にはイスラム教の彩色文書が数多くありました。日本にも来た事のあるガンダーラの断食仏陀を再度見ました。これは二世紀後半の作ですが、東京で見た時はきれい過ぎる感がありましたが熱氣のある薄暗い建物の中で見る断食仏陀はより迫力のあるすごいものでした。ここはほとんど人がいなくていくつかある断食姿の彫刻を心ゆくまで眺める事ができました。ガンダーラの石の浮彫や彫刻の像はインド文化とギリシャ文化の特徴を併せ持ち、顔の彫りも深く、袈裟もギリシャの彫刻のように襞の多い見事なものです。

## タキシラ

ラホールから首都のイスラマバードのすぐ隣の町ラワルピンドイに飛びました。インドのデリーとニューデリーのようにラワルピンドイとイスラマバードは隣接する姉妹都市です。イスラマバードは新興都市なので、区画整理のゆきとどいた官庁街、商店街があるのに比べ、ラワルピンドイは昔からの雑然とした庶民的な町です。文化、風俗、習慣に関するラワルピンドイの方が面白いと思いました。ここから北西三十五キロの所にある町タキシラにガンダーラ最大の遺跡があります。この地方に仏教を紹介したアショカ王の死後五十年位してアレキサンダー大王の子孫に当るバクトリアのギリシャ人がガンダーラ地域に着てタキシラという町を作りました。ここは中国とイラン等の中近東を結ぶ南のシルクロードの町で、東西南北の



交易に非常に榮えました。二世紀頃には中央アジアから来たクシャン族が権力を握り、有名なクニシカ王の時には仏教が非常に榮えて何千という僧院や仏舍利が建てられました。遺跡全体は二十六平方キロにも及ぶ広大なものです。

先ずタキシラ博物館に行き、タキシラ遺跡全体の立体模型を見て全体の感覺をつかみました。ここ博物館には他にも「仏陀の一生」と題する多くの石の浮彫パネルの展示があります。博物館から歩いて四十分位の所にダルマラジカという仏教遺跡があります。数多いタキシリ仏教遺跡の中でも最も古く重要です。アショカ王の時代に仏舍利を納めて建立した物と考えられています。多分紀元前三世紀頃に、パキスタンで最初に建設されたストゥーパで最も大きい物の一つです。このストゥーパは西側の一部が大きく切り取られています。泥棒達が仏舍利の入った金の棺を捜して切り取つたものと考えられ

ます。大ストゥーパの回りには多数の小塔や祠堂があり、これ等は裕福な信者達が加護を祈つて寄進したものです。これ等は紀元前一世紀から西暦四世紀位の間に建てられました。

タキシラの次の遺跡はシルカップと呼ばれるバクトリアのギリシャ人により紀元前二世紀に建てられた町です。門から少しづれて南北に巾、車二台分位の大路があり、この大路を挟んで各ブロック毎に家が建ち並んでいた様子です。又、そのほとんどのブロックには仏陀かジャイナ教のストゥーパが建てられており、金箔を付けたドームが回りの壁から良く見えました。この町には井戸が無く水は西壁の外側にある河から運び込まれていました。大路の出口を出た延長上にはハティアール山があります。これがギリシャ型の都市に共通のアクロポリスになっていたのでしょうか。数ある祠堂の中の一つに中央に前方後円の仏塔を納めた祠があります。ちょ



ダルマラジカ

タキシラ



うビンドのアジャンタ等の石窟寺院で見られるチャイティア窟のように祠の後の半円形の所にストゥパがあり、それを囲んでアーチ状に柱か壁があつたと考えられています。大路の中ほどにストゥパの四角い基壇が残っています。その腰壁にはコリント式の柱頭飾りがあり、壁柱の間にはギリシャ風の三角破風、インドのチャイティア・アーチを持つ戸口があり、その上には双頭の鷲が乗っています。双頭の鷲は中央アジアのモチーフなので、インド、イラン、ギリシャの三文化の融合の結果として知られ、これを双頭の鷲のストゥパと呼んでいます。大路の東側にストゥパが沢山あるのですが、このストゥパの形が独特です。インド本来のストゥパは基壇も円形で全体に丸い形をしています。このタキシラやガンダーラで一番初めに作り出されたストゥパは基壇の部分が四角です。その上に半球形の本来のストゥパの形を作っています。

その四角の基壇も四角い台という単純な物ではなく、基壇の側面に壁柱を何本もつけて飾っています。方形の基壇の付いた柱はギリシャ・ローマ建築にはごく普通に見られ、この事はガンダーラ仏教美術が強くギリシャ・ローマの影響を受けている事を示すと考えられています。

シリカップの南ハティアール山の上にはクナーラ塔と僧院の跡があります。クナーラはアシヨカ王の息子おとしでタキシラの総督をしていましたが、義母に陥れられて父親から嫌疑をかけられていると信じ、その罰として家来に自分の目をくり抜かせました。その場所にストゥパが建てられ、目の見えない人達の巡礼の場となりました。今でもここはパキスタンでは最良の目の病院があるので目の不自由な人達が集まる場所です。

ガンダーラ以前の仏教では信仰の対象は釈尊ゆかりの地や、釈尊の遺骨を納めたストゥパ等

でしたが、ガンダーラ時代に入るとバクトリアのギリシャ人が来て、この時代に培われた現実的な考へで、人間の姿で表わされた仏陀を受け入れる素地が徐々に作られていつたようです。

クッシヤン族が権力を持つようになつてからはローマ世界からやつて来た工人により見事な浮彫や仏像が作られました。ガンダーラで多く見られる浮彫は、釈尊が出家する為に馬を引いてこさせ宮殿を出る場面、釈尊の六年間の苦行を彫った苦行の釈尊、釈尊による初説法を描いた場面、斜線が地上と天井を往復する為に通つた道、二道の宝階と、それに釈尊の入滅をあらわす涅槃があります。

## ペシャワ

ラワルピングディからペシャワ（ペシャーワル）に飛びました。ペシャワが州都である北西フロンティア州はアフガニスタンと千百キロの

国境線を有し、カブール川とスマット川に挟まれた肥沃な土地です。又ここはガンダーラ王国の中心地でもありました。ペシャワは国境の町であり、インド大陸と中央アジアの接点でもあります。旧市街には、伝統的なバザールがあり、ここは過去百年ほど変わった様子があります。ここでは日用品の売買と同時に白と黒のターバンを巻いたパターン人を見かけ、中には兵器や麻薬の売買を行う人もいるそうです。パターン人はアフガニスタンとの国境を挟んで両側に住んでいる部族で、勇敢な部族として知られています。町を西に向けてちょっと行くと、あの有名なカイバーパス（峠）となります。残念ながらも今でもアフガニスタンとの国境は不穏で外国人は通る事ができません。

西暦一～五世紀の間仏教王国であるガンダーラは史上類のない平和と繁栄の時代を経験し、中国、インド、それにギリシャ、ローマ等の地

中海地方まで含めた交易路の中心として栄えました。そのガンダーラ盆地の中心がペシャワでした。スマット川とカブール川に囲まれて大きな人口を支える事ができ、又千六百もあつた僧院の僧達が毎日托鉢に行く事ができる大きな町だつたわけです。

ペシャワの東北八十キロの所にタフティ・バイ（タフティ・バハイ）というガンダーラの山岳仏教寺院の代表的なものがあります。遺構の保存状態も良く、建設当時は白い漆喰で全面が覆われていましたが、今でもところどころ白い壁が残っています。一世紀頃に建てられ七世紀頃まで使われていた寺院で、僧院とストゥパのある塔院とが隣接しています。現在ストゥパは基壇が残っているだけですが、その周辺の祠堂は沢山残っていて、昔の姿が容易に想像できます。中庭に沢山ある祠堂やその中の仏像、ストゥパは裕福な巡礼達により寄進された物で、金

タフティ・バイ



箔を貼った仏像や釈迦の一生を描いた浮彫等が飾られていきました。僧院の二階に僧達が使つた個室があり、壁には小さな窓と二つづつ小さな棚が作られており、一つがランプ用、もう一つは個人の持物を置く場所だった様です。めいそうにふける中庭や雨水を屋根から取り込んだタンク、台所、食堂、トイレまであつたようです。

### ギルギット

ギルギットは標高千五百メートルの山に囲まれた奥深い所にあります。それでも一九七八年にカラコルム・ハイウェイが建設されてから非常に発展しました。雨はほとんど降らず、作物は回りの山々の雪溶け水によつて灌漑されています。ギルギットへの飛行機は今でも有視界飛行なので天候が悪いとキャンセルになりますし、ギルギットは標高が高いので飛行機の重さを軽くしないと離陸できないので、飛んで来た

旅客全員が又飛行機で帰るのはほとんど不可能な所です。こういう難しい条件の中で飛ぶ飛行機ですが、もし飛ぶとすばらしいマウンテン・ライトでラワルピンドイ出発後、カガーン渓谷の上を飛び、次にナンガニバル山の山腹すれすれに飛び、スリルがありました。

ギルギットは四方数百キロに亘り唯一の市場のある町ですので、商人が中央アジアやパキスタン内部のパンジャブ州、シンド州からやってきて、金曜日以外は毎日市場が開かれ、山羊からパラフィンランプに至るキャンプ用品、贅沢な陶磁器、中国からの絹織物に至るまで種々の物が売買されており、なかなか盛況でした。

### フンザ

我々はここからミニバスに乗り四時間カラコルム・ハイウェイを走つてフンザ地域の中心地カリマバードに向います。カラコルム・ハイウ

エイはヒマラヤ・カラコルム・パミールの各山脈を通り抜け、インダス川、ギルギット川、フンザ川に沿った中国とパキスタンを結ぶ昔のシルクロードの南路です。ハイウェイとは言つても我々の考える様なものとはかなり違い、砂利道で山腹の獸路を少し拡げた、やつとバスが一台通れる位の道です。そのかわり景色はすばらしく、下に氷河から流れ込んだ灰色の水が流れる川を見下ろし、所々に点在する部落眺め、杏や他の果物、それに馬鈴薯等の野菜の段々畠の門をみると、正しく桃源郷を思い起させます。フンザ地域はジョン・ヒルトンの有名な小説『ロスト・ホライゾン』で桃源郷と呼ばれ、見渡す限り石垣で囲まれた小さな段々畠が並び、そこいら中に植えられた背の高いポプラが段々畠の横線と氷河のある高山の稜線に映えています。フンザ人の長寿の神話は、楽園に住んでいる為ストレスが無く、杏を沢山食べ、動物脂肪が少

ない食事のせいだと言われています。年寄達が健康である事は事実なのですが、皆が百二十歳迄も生きるという話は大袈裟で、多くの人々は見た目よりも實際にはもつと若いと思われます。フンザでの生活は北部パキスタンの他の地方と同様厳しいです。杏を多く食べる事は事実で何も無駄にしません。種は燃料となり、種の中の味は粉になつたり、油を搾つたり、その糟は飼料となります。つまり桃源郷とは神が造つた楽園では無く、人間が汗水を流して荒地を人が住める程度にまで開墾した努力の賜として頭に描いた理想郷だとしみじみ感じました。

フンザは約二千四百メートルの高地にあり、一九七四年十月迄フンザ王国として内政一切藩主に任せられたパキスタン国内の自治王国でした。現在この藩主制は廃止されましたが、それでも独特の王国的雰囲気は残っています。フンザが独特の雰囲気を作るもう一つの要素は、こ

この人々がイスマイリ派のイスラム教である為です。この宗派の宗教指導者はアガ・カーンで、アガ・カーン基金を作り、学校や病院を建設して住民の福祉の増進に努めています。イスマイリ派の戒律は多くの宗派と比べて非常に緩やかで、例えば普通五回しなければいけない祈りも朝晩二回で、普通女性はモスクの中では隔離された女性用の席に坐りますが、この宗派では入口こそ別ですが、中では男女入り混ざつて礼拝できます。他の宗派では義務となっているメッカへの巡礼や一ヶ月間の日中の断食もしなくても良い事になっています。特に現アガ・カーン（四代目）は強い指導者で、特に女性に対し教育の重要性を説き、女性の社会参加を積極的に勧めています。カリマバードに居る間にアガ・カーンの女子校を参観する機会がありました。が、パキスタンの社会一般から見てかなり進んだ教育が行われているなど強く感じました。校

舎もとてもきれいで、現アガ・カーンが宗教指導者としてだけでなく経営者としてもかなり優秀なのであろうという印象を持ちました。

カリマバードの宿を出て二キロほど段々畠の中を歩いて行くとアルティツドの砦に出ます。

五百年前のこの藩主の城です。フンザ川迄三百メートルの絶壁の上に建つており、確かに砦と言われる様に川の側からは絶対に攻められない場所に建っています。三階建で小さな部屋がいくつもあります。地下には穀物倉と土牢があり、ここに入れられると真暗な中で暮らさなければならず、食物も時々しか与えられなかつたようです。三代前には藩主の座を争つてここで兄弟が殺し合つたという話しが残っています。牢に行く為のドアの横の柱には何か気味の悪い創が残つていますが、これは税金として納められた穀物の勘定を表した物に過ぎない様です。二階は藩主のアパートで寝室や王座のある部

屋、台所、風呂場、トイレ等があります。王座とは言つても木のベンチのような物で、全てとても質素です。屋根の上には先ず見張台があり、その他武器倉庫とモスクがあります。モスクやそれぞれの部屋の木のドアには彫刻が施してあります。モスクの奥に渡り廊下があり、その先には二十世紀の藩主の家があります。現在は藩主の親戚でこの砦の管理をしている家族が住んでいます。現藩主は、実際の政治的権力はありませんが、別の所に大きな屋敷を構えて住んでいます。屋上からはこの砦のすぐ下にあるアルティット村の住居が見え、女人の人達が彼等の泥の家の屋上で農作物を干したり、実を取つたりして農作業をしているのが良く見えます。

翌日ギルギットにバスで帰るはずでしたが、

当日はアシュラの日に当りました。アシュラーはシーア派の第三代イマム・フセインが殉教した日で、シーア派の男達はこの日村に集まつ

てフセインの苦痛を追体験しようと胸を拳で打ちながら行進します。中には血だらけになる人もいて深刻な祭です。この為に、たとえバスの運転手がシーア派のイスラム教徒でなくとも彼らのしきたりを無視すると、その仕返しを恐れてバスは全て止まってしまいます。パキスタンのトラックは極彩色の模様が描かれていてなかなかきれいですが、この時期は皆、お葬式のような黒いリボンをトラックの所々に結び付けて走っています。次の日朝早くやつとギルギットに向けて出発し、ギルギットから飛行機でラワルピングデイに帰る予定でしたが、案の定席が取れずにカラコルム・ハイウェイを十八時間かかって帰りました。なかなかスリルのある夜行バスでした。

フンザからカラコルム・ハイウェイを北東に行くと中国との国境に直ぐ到着し、その先がシリクロードで知られたカシュガル（カシュガル）

です。カシュガーニュースで来た日本人学生にも数多く会いました。この事はパキスタンの若者達が国境近くに行き、中国から密輸入された安い商品を買ってラワルピンドイやラホールに持ち帰り、小遣い稼いでいるらしく、夜でも所々で、我々の乗ったバスが止められ、税関吏がバスの屋根の上に山積みになっている荷物を厳重に検査し、脱税者から集金している姿を何回も見ました。

## カラチ

カラチに着き、日本貿易振興会の石橋さんにお目にかかる為にホテルから電話をした処、何しろ危険なのでホテルのハイヤー以外では外出しないようにと注意されました。お目にかかつてから伺つた話によると、カラチは死の町と呼ばれ、毎日何十人と殺されているとの事で、毎日、新聞にも何處で何人死んだかを記した地図

感じでした。

モヘンジヨダロは四千年の歴史を持つインダス文明の遺跡でレンガ造りです。この町ができるから二千年後に建てられたストゥパがありまます。古代のアクロポリスと言われる要塞化された丘の上に建つていて、この要塞の中にはモヘンジヨダロの行政庁、宗教関係の建物、公共風呂、国家の穀物倉、宮殿、集会場の跡が残つて

が載る位だそうです。これはパキスタン独立直後にインドから来たパキスタン難民達と人々、カラチに住んでいるパキスタン人の間の争いで、社会問題、経済問題が深刻となり、この二つのグループの間の争いも厳しいものになつていきました。助言に従いタクシーでカラチ国立博物館に行きました。ここは、今回我々が行かれなかつたモヘンジヨダロの遺跡の説明や、そこから発掘された物が多く展示されています。

いるそうです。インダス川に面したこの遺跡は驚くほど進んだ文化がこの川沿いにあつた事を表わしており、この中央集権型の社会はインダス川流域から西北にカブール迄、南はデリーム

でも続いていたそうです。アショカ王の出たモリヤン時代には仏教が保護されて非常に繁栄しました。

## 結び

普通インドの北部から中国・日本に伝わった大乗仏教とビルマやタイ、スリランカ等の東南アジアに広まつた小乗仏教と言われますが、今回

のパキスタンの旅は仏教の西への波及の源を見る事ができました。しかも仏教は東洋の物とされ、キリスト教等の宗教と比べられがちですが、ガンダーラ仏教王国はギリシャや地中海諸国の建築や彫刻とインドというアジア文化を融合させました。黒田方丈の留学僧制度も初めは

アジア諸国から始まりましたが、近年はアメリカやヨーロッパにも及んでいる事を考えると、仏教には東西の境は無く、古来の人々が東西南北、至る所に仏教を広めた様子を見てきました。

今日パキスタンは回教国となり、仏教の面影は各地に点在する美術館や遺跡に見られるだけになってしまった。過去に過激な回教徒がアラーの神以外の礼拝を禁じて仏像の顔を破壊したり、寺院を壊したりしましたが、少なくとも現在のパキスタンは過去の仏教伝統を保存保護しています。

へ父を語る

# “わが父”伊藤喜三郎

伊藤喜三郎建築  
研究所社長 伊藤一章

はじめに

最初にお話ししたいのは、自分自身の事です。

私は今五十二歳になりますが、私はこの七、八年くらい前から漠然と死という事について考えるようになりました。考えるというよりも意識をするようになったと言つた方が正しいかと思ひます。これは多分、我々の事務所が病院の設計をやつてていることに少し関わりがあるかもしません。やはり建築を通して人の生死を考えることが機会としては多いのですから、多分そういうことが原因だったと思ひます。そして

その頃に自分の身体を献体することを考えつきました、自分が万が一の時には、目とか腎臓とか、何か人に差し上げられるものであれば差し上げたいと思い、各々の協会に入らせて頂いたりしました。また、尊厳死協会がその頃出来まして、入会しました。そちらから送つて下さるパンフレット等を見て、色々な方の死に対する考え方について少しずつ知るようになりました。

この考え方というのは、自分の年齢のせいとか職業のせいとか色々なことが複合していたかと思います。父も当時七十五を過ぎ、その頃ま

で大変元気だったのが、急激にその頃を境に弱って参りまして、私の死に対する考え方、或いは意識は父の年齢とは関係ありませんでした。が、父の老齢化に伴い自分の死の意識が少しづつリinkingしてきました事を思い出します。

### 父の最期

だんだん歳をとり、それまで元気だった父が急激に弱くなつていつたのは、リュウマチと肺氣腫のせいだつたようです。だんだん自分の体の自由が利かなくなつて、毎日の生活が楽しくなくなつてきて、時々、自分は人生があまり面白くなくなつたら自殺をしたいと漏らすようになりまして、やれピストルがないかなとか薬がないかななどいうなことを時々呟くわけです。母にそんな事を言つて困らせたりしていました。母にとつて自分の配偶者にそういう事を言われるということは、大変辛い気持だったと

思います。私は、私なりに父の身になつてそれまでの父の生き様を考えてみると、父の自殺をしたいという事に対し同意をするという意味ではありませんが、そのように思うことに関しても何となく分かるような気がして、父ともそん話をした事を記憶しています。

父にはゴルフと絵画というのが人生の最大の喜びで、二つの目的のために毎日生きていると いうようなところがありましたから、リュウマチで肺氣腫でということですと、ゴルフも出来ない、絵も描けない。自分の人生の楽しいことを二つ共奪われてしまつたわけで、そのような考えを持つことも無理はないと思わされました。

結局、肺氣腫で呼吸も困難ですし、手も痛くて動けないので、偶に調子がいい時にちょっと筆を持って絵を描いたりということもありましたが、大体は日がな一日椅子に座つてボーとし



講演中に

アトリエにて



て絵を眺めていて、その時間がどんどん長くなつていきました。それは、時間が経つてみますと、自殺をしたいと言つていた頃は逆に言うと、まだそういう事を考へる、或いはしたいというエネルギーを持つていたように思います。最後の方になると、そういう事を考へるエネルギーすら無くなつて参りました。亡くなりましたのが昨年の三月ですが、一昨年の末くらいから時々意識が混濁するというか、あらぬ事を言つたり、辻褄の合わない事を言つたりするようになり、その頃の母は、そういうケアに神経を磨り減らしていたと思います。

いよいよ体の調子が非常に悪くなつたものですから、入院をしました。その頃、どんどん意識も混濁してきたので、家族の者が父の気持が和むようについて配慮で、有名な画家の描いた絵のカレンダーを持つて行きました。誰が描いた絵かということも分からなくなつてきていて、絵を捲つてやりますと、何だかつまらなそうな顔をしていましたが、ピカソの絵のときだけ「この絵は強いね」と言いました。勿論好き好きがありますが、ピカソのキューブの時代が終わつた頃の絵でしたが、それで私もピカソの絵をもう一度見直したくらいで、人間の意識が遠のいていこうとしている最中にも強い絵という事を認識させるというのは、普段我々が見慣れているものではない何か違うものを取り出して見ているのかなと思つて、ちょっとギクリとさせられた記憶があります。

父の亡くなる大分前に、或る人にゴルフを誘われていましたが、その頃父もあまり具合が良くなかったのでお断りしていました。その後もう一度同じ方から誘われた時、小康状態のよう思われたので、三月二日、沖縄へゴルフに行きました。ところが三日の朝、ホテルからゴルフ場に着くと、どうも具合が悪いようだから早

く帰つて来た方が良いと連絡が入りました。慌ててゴルフ場から直接飛行場に行き、運良くキャンセル待ちの飛行機に乗ることができて、十二時ちょっと前に日大の駿河台病院に着きました。昼まで持たないのではないかと言うことでしたが、幸いに、俗に言う死に目には会えたわけです。

父は、楽しくそして劇的に人生をエンジョイして、八十二歳にあと数カ月というところで静かに亡くなりました。病院の先生方は、肺に管を通して酸素を送ればもつと持つとか色々な事を言つて下さいましたが、昔は注射針を見るだけで気絶しそうだった父のことを思い返すと、とてもそんなことをする気がしませんでした。父にとつても楽しいことはもう無い、もう十分遊んだのだからという確信めいたものが我々にはありましたので、父にはもう触らないで頂いて結構ですと言い、静かに眠つてもらいました。

夕方の五時くらいだつたでしようか、我々家族と当社の石嶋副社長と、父と一番長く付き合つて下さった一、三の方が幸い居て下さつて、父の最期を見取りました。

### 画家志望から建築家に

父は大正三年に昭和通りの宝町で生まれたと聞いています。祖父が小さな鉄鋼所のようなのをやつていて、シャッターなんかを作つていたようです。当時昭和通りは既にあつて、十六間道路とかいう名前だつたようですが、夕方になると赤い切れを投げてはコウモリをそれに捕まらせて遊んでいたという非常に穏やかなんのんびりした頃だつたようです。中学になりますといよいよ父の一生の楽しみとなる絵を知ることになります。油絵を覚え始めて、祖父の工場の一隅に小さいアトリエを作つてもらって、そこで親友とオペラ『ラ・ボエーム』の様な芸術家

仲間と芸術論を戦わせたり、中学生のくせしてモデルさんを呼んで友達と絵を描いたり。そこに爺さんが、どういう気持か分かりませんが、お茶を入れて「何やつているんだ」と見に来ていたそうです。

その親友と、自分たち二人は絵描きになろうと堅い約束をそのアトリエで交わしたそうですが、結果的に父は途中で挫折することになります。自分では色光派と呼んでいたようですが、色を光のスペクトルに分けて、そのスペクトルで物や人を描くという一派を自分で成したつもりだつたそうです。上野の展覧会のもぎりのおばさんが「あんた貧乏なのに絵を描いて偉いわねえ」ということで入場切符をくれ、今度はその切符を売つて、そのお金でまた美術館へ戻つてカレーライスを食べるという生活をしていました。そこで、本当にボヘミアンのような楽しい生活をしていたようです。

今回つくづく思ったのですが、こういう機会を与えて頂いたことによつて、自分の父親の生涯をトレースしたわけで、実際に珍しい体験をしました。今日ここにお集まりの皆様も自分の父親がどういう風に生まれて、いつ何をして、その時どういう思いだつたかということを詳しく聞くチャンスはおありだつたかもしませんが、私はそれを五十二になつて初めてさせて頂き、父のお友達だつた方何人かにお目にかかるて話をお聞きする機会に恵まれました。中には、思い出話をなさつて涙ぐまれる方もいらつしやつたりして、本当に皆さんに感謝をしています。父のことをもう一遍掘り起こしてトレースさせて頂いた事は、親父に対し「南無阿弥陀仏」と祈つてゐるか親孝行させてもらつてゐるような独特のいい気持ちになりました。

父が旧制中学後半の頃、祖父が事業に失敗し会社が倒産しました。ですから、楽しく絵を描



武  
昌

きながら暮らしていくことができなくなり、絵にあまり遠くなくして食える職業は一体何だ、

建築だ、という荒っぽい加減な決断をした  
らしくて、急速大いに勉強して日大の理工学部  
に入ることに成功しました。漸く大学に入れた  
わけですが、大変厳しい学生時代を過ごしたよ  
うです。しかしながら同時に、その時に同窓の  
友達として内田祥文さんと知り合い、その内田  
さんが、画家になろうと思って建築家になったた  
父に、本当に建築を一生懸命やろうと思わせる  
インパクトを与えることになります。同時に、  
大学におられた小野薰先生との出会いが父には  
大きな事だったようです。小野薰先生は元東大  
の生産技術研究所におられて日大に来られた方  
で、内田祥三さん、佐野力さん、岸田さん等多  
くの立派な建築家の方々が日本の建築界におら  
れて、小野薰先生からそういう方々とどんどん  
父のネットワークが出来て、そういう方々から

何等かの薰陶を受けたことも父にとつて非常に  
大きな利益だつたと聞いています。

とにかく父によれば、中学ではいい加減な生  
活をしていたけれども、大学では大変勉強して、  
優等で卒業したということです。卒業と同時に  
小野先生の推薦を得て、東大の營繕課に入りま  
した。營繕課で二年くらい働いて、その後日立  
製作所に入りました。当時は戦時中ですから防  
空壕の設計などをしていました。それから兵隊  
にとられて千葉の鉄道隊に入り、幸運にも戦地  
に行くことなく兵役を終えました。

#### 事務所を設立

終戦後は大成建設（当時、大倉土木）に入れ  
て頂く事になりました。それも小野先生のいろ  
んなお引き合せもあつたりして、大変多くの  
いい友人に恵まれて、終戦後の苦しい生活の中  
でも充実した時代を送つたと聞いています。約

六年半くらい大成建設に勤め、昭和二十七年に中野の自宅に何人か仕事をしてくれる仲間が集まり事務所を設立しました。次の年の二十八年には四ッ谷の交差点のすぐ側で事務所を始めましたが、実際はそれほど仕事はなく、仕事をしたいけれども設計を出して下さるお客様もいないということで厳しい状態が続いていたようです。しかし、小野先生の紹介でちゃんと設計してくれればという条件で、当時大久保にありました社会保険中央病院の仕事を保険庁から頂戴しました。この仕事が父にとつて初めての病院の設計でしたが、その病院を設計したことがうちの現在に至る歴史の基礎を作りました。余談ですが、五、六年前、父の第一作となつた社会保険中央病院の移転新築の設計をやらせて顶きました。

その後、事務所は飯田橋駅の四ッ谷寄り出口の坂を下りたところの喫茶店の上、三十二年に

銀座の裏にビルの設計をしてそこに入った頃は大変忙しくもあり、毎年年末になると入院を繰り返していました。三十七年に銀座七丁目の表通りに引っ越して、三十八年に仙台に支店をつくりました。そのあたりは順調に推移致しました。四十六年に紀尾井町の文芸春秋ビルに引っ越しして現在に至っています。

昭和四十六年には、記念すべき広尾の日赤医療センターの仕事を受注しました。この仕事は事務所始まつて以来の規模で、こんなに大きな仕事は二度とやることはないだろうと、父にとつて最大の感激を持つてやつた仕事です。

### 有名だったゴルフ

文春ビルに引っ越した頃までは仕事が大変忙しくて、絵を描く時間も殆どありませんでしたが、その後は会社もだいぶ安定し、少し絵を描ける時間も出てきました。同時にゴルフにも相

当気が入ってきて、以前から岸田秀人先生にゴルフの手ほどきを得たりして、当時の梓設計社長の清田先生とか現代事務所の北代先生とか、そういうお仲間と一緒にゴルフをやっていました。父が有名だったのは決して一ラウンドでは終わらない事です。とにかく一ラウンドハーフはやつて、調子が乗ると二ラウンドでも回りたい。あと三ホール回ろうかとか四ホール回ろうかとか言われて、とにかく父とやつた人は辟易していたのを覚えていてます。

ある時、ものすごく暑いインドでゴルフをやるチャンスがありました。これは私が一緒だったのではなくて人から聞いた話なのですが、一ラウンド終わった後、父が「もうハーフ行こうか」と言つたらしいんです。そしたらインド人のキヤディが青くなつて、「いや、もう暑くてかなわないから勘弁してくれ」と言つたんですね。父は非常に瘦せていて、暑いのはいくら暑くてい

も大丈夫、寒いのはちょっと寒いと全然駄目という人で、「インドへ行くと体の調子が良くていいなあ」と言つて、本当にインドへ行くのを喜んでいて、僕の記憶でも十何回行つたと思います。それからパキスタンも随分と行きました。自分の絵のために仏跡とか、いろんな面白い興味の対象があつたことが最大の理由ですけれども、暑さが父の体に合つたということも一つの大きな原因だつたと思います。

### 父と同じ建築家の道へ

父は戦時中三十二歳で、父の美の基準にぴつたり合つた母と結婚し、私は昭和二十年二月に生まれました。父は仕事の事、事務所内部の事など色々苦労していましたが、何も知らずに僕は大きくなりました。のんびりした僕を、本当に優しく見守つてか見放してか知りませんが、親身になつて「お前は建築家にならなくともい

いよ、何か他の商売だつて全然構わないから」と言いながら、いろんな道を僕と一緒に探してくれました。結果的に僕は自分の利益になるのではないかということで、父と同じ道を選択して父と同じ日大の理工学部に入りました。何とか無事に大学を卒業し、会社に一年ちょっと勤めた後、イタリアに行くことにしました。イタリアに一年半くらいいましたが、その間に父と母で僕を訪ねて来てくれました。

父の最も重要な作品は、昭和五十二年に設計した神戸の中央病院です。うちの事務所としては初めて建築学会賞をいただき、更にBCS賞も頂戴した記念すべき作品となりました。

昭和五十六年には、当社にとつてODAで初めて「日中友好病院」という海外の仕事を受注します。一〇〇〇床という大規模なプロジェクトでした。このプロジェクトを通じて中国の方々と多く知り合い、このネットワークの関係

から六十二年に中国の民間工事の仕事を受注する事になります。これは北京市西直門の国際サービスセンターという仕事で、この仕事が結果的に我々の事務所の危機を招くことになりました。この仕事は中国の方々との考え方の違い、或いは業務範囲の違い、色々な認識の食い違いがありました。我々はそれまでODAの経験しかなく、ODAですと日本の設計慣習に従がつてやれば良いのですが、この時は直接の契約だったために我々は首に鎖をつけられた状態で仕事をすることになつてしましました。なぜそういう仕事をやるようになつたかというと、父は超高層建築をやりたいというのが悲願で、この国際サービスセンターの仕事は三十何万平方メートルくらいの大きなコンプレックスで、その中に超高層が何本か建つというプロジェクトでした。父は、何とかしてこれをやりたいと、反対する僕とだいぶ対立しました。最後に父が中

国に行つて僕のところに電話してきて、「今、隣の契約会場に新聞社の人達がたくさん集まっている。お前がどうしても嫌だと言うのなら俺はこれで帰るけれども、その実情を理解してほしい」と言いました。僕もそこまで父に言われたら拒絶することも出来ず、「分かりました。それではそうして下さい」ということで契約をしたのですが、実はこれは大変な泥沼の始まりでした、それから僕自身にとつて初めて塗炭の苦しみというものを味わうことになりました。

とにかく行けども行けども泥沼のようなプロジェクトで、中国に行く度に自分の顔が歪んでくるのが分かりました。本当に辛い時は涙が出そうになるくらい辛くて大変でした。しかし、それまで父のものとして見ていた事務所を、自分の中のものとして感じるようになりました。自分も必死になつて何とかこれを乗り越えようと思ひますし、事務所の先輩達も一緒になつて、頑張

つてくれました。最初のうちは僕がこの仕事を反対していたこともあつて、父がその仕事をやつて僕が国内の仕事をやることで仕事を分けっていました。しかし、どんどん仕事が大変になり父が苦しんでいることが分かつてきました。苦しんでいる父を遠くで見ていられなくなり、これでは子供として立つ瀬がないと思い、父にある日「僕が代わって、あとは僕の信ずるままにやらせてほしい。とにかく親父はこれをやつていたら死んじやうから、代わろうよ」と言つて、バトンタッチしました。その後一年か一年半くらいで、一生懸命やつてくれる仲間の人達と、この仕事を何とか無事に乗り切ることができました。この建物は結果的には建ちませんでした。アパートが一つだけ建つて、今は朽ち果てています。当時その社長だった人は、大変偉い方の息子さんでしたが、今は刑務所です。

その仕事は結果的に何とか乗り越えたため

に、僕は生まれて初めて厳しい仕事を乗り越えることを覚え、一緒に仲間として仕事をやつてくれる生涯の友人をそこで見出したと思っています。それは僕にとっては苦しみというよりも結果的には素晴らしいものを授けてくれたわけです。しかし、父はそれですっかりエネルギーと自信を無くしてしまって、また僕が何とかそれを上手く乗り切ったことから、そろそろ僕に社長をやらせようと思ったようです。それである日「お前、社長になれよ」と言われ、いよいよ社長を就任することになりました。父はその時僕に、「とにかく社長をやる以上は『こんな会社は守りに入つては駄目だよ、とにかく攻めて攻めて攻めていかなければ駄目だよ。俺はお前に譲るから、好きなようにやつてみろよ。一切口を出さないから』」と言いました。その結果、本当にそれつきり僕にああせいこうせいということは一回も言つたことはありません。丁

度バブルの前でしたから会社もすっかり順調にいきまして、休みは多くなるし、会社の人にとってみればまだまだですけれども、給料も少しは良くなるし、とにかく状況はどんどん良くなつていきました。それは全くただ単なる幸運だったのですが、父は「お前は偉いなあ、凄いなあ」ということばっかり言いました。それは本当に自分が一番良く分かつていて、社会の好景気のお陰と、何と言つても最大の理由は父が基盤を作つてくれたことだということは、重々分かっているつもりです。

僕はだんだん歳をとつてきて、なるほど父という人は良かったなあと、こうしてもう一遍父を味わい直しています。ではその様な僕が父から引き継いだ会社が今どんなことをやつているかと言いますと、その一つに横浜のみなどみらい21地区にある神奈川県警友会が所有する「けいゆう病院」があります。

## 良い父、良い仲間

まだまだ私などは父の歩んで来た足跡から比べたら何もしていらないに等しいような気がします。父は、自分で望むか望まないかに関わらず、

色々な災害、人生や会社の危機、色々なものにぶつかってきたわけですが、僕自身はそういう点ではまだこれといった事件にも遭遇していません。まだまだ人間としての深みに欠けるだろうと思います。しかしこれも僕の境遇で仕方がないので、この中で頑張ってやつていこうと思っています。父は僕の人生の先輩として人生を楽しく豊かなものとして生きる事を実践しましたし、そこから僕はいろんな事を教えてもらつたと思っています。僕らは大変仲の良い親子だったということは自信を持つて言えますし、お互いに楽しい仲間だったと思っています。ですから父が亡くなつた時には僕の気持として、

良い父だったと思いましたし、良い仲間だったと思いました。うるさい事やら色々無くもなかつたけれども、人生を一緒に楽しく過ごせたことは大変幸せだったと思っています。

厳しい建築家のお話ではなくて、極めて人間的な付き合いとしての父と僕との関係についてお話をさせて頂きましたので、ご期待の向きとは多少違うものがあったかもしれません、これも我々の生き方だということでご理解を頂きたいと思います。

今日、決して嘘のないお話をさせていただいたことが僕のせめてもの皆様に対する誠意だと思います。どうも有り難うございました。

注 平成九年七月十日、東京建築士会における伊藤一章氏の講演、「建築家再発見／子が伝える『わが父』」より一部を割愛して掲載させて頂きました。（文責・編集部）

「父を語る」

# 生涯仏使として

錦戸節子

「見事に完成された人間像」この一節どおりに、父は平成七年四月十六日逝去致しました。

物心ついてより父の大きな声、荒らげた声は一度も耳にした事がなく、叱られたという記憶もないまま父の死を迎えました。

中学二年の頃、陸上競技の練習で毎日走っていた折り、制服より帰りのバス代が二度程盗られ、「お父さんバス代を盗る人がいるのよ」と訴

えたところ「そのような心をおこさせた方が悪い」と言われました。精神的に幼かつた私には、何ゆえに盗られた方が悪いのかが理解出来ませんでした。又「言ってやろう、と思う事があるてもすぐに口に出してはいけない。いつでも言う機会はあるのだから」これは、人と争う原因を作ったり、相手にいやな思いをさせてはならないということでした。その一言がいつ迄も心



の傷として残るということは、日頃から心せねばならないと、父の言葉を思い続けて大人になりました。

その心と形を表したと言えますが、難病治療の第一人者であらせられる、平野有信先生の「錦戸さんの作られた仏像は、どんなにこわい表情であつても、穏やかなやさしさを汲み取る事の出来る顔に見えるが、きっといつも穏やかな心で毎日を送っていたのでしょう」とのお言葉です。

そのとおりで家族にもよそのお方に対しましても、わけへだてなくもの静かに慈愛に充ちた眼ざして接しておりました。そして、何事にも氣負う事なく一步も二歩も下がり、人の心を大切にし感謝の心と共に、もの静かに控えている父でもありました。

立正佼成会の会祖様も「錦戸先生とは二十五年にもわたってご交誼いただいておりますがそ

の謙虚さにはいつも心を打たれます。とかく名をなすとその名声に溺れてしまう人をしばしば見かけますだけに、錦戸先生の少しも変わることのないお姿に接するたびに、この方こそまさに仏師のお手本といえるのではないかと感じるのが常であります。そういう意味で、一人の人間としてまた仏師として、私は錦戸先生を心から尊敬申し上げておるのでございます」と作品集に御寄稿下されました。

校成会の御本尊様を制作するにあたりましては、京都・奈良と二五〇ヶ寺の古寺を訪れ、あらゆる仏像を眼にし研究を重ねて制作したのでございますが、会祖様は「仏像を拝むことによつて仏様の心を知り、仏様のお慈悲の見守りをひしひしと感じます。その仏様のみ心、仏様の本眼を姿形に移すのは技術だけでできるものではございません。仏様のみ心を形に現すためには制作者のみ心が、み仏と通い合わなくてはな

らないと思います」ともおっしゃられておりましたが、父は滝に打たれての修業、制作のたびの早朝三時の水ごりと、多くの精神修養と精進研鑽を重ね、天台宗の仏像には天台宗のお経というように各宗派のお経を唱え、お経の教えにもとづき制作に打ちこんでおりました。  
従つて、たんなる彫刻家ではなく

心にしたがつて身を守り

体にしたがつて身を守り

仏にしたがつて生命いのちをつくす

生かされて生きるこの身を悟り得ば

身を粉にしても つとめ果さん

厳寒まさにわが座を徹す

心経百巻誦し終えて

半窓樹影漸く白し

再び灯火を点に香を焚たき

想をこらす新仏像

時流にそむき一人古影を守り

枝のつたなきを深く思え  
寂寥慰めんと欲するに

まことに由なく

われまた是を誰にをか訴えん

斯道茫々みなみな斯の如し

朝暮必然孤峰を極めんと

ひたすらに祈る百日の行

世人の嗤わらい心外に聞きて

縁に従つてすべからく従容

精進を我が家とし

精進を樂とす

精進の中に 安樂を看て

精進を永遠の命とす

と、詩のごとく身も心も修業に明けくれ、そ

の信念をもつての日々は苦ではなく楽しみともしておりました。

「仏像は私が作っているのではなく、仏さまの手をお借りして作らして頂いている」のだと申しておりました。  
そのような心でなかつたなら、毎日の般若心経百巻をはじめ聖天經、大黒天經、各真言千回と二時間半以上のおつとめはなし得なかつたと思われます。

お経もただ読み進むのではなく、その一つ一つのもつ意味を味わわなくてはならない。また、その教えのもつ深さに涙することもしばしばであつたと、小平教会、蔵野教会長様よりお聞かせいただきました。そして、三矢支部長様が「先生。お経はそれ意外にはどのようなお心であげられていらつしやるのですか」の問いに「私の作らせて戴いた仏像を安置下さつていらつしやる方が、幸福にお過ごし下されるように拝ん

でいるのですよ」とも申していたとの事です。

お経の教えにもとづき研究し、父の作となるべくたゆまぬ研鑽と精魂かけての制作は、完成時においては、「ふくよかなお顔と流れる線の美しさ、優雅な佇まいに「何と素晴らしい作であろう」といつも見とれざるを得ませんでした。

また、父も夜中に眼ざめた折にはよくアトリエで観賞しておりました。

アトリエでの作仏との対話は心静まり、次なる制作への意欲にもつながつていつたのだと思ひます。そして、浮かびくる詩をノートにあるいはメモ用紙に記し、夢にみた情景を眼ざめると同時にすぐ書けるようになると、枕もとにメモ用紙と鉛筆が置いてありました。従つて、家の人らこちらで詩の書かれた用紙を眼にいたしました。これらの数々の詩は、第八回個展に第二集として「仏との出会い」という題で発表いたしました。

生涯晴れがましいことを嫌つた父でしたが、

仏教界で最高の賞といわれております「仏教伝道文化賞」のみ再度のお話でお受けいたしましたが、その時の気持ちを『仏天の慈悲』との題で、

得難き法にあい

受け難き賞を拝受す

みなこれ仏天尊台の慈悲

深く深くこの理を悟る

娑婆世界は是れ

因縁因果の道

道に背かず道に従い

日夜常に精進

老いて更にこの理を感じ

と、詩にあらわしております。そして、この賞の副賞で頂戴いたしました五百万円は、障害児

の育成に孤軍奮闘しておられる、宮城まり子氏のねむの木学園に寄贈いたしました。また、受賞に際しまして毎日新聞の『このひと』の欄の取材で『見事に完成された人間像』と評されました。

母には夫として子等には父として、又芸術家としてこれほど素晴らしい人物はなく、錦戸新觀を父にその父をささえて來たやさしく賢い（父は昨年のお正月<sup>もと</sup>ここまでこられたのは母がそばにいてくれたからこそと感謝の念を申したそうです）母の下に生まれ出する事の出来たしわせに心から感謝しております。

告別式においては、川崎大師様、立正佼成会様、浅草寺様、前下妻市長様の弔辞、また川崎大師 高橋隆天御貫主様の錦戸家においての二七日の読経、そして、月刊誌「川崎大師だより」一面全掲載、中外日報の日本を代表する仏像彫刻の第一人者錦戸新觀としての破格の七段にわ

たる記事、唐招提寺様における毎年の永代法要、比叡山延暦寺様をはじめ各大寺院よりの弔電と宗派を越えての弔意は、父の制作させて戴きました仏像の安置場所がいかに多かつたかを知ると同時に、仏使（父は師ではなく、仏さまのお手をお借りして作らさせて戴いているのだからとの事で仏使の方を好みました）錦戸新觀であつたからこそと、父の人となりをあらためて知らされました。

詩集第二巻完成の折、私は父に次のような詩を贈りました。

明月や天の窓より  
<sup>あま</sup>

照らし入り

父姿作自のみ仏と  
相話して

仏の心 身の心

唯暫くは<sup>とも</sup>同じせん

我行を仏とし

偏に仏のお手配”と

我行を詩卷とし

愛でし花を宝前に

時刻を惜しみて念念に

新たな志専らとなす

月日重ねし 現みの父

“一切衆生悉く仏性にあり”

この一言につくる父なり

只、只頭たるるなり

朝な夕なの読経のまいり

仏と我身を一にして

勤行 勤行て 尚勤行

心願成就を祈り伏す

亦、この父を

支えし母を時に知り

父母の下

生ある幸福せを

今ここに

年々歳々み仏の

品格あふるる対面は

應に一刀三札

心血の芸術

一作一作誕生す

出会える喜び

この生命（作仏のこと）

仏像というのは「ただ美しい」というだけではダメで、祈る者の心を打つ尊厳さと迫力、そして心を揺さぶる慈悲がなくてはいけない。さ

らに、四方八方どこから押しましても広大無辺

の慈悲と尊厳さといったものが、自然と感得されるようでなくてはいけないとも申しております。

一心に彫り続け、ある時は己をとことん追い

つめ、生死を賭けた息詰まる思いの中で滝に打

たれ、岩に坐し、一步でもみ仏に近づきたいとの一念で、一作一作心血をそそいで彫り続け、

仏を顯すためにその仏を見ようと求めてやまぬ  
求道の生涯は、まさに如来寿量品の経相の如く  
でもありました。

即ち『咸く皆恋慕を懷いて、渴仰の心を生ず。衆生既に信伏し、質直にして意柔軟に、一心に仏を見たてまつらんと欲して、自ら身命を惜しまず』と。

心願の七觀音も制作成り、生涯仏使として聖業にその天命を全うし、勤め難きを勤めなすべきことをなし得て、心やすらかに旅立つてゆき

ました。

身をも心も仏に

おまかせ頂けし身にあれば  
この世に命のある限り

鑿をとりつつ仏彫ぼとけば

朝に念じ 夕べに侍り

このことのみが我つとめ

生涯家族を愛して常に親切に、そして、やさしくして下さった父でした。

そして『法眼位』という位（江戸時代後この位を、授けられた方はいらつしやいません）と、『人の三倍努力して一步前進』という父の真情は家族は勿論のこと、父を知るお方の中にも生き続けて行くことと思つております。

（錦戸新觀先生御息女）

# 唐招提寺舍利会開山忌に隨喜して

明治大學助教授 阿部慈園  
駒澤女子大學講師（横浜善光寺育英会參與）  
東方學院講師

①

若葉して 御目の事 拭はばや

て、御影堂とした堂宇に安置されている。芭蕉は、御影堂に移される以前の本願堂（旧開山堂）にまつられていた和上の像と対面した。それゆえ、この句碑は講堂の北東裏、本願堂の正面階段脇に立っている。

また、会津八一は和上の像に、

俳聖・芭蕉は奈良・唐招提寺に詣でたおり、  
盲目の鑑真和尚像を拝して、その感慨をこの一句に託した。現在、和上の像は、昭和三十八年三月にもと興福寺別当一乗院の宸殿を転用し

とこしへに ねむりておはせ おほてらの

いまのすがたに うちなかむよは

と語りかけた。八一が訪ねたときの唐招提寺はずいぶんと疲弊していたのであろう。かれは和上像に向かって、永遠におねむりくださいませ、万がいつお目がひらかれることがあつてこのおおてら（唐招提寺）の現状をつぶさにされ、むしろひどく涙されるよりは、と。



国宝 鑑真大和尚像

中村元先生（東方学院長）の名代として、六月五日と六日律宗總本山唐招提寺の舍利会開山忌に随喜させていただいた。以下『成寿』誌上をおかりして、法要の一斑を紹介し、ついで授戒伝律の師・鑑真和尚の来朝の意義について少しく考察したい。

〔2〕

六月五日晴れ。近鉄橿原線西の京駅を下車し、タクシーを駆つて南大門前に降り立つ。孝謙天皇の手と伝えられる「唐招提寺」の門額（ただし模刻）。その勅額は新宝蔵に保存）は、女帝ながら力強く雄渾に見える。書体は籠字カレという。門をくぐると金堂の偉容が目に飛び込む。高校二年の秋の修学旅行のとき以来であるから、何と三十三年ぶりの金堂である。本尊盧舍那佛等の諸仏を拝す。金堂正面の八本の列柱とその吹放しはつとに有名であるが、そのごくわずかの

彌らみ（エンタシス）をもつ「円き柱」はなつかしかつた。少し高めの石段を下りて、右に向かい、鼓樓（舍利殿）を左に一べつして、校倉（づくり）の經蔵・宝蔵と礼堂・東室の間を進んでしばらく行くと御影堂の玄関に至つた。

鑑真是唐招提寺が建立されて四年目の天平宝字七年（七六三）五月六日に亡くなられたが、その五月六日は新暦六月六日にあたるので、毎年この日に開山忌法要が営まれる。和上像がおさめられてある厨子が開扉されるのは、一年中でこの法要の前後三日間（六月五日から七日まで）のみである。

東山魁夷画伯の襖絵「濤声」

（とうせい  
ひがしやまかいい）

の間に端座される和上像からは、不屈の意志の強さ、渡海の苦勞の重さに弘法の慈愛の深さがひしひしと感じられた。お像是あたかも生きているごとく、鼻からは静かな息づかいが聞こえてくるほどだ。

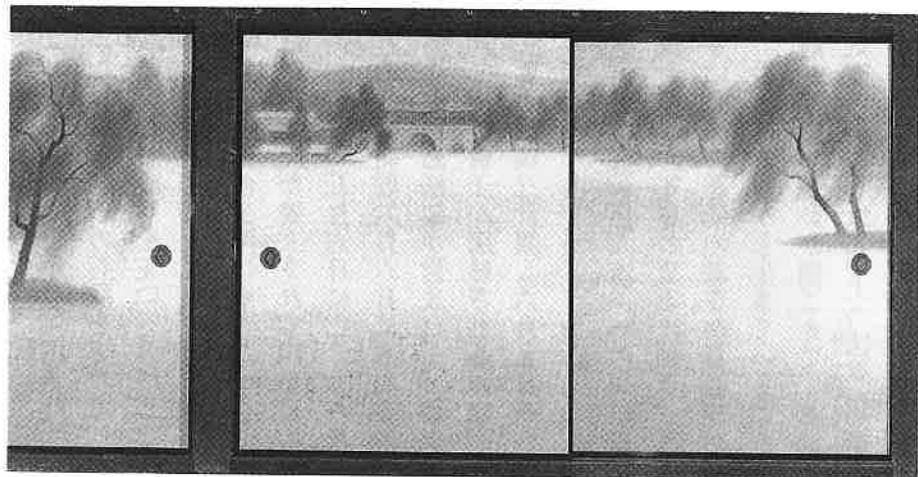
ひとつ気づいたことは、和上の法界定印（ほつかいじょういん）の手の

置き方が、日本のそれとは逆に右手を左の掌（たな）に包んでいることだ。これはむしろインド・中国の伝統をふまえている。

東山画伯のそのほかの障壁画をつぶさに見て御影堂を出る。門のすぐ近くの三暁庵にて敷内流のお手前をいただく。和上御廟にお参りして『舍利礼文』を誦す。墓所への参道の両側には沙羅双樹（和名夏つばき）が茂る。一樹の根元に目にまぶしい、落花の一つが置かれてあつた。新宝蔵の前の桐も小さき白き花をいつぱいにつけていた。花に鼻を寄せると、品のよい香気が鼻孔をくすぐつた。

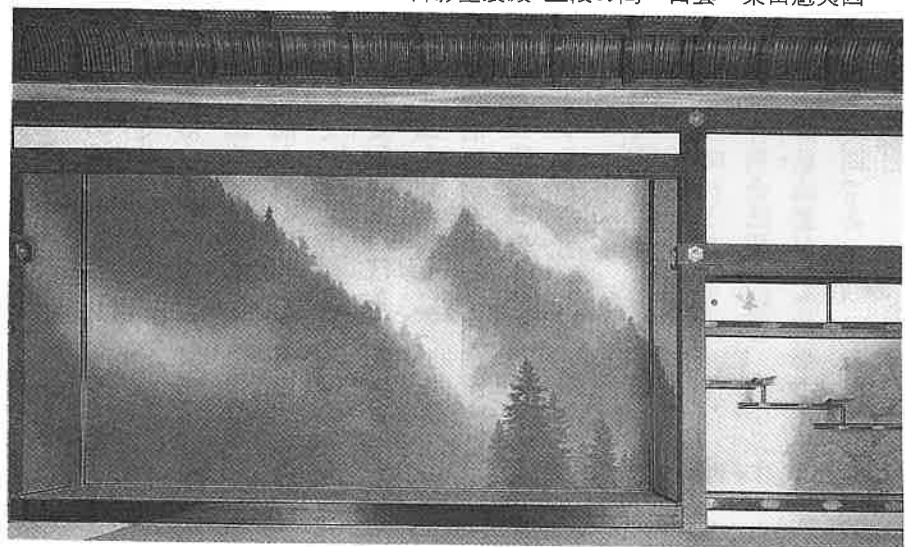
### 〔3〕

六月六日晴れときどき雨。午後一時より講堂において舍利会法要に随喜。開山忌すなわち鑑真和上の御忌法要が「舍利会」と呼ばれるのがずうつと疑問であった。五日御影堂で買い求め



御影堂宸殿 松の間 揚州薰風 東山魁夷画

御影堂宸殿 上段の間 山雲 東山魁夷画



た『古寺巡礼奈良⑨唐招提寺』（淡交社）を読んで永解した。森本孝順前長老によれば、和上は

唐土より「如來舍利三千粒」を請求した。これは

金龜の乗った舍利容器とともに鼓樓（ゆえに舍利殿）に藏されている。遠藤證圓現長老によれば現在三百粒ほどに減っているという。ともあれ、唐招提寺におけるこの仏舍利に対する崇拜。舍利信仰はまだならぬものがあつた。お正月を修する修正会は「舍利悔過法要」といい、十月份に礼堂で営まれる釈迦念仏会の初夜は「舍利講式」と呼ばれる。

さて、舍利会はまず講堂で「舍利讚嘆」と「最勝王經講讚」が執行された。つづいて御影堂でも執行された。約一時間要した。

講堂の本尊は弥勒如来の木造坐像で、同じく木造の持国天と增長天が左右を守護している。弥勒（マイトレーヤ）はふつう菩薩として造顯されるが、ここでは如來像となつているのはた

いへんめずらしい。像の高さ二メートル八〇センチあまり、右手は施無畏、左手は触地の印を結ぶ。

一般的の寺院では、本尊の正面にそれに対峙して礼盤であり、その上に乗つて導師が法要を主催するが、何と舍利会の講堂には、導師の乗る礼盤がない！ そのかわりに、本尊の前には、左右に設けられた講師台、読師台がある。講堂の名の由来は、講師が講師台にのぼつて仏典の講義を行ない、寺僧がこれを聴聞するところとされるが、まさしく唐招提寺の講堂はその源初といえよう。遠藤長老が講師台にのぼつておられた。

ちなみに、講師が学僧の代表となる読師に口頭で講義し質問し、読師がそれに答えるのがいわゆる「論義」「問答」である。講師台と読師台はともに一段と高い座に席が設けられている。今日の寄席の「高座にのぼる」の語源はここに

あるという。また、講師・読師が坐るところも半畳であるところから、他人の演説にたいして「半畳を入れる」ことの語源となつたことも興味深い。

舍利会法要に隨喜して、心から驚き、感じ入つたことは、遠藤長老および読師の僧は金糸・銀糸に刺繡された莊嚴衣はもちろんのこと、絹製の法衣・袈裟ですらなく木綿ないし麻製を着用されていたことである。他の式衆・大衆も同様である。さすが、「四分律」を奉ずる律宗のお坊さんであると思つた。回向文のうちに「南無過海大師」と三唱していた。

法要ののち、三時より東堂において「戒律仏教の流れ」と題する講演がなされた。駒澤大学名誉教授佐藤達玄先生のお話は熱が入り、一時間の予定が二時間を超え五時をすぎてしまつた。先生は、インドの風土で生まれた戒律は、中国・日本にてはそれぞれの国的精神風土にあ

わせて人々が守りやすいようにいくぶん変容された（通受から分受へ）等とわかりやすく語られた。

#### ④

さて、鑑真和尚の来朝の意義の考察に進むことにしよう。

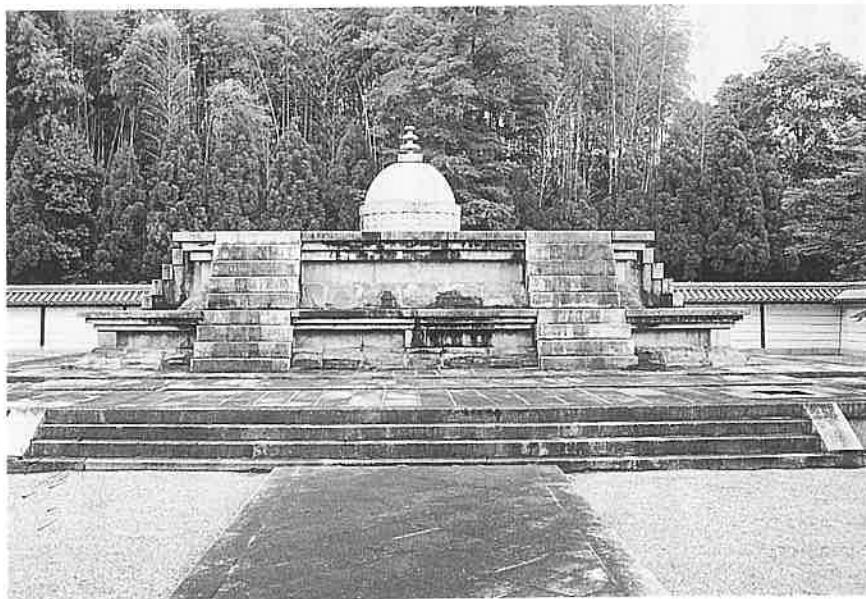
鑑真（六八七—七六三年）和尚は、中国江蘇省揚州に生まれた。十八歳で道岸律師から菩薩戒を、二十一歳で弘景律師から具足戒を受けて正式の比丘となつた。弘景は南山律宗の祖・道宣律師の弟子であるから、鑑真是道宣の孫弟子ということになる。南山律（四分律）を中心とする戒律や天台教学をも学び、のちに日本律宗の祖となる。

第九次遣唐船に二人の若き僧が乗り込んでいた。大安寺の普照と興福寺の榮叡である。二人は、朝廷より学徳すぐれた授戒伝律の師を日本



舍利会開山忌 於講堂

唐招提寺戒壇



に請來するようとにいう命を受けていた。

処々を訪つたのち、当代きつての律師であつた鑑真和尚を揚州の大明寺に訪ね、和上の弟子のなかから日本への伝戒律師推薦をお願いした。当時日本への渡航は危険をきわめ、四船のうち、二船もしくは三船も沈むといわれていたから、かれの弟子はだれひとりとして「行く」というものはなかつた。

「ならば、わしが日本へ行こう」

と、鑑真みずから、仏法を弘めるために、正式の戒律を伝えるために日本に渡ることを決意した。和上、齡五十五歳のことであつた。

わが国への仏教の伝来は、一説によればその

公伝は欽明天皇の十三年（五五二年、『日本書紀』説、五三八年の説もあり）とされ、すでに二百年を経過していたが当時の日本の仏教界は形だけの僧尼が多く、その風紀は乱れがちであった。何となれば、僧になれば兵役や納稅などの義務

からのがれることができるからであつた。それゆえ、朝廷を初めとする当局は正式の戒師を請來し、正式の僧尼の育成をはかつたのである。

しかし、鑑真の日本への渡航計画は困難をきわめた。第一回目の渡航計画は如海にょかいという僧の密訴によって挫折した。一人の日本僧は拘禁された。

第二回目・第三回目は船が難破して失敗した。第四回目は師を渡航させまいとする弟子の靈祐れいゆうなどによつて妨げられ、第五回目は遠く海南島にまで流されてしまつた。鑑真是次第に視力が

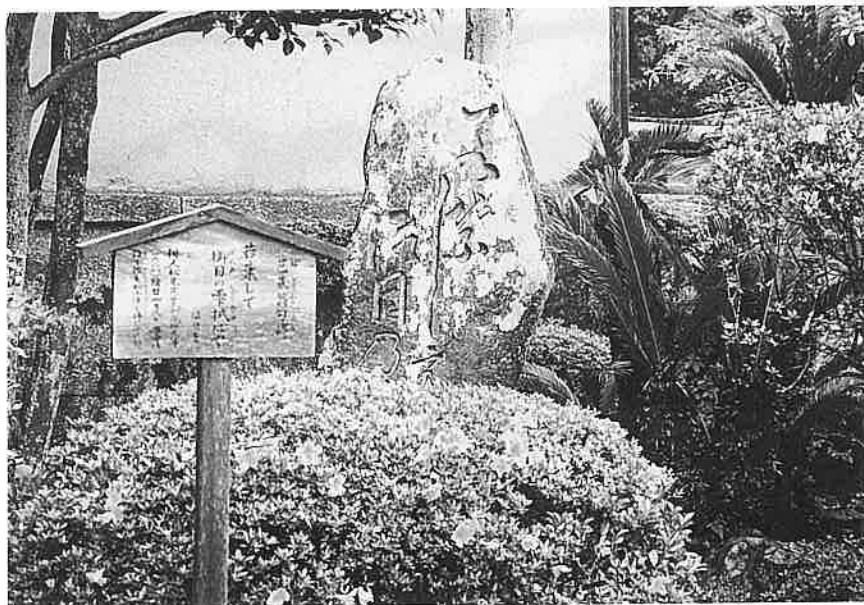
おとろえ、榮觀が客死する六十三歳のときついに失明してしまつた。

失明にもめげず、それから三年後の天平勝宝五年（七五三年）の末、日本からの遣唐船に乗り込み、第六回目にして日本渡航に成功した。決意してから、何と十二年の歳月を費やした。翌天平勝宝六年四月入京した。東大寺に戒壇を築き、ここに正式に授戒の作法が日本に整つこ



会津八一歌碑「おほてらの……」

芭蕉句碑「若葉して……」



とになつた。孝謙天皇をはじめ多くの人々に戒を授けた。東大寺に五年住し、天平宝字三年（七五九年）新田部親王の旧邸を朝廷より賜つて、ここに戒律を教授する寺を設けた。これが唐招提寺である。

学者は鑑真和上來朝の意義を次のようについて。聖德太子が日本佛教興隆の礎<sup>いしづえ</sup>を築いたとするならば、形質ともに真正の佛教教團確立の最後の仕上げを果たしたのが鑑真和上の戒壇の設立であつた、と。

会津八一の二歌を引用して了了としたい。

おほてらの まろきはしらの つきかげを  
つちにふみつつ ものをこそおもへ

せんだんの ほとけほのてる ともしひの  
ゆららゆららに まつかぜのふく



# 京都祖跡拝登について

善光寺徒弟 黒田博志

れてがつかりした思い出があります。

永平寺に安居させて頂いてから一年が過ぎました。京都祖跡拝登と聞くと去年のことを思い出します。それは、私が上山して一ヶ月が過ぎて、春安居の方々の間でこの話がちらほら出てきた時のことです。ある春安居の方から「秋安居も行けるんだよ」といわれ少し疑いながらも、頭の中は京都でいっぱいになっていた。(といつても京都と聞いて思い浮かぶのは、金閣寺と舞妓さんぐらいのものですが)それも束の間、講送和尚さんから「秋安居は来年だよ」といわ

それから一年が過ぎ、私は鐘酒から伝道部へ、伝道部から吉峰寺へそして現在は後單行寮に所属しています。ここは文字通り後堂老師、単頭さんの行者です。行者というのは、得度、未得度を問わず、寺の住持や重役に従つて雑用をさせて頂く修行者をいいます。具体的にいうと、お部屋の掃除や、飯台の準備をさせて頂く。また法要の際には、侍香を勤めたりもします。

そして、この度の京都祖跡拝登では、第一班

で行くことになり、この班の引率の役寮さんは村上単頭さんとなつてゐたので、私は京都にも行者として行くことになりました。正直な話、京都の祖跡を巡拝することの期待よりも、ちゃんと行者が勤まるかどうかという不安な気持ちの方が強かつたような気がします。

そんな気持ちをもちながら出発の日が来ました。出発前に旅の安全を祈願して『般若心経』と『消災咒』の諷経を挙げ、大衆一同バスに乗り込み、いよいよ出発しました。私は単頭さんの行者なのでバスでもその後の座席に坐り、いつでも動ける状態で居りました。バスに乗つてしまらくの間は行者として何をすればいいのか等を考えおりましたが、次第に普段の疲れのせいか眠気が襲つてきました。

そして目が醒めるとそこは最初の拝登の地である「開堂説法の地、興聖寺」の近くの駐車場に着いておりました。ここから興聖寺までの道

のりは、目の前には日本三大橋の掛かる宇治川が流れていて、川辺を歩いていると本来の目的を忘れて美しい清流を眺めて歩いているうちに、興聖寺の琴坂に着きました。琴坂を登りきった所には、山門がありこれは白い壁の中国風の建築でした。山門を通り境内に入ると、永平寺とよく似た伽藍配置となつておりました。

この興聖寺は御開山道元禅師さまが建立された最初の道場です。この道場で懷奘、禪師さまをはじめ、多くの日本達磨宗の人々が入門されました。また御開山さま自身も『普勸坐禪儀』、『正法眼藏』、『学道用心集』、『典座教訓』等、多くを選述されています。またここには数人程、私達と同じ様に雲水が生活していて、非常に顔の表情が落ち着いたように見えました。きっとそれは永平寺と同じような静寂した環境によるものでしょ。そして法堂で諷経を挙げるので、私は単頭さんの着替えの手伝いをさせて頂いて

から諷経に随喜しました。その後、山内を散策しました。中でも伏見桃山城の遺構が用いられた本堂の廊下の天井には落城の時の血の手形足跡が残っているのがとても印象的でした。

次いで、私達は伏見区の久我家のお屋敷跡に建立された誕生寺を拝登しました。ここには、今年の十一月に落慶したばかりの坐禅堂と鐘楼堂がありました。坐禅堂はとても立派なので一度坐つてみたいなあと思いました。

次に、欣浄寺です。この寺は道元禅師が宇治の興聖寺に移られるまで過ごされた寺で、当時は「竹林山安養寺」といい、道元禅師「深草閑居」の旧跡と称されています。鉄筋造りのお寺でしたが、御本尊はその建物からは想像もつかないほど大きな毘盧舎那仏像でした。別名「伏見大仏」として、知られているそうです。また、御開山さま自作の石像と詩碑があり、「深草閑居の偈」が書いてありました。宋での修行がいか

に厳しいものであつたか、私には想像もつきませんが、いつかこの詩が理解できるよう、日々精進していかなければならぬと思いました。またここは、深草少将義宣卿と小野小町のゆかりの地としても知られています。

中食を頂き、次は臨済宗大本山建仁寺です。道元禅師が比叡山を下つて清新な宗風に出会つたところがこの建仁寺です。ここでは開山堂と明全和尚の石碑の前で諷経をあげました。しかし、時間が少ししかなかつたので臨済宗の伽藍が、どのようなものか見ることができなかつたのが残念です。

次に道元禅師示寂の地を拝登しました。この地は道元禅師が建長五年（一二五三）八月二八日、五四歳で入寂された場所とされている所です。ここからバスで一時間位行つて宿泊先である比叡山延暦寺に到着しました。

翌朝、根本中堂での朝課、同じ仏教でも宗派が違うと随分違うものであると驚きました。

次にここからバスで二十分位の所に、道元禅師が仏道修行を始められた横川<sup>よしかわ</sup>という所があり、ここに道元禅師得度靈蹟碑が建てられています。道元禅師はここで真剣に天台教学に励まれましたが、わずか三年で比叡山を下りられました。道元禅師はなぜ下りられたのでしょうか。おそらく自分の疑問に答えてくれる師に会いたいという願望、そして真の仏法に対するつもなく強い意志が当時の道元禅師を支えていたと思います。

そして祖跡拝登の最後の場所である詩仙堂に向かいました。こちらには、中国の漢晋唐宋の詩家三十六人の肖像が描かれており、頭上に各詩人の詩を四方の壁に掲げた詩仙の間を中心としているところから詩仙堂と呼ばれているそうです。またここにはすばらしい庭園があり、こ

れを眺めていると時間を忘れてしまう気がしました。また違った季節に訪れて四季それぞれの風景を鑑賞したいものです。

これで、すべての拝登は終わり永平寺へと帰りました。一泊二日という短い期間の祖跡拝登でしたが、私にとってはこの二日間は、御開山さまの靈跡を理解する上で実に大切な二日間であつたと思います。またこの地を拝登できたことを感謝致します。

私は永平寺で修行することにより、このような貴重な経験が出来たことを喜びに思い、幸せに感じています。

この経験を励みにして、これからも日々弁道していきたいと思います。

(「傘松」より)



### (目的)

佛教を修学する者のうち、学業操行とともに優秀にして身心堅固なものを海外に派遣し、または海外より日本国内に受け入れ、佛教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成することを目的とする。

### (派遣先)

1. Zen Center of Los Angeles (LA禅センター)  
"923 S.Normandie Ave LA, CA. 90006 197SA"
2. Zen Mountain Center of New York (NY禅センター)  
"Box 197,Mt.Tremper,NY 12547 USA"
3. Wat Paknam (ワットパクナム)  
"Bhasichareon Bangkok 10160 Thailand"
4. 理事会において必要と認めるその他の国に所在する研究機関、並びに国内仏教関係大学及び寺院

### (派遣期間)

平成11年4月より1年間

### (給費)

アメリカ・タイおよびその他の国における滞在に要する必要経費並びにその往復旅費

### (提出書類)

1. 論文 (次項による)
  - 論題
    - ①これからの中興と佛教の役割
    - ②世界平和と佛教徒の誓願
    - ③留学僧として私はこれを学びたい
    - ④異文化の中で佛教を学ぶ
  - いずれか一題を選ぶこと 400字詰原稿  
用紙5枚以上 (A4版タテ書き)

2. 保証人と連署した願書
3. 卒業証明書
4. 履歴書
5. 推薦書
6. 健康診断書

### (募集人数)

平成11年度 2~3名

平成10年12月10日、事務局必着のこと

### (発表)

平成11年1月10日、本人に通知する

## 横浜善光寺留学僧育英会

〒233 横浜市港南区日野中央1丁目12番9号

TEL.045-845-1371 FAX.045-846-2000

# 第15回 生 横浜 善光寺 留学僧募集

平成11年度・1999

横浜善光寺留学僧育英会は、海外留学僧を募集いたします。

ご希望の方はご応募ください。

詳しくは、宗教法人横浜善光寺留学僧育英会の

規程ならびに細則をごらんください。



ZENKŌJI  
YOKOHAMA

# 四育英生に辞令交付

横浜善光寺留学僧育英会

横浜善光寺留学僧育英会（黒田武志理事長）は第十二回総会と第十四回育英生の四人に対する辞令交付式を二月七日、善光寺で執り行なつた。総会ではニューヨーク州立大学教授の伊東博氏が「国際化への反論」と題して卓話を行なつた。

ツトパクナムに留学している眞野氏を除く三人が自己紹介を兼ねて育英生としての抱負を語つた。

総会は阿部慈園参与を議長に選んで進められ、新しく育英生に採用されたウイリアム・隆賢・ダンカン、ホアン・トロン・ソウ、小田島巖雄、眞野順治の四氏のうち、すでにタイ国ワ

栃木県の大田原高校で同級。「国際化への反論」というテーマは、甲乙どちらかの国が勝ち、どちらかが負けるという国際化ではなく、そうした国益を超越して民族の利益を考えるべき時代であるという意味での設定。伊藤教授は、どの国も共にプラスになるように、地球規模で物事



育英生の皆さま

本尊上供



を考え行動すべき時代であることを訴えた。

議事では、育英会の創立十五周年記念講演の日程や論文集第二巻の発刊が発表され、新しく大本山總持寺貫首に就任した板橋興宗禪師を名譽顧問に推戴することが了承された。

### 激励「初心忘れず誓願成就を」

第二部は開山様庵白純大和尚の開山忌と、同夫人の安徳院殿嘉祥妙慶禪尼の七回忌の法要



黒田理事長

が、善光寺の本寺である栃木県大田原市・光真寺住職黒田俊雄老師の導師で當まれ、引き続いだ黒田理事長の導師で本尊上供の後、第十四回育英生の一人一人に黒田理事長から辭令と育英金、及び記念品が手渡された。

黒田理事長は「初心を忘れず誓願を成就していただきたい。そして皆さんの力で世界平和を実現して下さい」と期待の言葉を述べ、小田原市の成願寺住職山口晴通師は「善光寺さまの大きなみ心のもとに、法燈は海を渡り、また海に向こうから渡つて来る。大きな菩提の花を咲かせて下さい」と激励した。

さらに光真寺の黒田住職は「善光寺の方丈(住職)は利他行の人だ。利行は一法なりというが、人に尽くすことがこれから道だと思つている」と挨拶した。





## 中国語で頌を唱える

善光寺で首座法戦式が修行された。首座は神奈川県小田原市・成願寺住職山口晴通老師の徒弟（三男）勝隆師。西堂を善光寺の本寺である栃木県大田原市・光真寺住職黒田俊雄老師が務め、後堂には神奈川県第二宗務所第五教区の教区長、横浜市・貞昌院住職亀野哲雄老師が就いた。

ユニークなのは弁事を中国人僧の胡建明師がつとめ、中国語で頌を唱えたこと。胡師は天童寺で修祥監院に就いて得度し、住持の明暘法師のもとで受戒した学僧。来日して永平寺の南澤道人監院の弟子になり、駒澤大学仏教学部禅学科で学び、黒田住職が主宰する善光寺留学僧育英会の給費を得てドイツのハンブルグ大学で仏教を学んだ。現在は東京大学の研究生として学

間研究に打ち込んでおり、学位取得後は永平寺で安居修行して道元禪を修得し、天童寺に帰つて行學を後進に伝えることを願つてゐる。首座の本師・山口晴通老師が漢詩の大家であることから、中国語で頌を唱える趣向となつた。

勝隆上座は法臘十三、年齢二十三。力のこもつた真剣な問答を終えて、祝語を受けた後、西堂の黒田光眞寺住職が「首座が師匠と共に拝をしている姿を見て、仏道のよさをしみじみと感じた。肉体をいただいたのは両親からであるが、その上に仏法をいただいたことは有り難いことだ。人間、御縁ほど尊いものはない。善光寺で法戰式を修行したこの御縁を大事にして、本師さまにお尽くし下さるよう願う」と祝意を述べた。





### 仏縁の網目の不思議さ

東京都 井上葉智様

成寿第一七巻のご惠送あり  
がとうございました。

方丈様には、益々お元気に  
ご活躍なされているお姿を拝  
見して心から嬉しく、その意  
氣に、またまた深く感じ入り  
ました。

思い起こせば一九八九年十一  
月のタイ旅行で、佐藤俊明  
様と黒田様と初めてお目にか  
かり、仏縁の深さを感じまし  
た。 (拙著<sup>89</sup>『坐禅のうた』

仏縁の網目の不思議さを目

紹介を曹洞宗報に角家文雄氏  
が記載して下さいました：其  
処に佐藤俊明師の図書も掲載  
されていたのですが、私はそ  
のトキは露知らずのお方で、  
タイで手を繋いで歩こうと  
は？…)

その後一九九一年五月、西  
嶋和夫老師より在家でありな  
がら「剃髪の儀」をして頂き、  
その旨方丈様のところにご挨  
拶に行きましたトキ、丁重な  
オモテナシを頂戴し、またそ  
の年の十月に拙書詩集『ヴィ  
ーナ』出版記念パーティには  
ご臨席までしていただき恐縮  
しました。

の当たりに体験させていただいている中で、コトバでは言い表せないイノチを感じさせていただいております毎日です。

ことに黒田様の留学僧育英会の聖業は偉大で、一口の布施行という趣旨に共感を覚えました。ご縁を得てから私なりに春彼岸と秋彼岸の月に、寄付を一生させて頂こうと誓願しました。デモ成寿のご本の最後に名前が列記されていますが：「些少な額にこそ『それなりの価値あり』と、勝手に解釈して喜捨してきました。」それなのに今年の春彼岸をスッカリ失念してしまい深



く恥じ入りました。今年は、一月に水野弥穂子先生を中心にお栃木曹洞宗青年会の主催で、インド仏跡の旅に出ました。私は丁度十年目の再度の渡印です。留守の後の雑事にかかわり、予定欄の記録をしていませんでした。

私的な事ですが五月十日は実父の命日です。その日を一口布施行の日として、喜捨させていただきます。よろしくお願ひ申し上げます。

黒田方丈様には益々ご清栄の段大慶に存します。

亡妻戒名に院号付与の形あるもので顕彰 横浜市 川田悦男様

先に電話でご相談申し上げました亡妻戒名に院号付与の件は、快く応諾下さりありがとうございました。急逝だったこともあり、行き届かぬことも多々ありました。沢山の方に見送られて、心に残る葬儀を行うことができました。桐元院代様にはお世話になりました。それなのに今年の春彼岸

なります。当時大学三年（長女）、同一年（長男）、中学一年（次男）だつた子供も、長女は結婚し、長男は就職、末子も大学に入る年になります。私は仕事と家庭の一人二役でしたが、お陰で、いずれも真っ直ぐに育つてくれ、法要にはそれぞれ胸を張つて報告できるように思います。これも故人が確り育ててくれた賜物であり、その功績に謝意を表する意味もあり、ふと「院号」を思いついた次第です。

願わくば、慈愛、優しさが表れるものであればふさわしいように思います。また、できれば、今の戒名の上に付す

れば馴染んでおりますし、最善と考えております。普段は、故人を莊嚴に祀り、花、水を欠かさず供養している積りですが葬儀当時が突然の混乱の中であつたことにも鑑み、この七回忌に際し、形あるもので顯彰できればと考え「院号」をお願いする次第です。ほかに墓碑を追刻する積りですが、その他、この院号の付与にあたり配慮すべきことがあります。さればご教導賜りたいと存じ、

お願い申し上げます。

なお、私事ながら昨年十一月の故人の誕生日に、突然、

駒澤大学の副学長より、法学部の講師（新カリキュラム金

融法）を引受けてほしいとの委嘱を受け、曹洞宗のこともあり、故人の導きかなと考え、やらせて頂くことに致しました。もうすぐ一年になりますが、銀行の仕事の傍ら、週一回は大学で講義という生活で、キャンパスには剃髪の仏教学部の院生も多く、新鮮です。実学の楽しさを青年に伝えたいなどと欲張つていまます。これも縁といふものなのでしょう。

どうぞ微意お汲みとりの上、よろしくお願ひ申し上げます。

上、よろしくお願ひ申し上げます。

世界の平和を  
第一に考えて暮す

岡山県 鳥屋原百合子様

善光寺様には皆様ご壮健にてご活躍のことと心よりお喜び申し上げます。

今年もむづかしい事件が解決を見ないままに、いたずらに日を過ぎ)しております。世界平和ということはそんなにむづかしいことなのでしょうか。誰一人として願わない人はないのに実現できませんね。でもせめて一人ひとりが世界の平和を第一に考えて暮らしていたら、いつかかな

えられる時がくるでしょう。  
それをひたすら祈るばかりで  
ることが出来ましたことを、  
御報告申し上げます。学位論

仏教学の研究に精進

和歌山県 森 雅秀先生

御無沙汰いたしております  
が、先生におかれましてはお  
かわり無き」とと存じ上げま  
す。

さて、昨年留学先のロンドン大学に学位請求論文を提出し、口述試験を受けましたところ、過日、学位(PhD)授与の連絡がありました。ロンドン大学の博士課程に入学して

から、およそ9年の歳月がたちましたが、ようやく終了することを、文は『The Vajravali of Abhayākaragupta』のタイトルで、全体は五〇〇頁あまりの大部なものとなりました。されば、先生におかれましてはおかれ無き」とと存じ上げました。

今から思い返しますと、八年からのおよそ2年間のロンドン留学は、私にとってなものにも代え難い貴重な経験でした。同じ二年間でも日本です)るものとはまったく

異なる、密度の濃い時間だつたと思います。留学に際しましては黒田先生をはじめ、留学生派遺育英会の皆様の暖かいご支援をいただいたことにあつく感謝しております。当初の予定ではコース修了まで現地に滞在するつもりでしたが、思いがけず、出身の名古屋大学より九〇年に助手の職を与えられ、さらにその後、縁あつて高野山大学に移ることになりました。そのあいだ、学位論文の執筆を断続的に続けてはまいりましたが、日々の業務や依頼原稿などが重なり、思いがけず長い時間が経過してしまいました。黒田先

生には御心配をおかけしたことをお詫び申し上げます。

日本はともかく、海外では博士号は一種の「ライセンス」のようなもので、一人前の研究者としてやっていけることを認めただけと聞いております。これからも仏教学の研究

に精進する覚悟でありますので、何卒、御指導御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

樹木もすっかり若葉になり時には日影の過し易さを感じる今日この頃であります。

栃木県 稲垣実雄様

### すばらしい講話

す。

取り急ぎ、学位取得のご連絡を申し上げました。時節柄、御自愛のほどをお祈りいたしております。(第四回育英生)

一人として計画にかかり成功裏にすべてが終つたことに感謝致します。特に第八回の二年振りの同期会を盛り上げていただいたことに心からお礼申し上げます。集いし会員

一同貴兄の心くばりに感謝しておりました。

### 『終生現役』の信念で

今をどう生きるか。本当に大変な時を迎えております。

若い生徒にとつても力強く生きることの大切さが理解できたのではないかと思います。

社会の変化と共に安穩に生きることを若い時より何の不自由もなく大高生などは過していくよう思います。そのような苦労して、努力して生きることの実地を知ったのですからすばらしい講話でなかつたかと考えております。本当にありがとうございます。

生物の成長過程でも否応なく、成長・退化・老化の過程に入っていく理由です。この様な時、心に浮んでくる事は、

栃木県 植松久夫様  
過日の同期会における貴兄の気配りに心から御礼申し上げ、改めて感銘をうけました。

我々同期生も六十歳という節目を通過し、又、新しい人生の門出に向つてスタートした方々も多くいます。これからが大切な時期と考えています。

しかしこれも何んと言つても、健康が大切ですね。小生も六十歳になつて、これから再度チャレンジしてみたいと頑張っておりますが、つくづく実感として痛切に思われます。

『終生現役』の信念で生きて行く所存でいます。これもまた楽しい生き方であり、若

「人生如何に生きるべきか?」という問いです。

この様な問い合わせに対し貴兄などは我々の先達でもあり何か

と相談し易い立場にあり我々一同大変良き友達を持つてすばらしい、と自負している一人でもあります。

さを持つ秘けつでもあります。

年を過つても、何か世間の役に立つという事は、大変意義ある事でもあり、これまでと違つた価値観を持って邁進していくつもりでおります。

お蔭様で、ご先祖様そして両親、良き先輩友人に恵まれ今まで大過なく生きてこられましたが、これも皆から支えられ生かされているのだと考えております。



## ■おたより■

# 追悼・伊藤三喜庵先生

★ 東京都 鈴木 敏老師

伊藤画伯追悼特集号謹んで拝見させていただきました。貴寺總代並成寿挿絵等かけがえのない伊藤先生のご遺徳を偲び、合掌致します。と共に今後共益々の貴寺のご活躍を祈念致します。「伊藤三喜庵の世界」を改めて大切に拝見致します。

★ 東京都 藤堂恭俊老師

伊藤先生と黒田老師の出会いを通してお二人の道交の深まり、手に取る様に感じられました。偉大なる出会い、佛ごころのぬくもりが輪を拓げ、明るい開かれた社会、争うことのないなごやかな世界の実現に連なる尊さをかみしめながら嬉しく存じます。

★ 福井県 木崎浩哉老師

故伊藤三喜庵先生の一一周忌とか、優雅で気品のある数々の挿絵を通して、故き先生のご遺徳を偲び、虔んでご冥福をお祈り申し上げます。

★ 東京都 山口 修先生

三喜庵先生の遺作が巻頭及び巻中の随所にちりばめられ心暖まる編集でした。黒田先生はじめ寄稿された各位の文章それぞれに、崇佛の情感があふれています。アジャンタ、エローラ

の話などはかつて訪れた日のことがさまざまと  
思い出されました。写真も私と同じような角度  
から撮つており、人の思いは同じだなあと感じ  
られました。

★横浜市 高野義郎先生

この雑誌にふさわしい絵と好ましく存じてお  
りましたが、三喜庵という雅号のみでどのよう  
な方が存じ上げませんでした。もう御高作を拝  
見できないのは残念です。ご冥福をお祈り申し  
上げます。

★横浜市 石井修道先生

三喜庵先生にはお会いする機会はありません  
でしたが、黒田方丈様の追悼文を拝読しながら、  
その人柄と二十一世紀を見通す眼力の持ち主で  
あつたことがよく理解できました。そして方丈  
様と三喜庵先生が常に互いの中で向上の仏世界

を追及されていかれている様子に感動していま  
す。回顧展の開催の時には、是非とも静かに三  
喜庵先生に対面したいと思っています。

★東京都 林 博明先生

伊藤三喜庵先生の御冥福をお祈り申し上げま  
す。東隆眞先生からのお電話で照心館に来て下  
さいというお言葉をいただき、お会いしました  
ことが、昨日の様に心の中に残っています。『絵  
本ジョン万次郎の生涯』の本をいただきました  
が、勉強不足の小生には内容がつかめず、日々  
本を眺めていましたことを思い出します。個展  
の絵は、三喜庵先生の独特的哲学的美学、想像  
力と人を感動させる心の豊かな表現力を教えて  
くださいました。偉大な三喜庵先生とは知らず  
大変失礼いたしました。

今、成寿を拝読して一字一句噛み締めていま  
す。力不足ですが先哲老師の残されました足跡

を一步一步踏み締めて、これから的人生に生かしていきたいと心得ています。

★東京都 伊藤 勲様

いつも楽しみに見させていただいておりますが、今回は私共ともご縁のある故伊藤喜三郎氏の追悼号ということで、興味深く読ませていただきました。編集に携わる方がおられるにせよ毎号、これだけの出版をなさることは、並大抵のことではないと考えます。尊く拝させていたゞくとともに、お心遣いに対する感謝とともによりご発展をご期待申し上げます。

★大木建設(株) 熊田洋之様

先日『建設通信新聞』に眼を通していたところ、伊藤喜三郎先生の遺作を収めた季刊誌が発

刊されたことを知りました。厚かましくお電話させていただいたところ早速にも『成寿』のご

惠贈にあずかり、御礼申し上げます。私は現在、建設業に勤務しております。仕事柄、伊藤喜三郎建築研究所様ともご縁があり、出入りさせてもらっております。三喜庵先生のお噂は、時々伺ったことはありますが、ご生前にはお会いする機会がなくて残念に思つております。

『成寿』を手にし、方丈様や皆様の文章を読み、先生の遺作を拝見して、ほんの少し先生の世界が理解できたよう思いました。まだまだ沢山の作品があることでしょう。これを契機に勉強したいと思つております。挿絵に沢山描かれている仏像は、菩薩像であれ、四天王像であれ、優しそうな仏像が多く、これも先生の人間性のしからしむ所なのかと感じた次第です。有り難うございました。

★千葉市 藤田正子様

自由画壇の一会员として、又生徒として、伊

藤先生を失つたことは今更ながら残念でたまりません。

夏の壇展のための作品を作成中に、「先生が生きていたらしやればお教えも受けられ、ご注意もいただけるものを」などと、つい、思つてしまします。でもがんばらねばなりません。これからもぜひ先生の作品を『成寿』その他、貴寺にて拝見できることを心より願つております。

★横浜市 伊藤満子様

追悼号では数々の美しい絵、写真に感動しますと同時に、表紙の觀音様が息子にそつくりで、主人と言葉もなく涙してしまいました。息子も絵が特技で数枚の絵しか残つていませんが、母親の私も息子を失つてから三ヶ月、為す術も無く、ただ息子の絵を描き、もう三十枚くらいになります。伊藤先生の絵を拝見し、何か力がわいてくる我に、これからも描き続けていきたいと思います。

◎『成寿』が『建設通信新聞』（平成九年四月二一日）で紹介されました。

ありし日の三喜庵先生

写真・作品でしのぶ

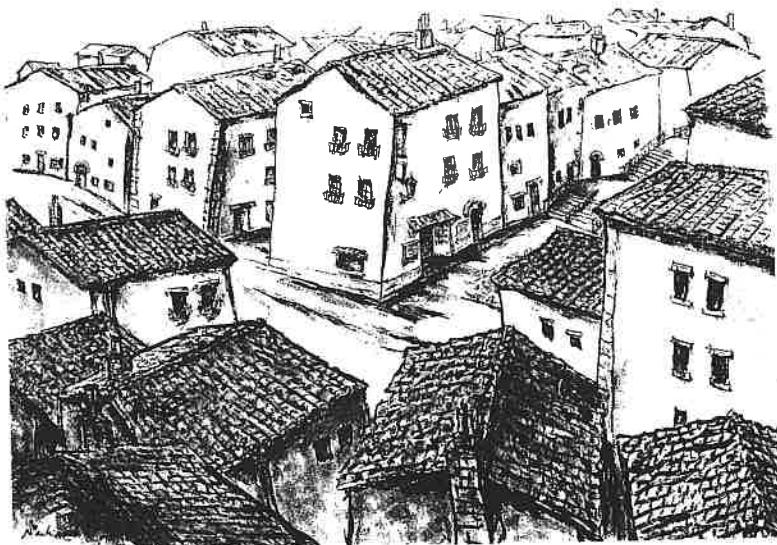
『成寿』春季号 故伊藤喜三郎氏を特集

横浜市港南区の成寿山善光寺（黒田武志住職）が発刊している『成寿』春季号では、故伊藤喜三郎氏（伊藤喜三郎建築研究所会長）の一周年忌に合わせて「伊藤三喜庵先生追悼」の特集を組んでいる。

同氏は生前、三喜庵の雅号を持つ画家として活躍し、日刊建設通信新聞社主催の建設大臣杯・オール建設人ゴルフ大会会長代行も長年にわたって努め、その人柄は広く多くの業界人を魅了してきた。

昨年三月に惜しまれ、悲しまれて不帰の客となつたが、菩提寺の善光寺発行『成寿』では、題字、表紙絵を伊藤先生の作品で飾り、巻頭のアルバムではありし日のはづらつとした姿を伝えている。黒田住職始め関係者の追悼文、同寺所有の豊富な絵画作品、絵本「ジョン万次郎の生涯」など、伊藤ワールドを満載している。

(以下省略)



## 宗派を越えた御活躍

総本山身延山久遠寺

庶務部長 爪田栄運老師

合掌謹啓 尊台愈々御健勝  
にて為法為社会御活躍真に尊  
い極みに存じます。

拵 過日妙智会々長傘寿宴  
席にては隣席のご縁をいただ  
き有難いことありました。

席上尊台が大徳方との挨拶を  
交される中で、宗派を越えて  
各方面に御活躍なされている  
ことを承知して吾が若かりし  
時代を想起したりしたことで  
した。一期一会。

信念：継続は力なり

我孫子市  
山崎康弘様

成寿をお送り下さり有難う  
ございました。留学僧の方々  
の論文はレベルが高く、私の



「成寿」伊藤三喜庵先生追

悼号、「善光寺海外留学僧派遣

育英会論文集」一、二御贈本

いただき有難うございました。

た。身延山大学図書館に寄贈

して若者達にも読ませたいと

思います。尊台が御布教に弛

みない御精進に敬意を表しま

すと共に、「成寿」誌他御恵贈

下さいました御礼まで 合掌

拝具

拝具

理解の及ばぬところですが、  
その行間に真摯な学究的な態  
度が感じられ感銘を受けまし  
た。同時に又、この成寿が既  
に二十七巻の出版で、今日ま  
での出版継続のご苦労を感じ  
ました。経費の問題は勿論で  
しそうが「成寿」は単なる隨  
筆集ではないわけですから、  
これだけの論文、記事を集め、  
しかも編集してゆく作業とい  
うものは大変なことだと思  
いました。方丈さんが日頃培つ  
てこられた人的（人材）ネット  
ワークの賜物と存じます。  
ネットワークが本当に広い  
ですね。素晴らしいと思います。  
時々お寺にお訪ねした折に、

ご関係の方々のお話を伺いま  
すが、「成寿」を通じてその背  
景が良く判ります。

それにしましても方丈さん  
のお考え方努力が、宗教界、  
仏教界に徐々に根を張りつつ  
あるのではないかと思いま  
した。継続は力なりと申します

が、一つの信念に従つて仕事  
を成し遂げるということに頭  
の下がる思いでございます。

何かのお役に立てれば

山口 修先生  
東京都

私自身すでに数年前に定年  
を迎える特例によって二年の延  
長を認められましたものの、  
昨年からは非常勤として出講  
を委嘱されております。私は  
仏教史の専門ではございません  
がとくに大学から要請さ  
れ、通信教育の受講者に分か  
りやすいよう、できる限り平  
易に説くことを主眼に、と言  
われて、私なりの理解の及ぶ  
て常に感謝しております。御  
礼の気持の一端として先日大  
学の講座に使用する拙著をお  
送り申し上げましたところ、  
お心尽くしのお便りを拝受い  
たし感激致した次第でござい  
ます。

いつも雑誌をはじめいろいろ  
とお心にかけて下さいまし

ところを記したに過ぎません。何かのお役に立てればと思つてお送りいたしました。

ご芳情の程、改めて厚く御礼申し上げます。

苦も楽しみ

東郷 優様  
神戸市

先生御一家皆様お変わりございませんか。益々ご多忙ご繁栄のことと大慶に存じます。先日、敏も定年退職して久しぶりに兄弟三人ゴルフし、終了後先生のお話やナリスの永い人生観等で楽しい時間でした。過ぎて見れば苦も

楽しみであり、今の凡々からすれば多忙こそが人生の華でした。

どうぞお身体を大切にお励み下さいます。

本がきっかけに

石川 韶先生  
鎌倉市

「成寿」二十七巻伊藤三喜

庵先生追悼号拝読いたしました。毎巻御恵与を賜りますこ

と心から厚く御礼申し上げます。

渡辺 元様  
横浜市

人となりに尊敬の念

「成寿」を御恵贈いただきまして誠にありがとうございます。

この時代の「花と仏」に出演いたしましたが、これは『イン

ド花巡礼—ブッダの道をたどつて—』へ中村元（監修）石川響（絵）三友量順（文）春秋社がそのきっかけでござります。遅くなりましたが本をお送り申し上げますので何卒御笑覧賜りますならば幸に存じます。

し若い修行僧を海外に派遣するその事業内容にふれ、深い

感銘を受けております。又追

悼寄稿「伊藤先生を想う」を

拝読いたし、黒田先生の人と

敬の念を抱くもので。私も

なりを私なりに理解いたし尊

高校野球（横浜高校）に携わ

つて三十余年となりますがそ

の間いろいろな変遷をたどり

今まで参りました。これか

ら先更に艱難が待ち受けてい

ると思いますが、成寿を鏡と

いたし、高校野球を通し立派

な青年を育成したいと思いま

す。

### 感銘をもつて拝読

武藏野市

福井文雅先生

会報、いつも感銘をもつて  
拝読しております。一年有余

の「在外研究員」の生活を終  
り、四月初めに無事帰国致し

ました。パリ大学ーソルボン  
ヌの大学院で「中国文明に及

ぼした仏教の影響」を述べた

り、退官のフランス人教授三

人それぞれに記念論文を書い

たり、文部省主催の「フラン

ス語検定試験」第二次試験の

審査官等々させられています

うちに帰国の日は近づき、自

分自身の勉強は少しもできず  
に終りました。

ともあれ、何かにつけて、

かつて仏国政府留学生として  
パリで過ごした三年間との差

を感じさせられる一年間でした。

### ご縁に感謝

富山県 常永寺

遠藤正信様

（内）

「成寿」を御恵贈戴きました。  
て誠に有難うございました。

ロサンゼルスでの生活も断片

的に想像しておりましたが参

禅生活の様子も解り、又黒川  
麻子さんの文章からも別の面



で禅センターの様子が伺え知れました。墓参の写真からもその姿を見る事ができました。それなりに一日一日を有意義に：生涯でこのような機会を与えて頂いた事に感謝すると共に本人も前向きな姿勢で頑張つてほしいものです。善光寺様とのご縁を感謝申し上げます。

諸行無情

伏見 横浜市  
暉様

貴重な成寿お送り下され有り難く拝読させていただきます。方丈さんとよく伊藤先生

住まいに行つた事など昨日のように思い出し、感深くご冥福をお祈り致します。久間泰賢さんの「諸行無情、刹那滅

の溜め池の事務所や目黒のお論」繰り返し何回も読ませて戴きました。無常のじょうが違うが私はこの方が好きなので済みません。方丈さんに教わった心の学問、未だ生きて

いたら久間さんの博士論文を読んでみたい。お元気で活躍されることを陰ながらお祈りしています。

過日は大変にご多忙の処、貴重なお時間を頂戴致し有意義なお話をお聞かせいただきましたこと、心より厚く御礼申し上げます。

黒田住職様におかれましては、国内はもとより海外での活発なご活躍のご様子など、ご経験豊かなお話を拝聴致しまして心より敬服申し上げますと共に、誠に心清らかなる思いでございました。

近代的感覚をとり入れて建

心清らかなる想い

中島京子様 東京都

築された「釈迦殿」はとても素晴らしい感動致しました。

又、この次は近親者を誘つてゆつくりとお邪魔させていた

だきたく存じます。

これを縁にこれからも末長くご指導いただけますようよろしくお願ひ申し上げます。

これから的时间を大切に

相澤 徹様  
東京都

先日は、大変意義あるお話を伺い、私自信の悩みも薄らいだように感じております。自分の生き様もそれほど

まちがつたものでもないような気がしてきました。本当にありがとうございました。感謝申し上げます。

私も年齢が年齢ですので、時間を大切に、人間と自然環境問題、又、老後介護の問題等を自分なりの仕事として、映画作りに頑張りたいと思います。

とても判り易く

光安 修様  
船橋市

このたびは、楽しみにしておりました4回のテレビ対談が成功裡に放映されました。こうかと思いました。

このたびは、楽しみにしておりました4回のテレビ対

事を心よりお祝い申し上げます。なかなかテレビ映りもお上手で間のとり方もよく、ゆっくりとご出家のきっかけや育英会設立の苦労話などとても判り易くお話しされ、しみじみ伺っているうちに、正味は十分くらいでしようかあつという間に終わって下さいました。中でもご紹介のあつた中国の諺「一年の計は：」はとても良いお話しで、やはり人を育てるのが一番の大事業と納得しました。このお話しは私もどこかで使わせていただ

## 心の拠り所

佐藤英子様  
横浜市

いつもいつも夫の供養をし  
ていただきておりますことを  
深く感謝申し上げております。  
私も夫のそばに行きお参  
りしたいと思いつつ、通院の  
方が優先となってしまい淋  
い思いでおります。ただ、三  
回忌の法要も近づいておりま  
す。私も夫のそばに行きお参  
りしたいと思いつつ、通院の  
方が優先となってしまい淋  
い思いでおります。ただ、三

回忌の法要も近づいておりま  
すことで、色々考えておりま  
すことは、この際、今までの  
諸々の気持ちのこだわりを捨  
てて、夫の実家にて法要を営  
むことにしようと決心いたし  
ました。今の状態では思うよ  
うにお参り出来ずにはいること  
が夫に対し申し訳なく（心  
の中ではいつもお参りはして  
いますけれど）、また、一年ご  
とに年老いて行く舅も可哀相  
になつて参りました。私の心  
をもつと広くして、いつまで  
も依怙地な気持ちでいらないで  
許してあげる努力をしようと  
考えました。

遺骨を二年に亘りお預かり  
いただき、また、ご住職様に  
は私や息子に対しまして励ま  
しのお電話等もいただき、感  
謝の気持ちで一杯でございま  
す。いつも住職様のお手紙は、  
落ちで、病院のほかはどこへ  
も出かけられません。

にありがとうございました。  
このままご縁がなくなること  
は大変淋しゅうざいます。け  
れどいつかまた、お訪ねいた  
しどうござります。

どうぞよろしく

小磯信一様  
横浜市

いつもなにかとご案内まこ  
とに有難うございます。厚く

御礼申上ます。私こと残念な  
がら八十五歳の高齢一人ぐら  
し、おまけに心臓、血圧、眼  
疾（右目失明）、左眼視力ガタ  
落ちで、病院のほかはどこへ  
も出かけられません。

子供が二男六女もおりましたのでお酒、煙草も早くから止め、本を読むのを唯一の楽しみにしておりました。収入が少ないので豆本ばかりでした。会社をやめ愚妻に先立たれ、静かに余生を読書で送ろうとしておりましたが駄目でした。そのうちあの世からお迎えが来ますので、その際はどうぞよろしくお願ひいたします。

ま、お障りなくお過しのことと存じます。いつもお世話をかけしてすみませんが、お参りに伺えませんので、お布施を同封しました。お盆のお経をあげて下さいませ。よろしくお願ひします。

成寿をご恵送下さいますてありがとうございます。前の誌上の糞掃衣に目を見張りました。「僧に糞掃衣あり、食に……」の言葉があつたように思いますが、所は思い出せません。御誌で初めて糞掃衣が良くわかりました。有難うございます。故・伊藤先生の丈長い画筆にもおどろいています。心休まるあたたかい画面

心休まる画面

井村きよ様  
横浜市

久しく欠礼を致していません。お許し下さい。過日永平寺に私の受講者三十名と共に参りました。貴首の長老にお目にかかり、監院からも接待を賜りました。前日に口スからお帰りだつた由、一山を挙げての歓待に浴しまして、黒田さんのこと話しで承りまして、法縁を有難く存じます。

ご健康を案じています。お大事に。

をしみじみと拝見しました。

たくさんのお便り有りがとうございました。

☆鎌倉市 古田紹欽先生

す。お許し下さい。過日永平寺に私の受講者三十名と共に参りました。貴首の長老にお目にかかり、監院からも接待を

賜りました。前日に口スからお帰りだつた由、一山を挙げての歓待に浴しまして、黒田さんのこと話しで承りまして、法縁を有難く存じます。

~~~~~



☆ 東京都 真言宗正徳寺

川田聖成老師

この度は「成寿」誌を御恵

送賜りまして有難く御礼申し

上げます。早速拝見し、貴師

のご活躍の様子に心より敬意

を表します。特に内外の留学

僧育英事業にご尽力の姿に

只々頭の下がる思いであります。

何卒今後とも一層のご活躍を

☆ 千葉県 椎名宏雄老師

いつもながらの内容の濃

さ、読み易さ、そして美しさ

と三拍子揃つた紙面は宗教文

化誌の稀薄な宗門では誠に曉

天の輝星の存在たる事を確信

☆ 埼玉県 大場満洋様

にごり無き 日本海上空

掃く星の 長き尾届け

彼岸の人へ

「成寿」二十七号御恵与賜

り篤く御礼を申し上げます。

伊藤先生と御尊董老師の御因

縁や相互礼拝の心の絆に接し

改めてシミジミと交流・興隆

・光粒を味わわせて頂いてお

ります。常の如く警策を頂く

心地で拝読致しております。

本堂の格天井をゆっくり拝見

致したく存じます。秋には大

学の同級生と初めて韓国へ旅

行いたします。お礼まで

せて頂きました。

女学校時代塔頭の普門院に

泊めて頂き、金堂で朝暗いう

ちからおつとめさせて頂いた

こと、猊下のお居間の炉ばた

で色紙を書いて頂いたこと、

毎月わざわざ学校までお越し

下さい『維摩經』のお講義を

伺わせて頂いたこと等々、本

当になつかしく思い出されま  
した。

☆藤沢市 廣島一雄先生

成寿二十七巻拝受仕りまし  
た。前回は御袈裟の特集で感  
動と勉強をさせて頂きました

が、今回は伊藤画伯の彩筆の  
妙に改めて眼福を得た次第で  
す。加えて黒田方丈の獅子奮  
迅には眼を瞠るばかりです。

有難く御礼を申し上げます。

☆東京都 櫻井大三様

毎度「成寿」御恵送頂き、  
恐縮感謝致しております。又、

毎号毎号の充実ぶりに驚嘆い  
たしております。善光寺、又

黒田方丈様の活躍を知ると  
き、確固とした人生観、基本  
理念を持つて継続努力するこ

との偉大さに、頭が下がります。  
今後とも益々のご活躍を  
お祈り申し上げます。

☆東京都 渥美和也様

黒田先生、いつもありがとうございます。  
何のお役にも立ちませんが、本を拝読させ

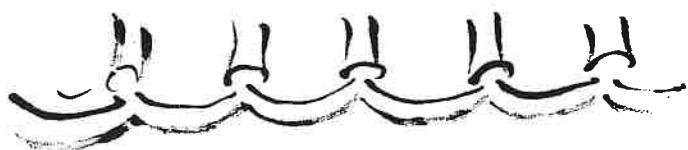
て頂くたびに、先生のバイタ  
リティーをいつも心に入れ見

習わさせて頂いております。

私もこれからヨーロッパの方  
に行き少しではありますが見  
聞を広めたいと考えております。  
又お会いできます日を心  
より願っております。

☆北海道 古谷ミエ様

「成寿」お送り下さいます  
てありがとうございます。  
ただ合掌のほかございませ  
ん。私のところまでも有難い  
ご祈禱札、福升をお送り下さ  
いまして、改めて嬉しく成寿



橫濱善光  
南無阿彌陀佛

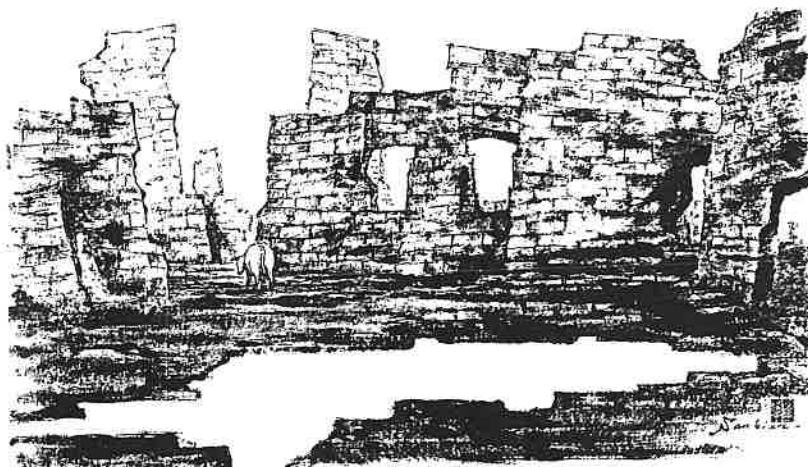
三喜庵

のご本を拝ませて頂きました。益々のご健康をお祈り申し上げます。

☆横浜市 浦野フデ様

いつもお世話になります。

厚く御礼申上ます。毎度素晴らしい成寿を御恵送下さいまして、本当に嬉しく拝見さして頂いております。仏の道の深さを少しづつ勉強して気持の安らぎを感じられます。一日少しづつ拝読さして頂き、御住職様の御立派なお人柄を身にしみて感動致しております。どうぞいつまでもお導き下さいますことをお願い申上ます。



ご寄付御礼

（育英会寄付）

|        |       |       |       |       |       |       |       |        |        |       |      |       |         |
|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|--------|-------|------|-------|---------|
| 島田喜久子殿 | 遠藤清勇殿 | 奥村公規殿 | 越石商店殿 | 宮林昭彦殿 | 龜野武雄殿 | 瀧澤哲雄殿 | 池野直史殿 | 北館良之助殿 | 田中渡辺阿部 | 中村淳子殿 | 村上晃殿 | 大津正二殿 | 伊藤（匿名）殿 |
|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|--------|-------|------|-------|---------|

|     |     |     |     |     |     |     |     |     |      |      |      |      |      |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|------|------|------|
| 十万円 | 三十万円 | 三十万円 | 三十万円 | 五十万円 | 五十万円 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|------|------|------|

|        |      |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |     |      |       |
|--------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-----|------|-------|
| 株せんざん殿 | 細井勉殿 | 古谷道人殿 | 来馬正行殿 | 南澤孝一殿 | 内山則孝殿 | 小菅款偉殿 | 岡田雄子殿 | 片山哲道殿 | 宮田一行殿 | 岩波林産殿 | 安藤康哉殿 | 荻野俊之殿 | 黒田管 | 吉弘増山 | 石川征一殿 |
|--------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-----|------|-------|

|     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 十万円 | 五万円 | 五万円 | 五万円 | 五万円 | 五万円 | 五万円 | 十萬円 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|

|       |      |       |       |      |      |       |      |       |      |       |       |       |       |       |       |       |       |        |        |
|-------|------|-------|-------|------|------|-------|------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|--------|
| 大橋新平殿 | 谷口武殿 | 山口朝治殿 | 渡辺豊子殿 | 千葉学殿 | 伴大介殿 | 中畑葉智殿 | 井上千葉 | 太田敏子殿 | 國廣宏殿 | 石井良昌殿 | 住田義夫殿 | 四居和子殿 | 芦辺逸夫殿 | 樋口鎌禪殿 | 園部芳夫殿 | 飯田利行殿 | 山田康夫殿 | 吉原本貞子殿 | 黒河内貞子殿 |
|-------|------|-------|-------|------|------|-------|------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|--------|

|     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 三万円 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|

河野富美恵殿  
吉村一新殿  
稻垣重弘殿

（成寿贊助）  
島田喜久子殿  
辻村道雄殿  
黒田トシ殿  
片山一良殿  
常林寺殿  
亀野哲雄殿  
青木俊亭殿  
宮本延雄殿  
安藤康哉殿  
石川獅子てんや殿  
龍福寺殿  
岡本順太郎殿  
川村昭光殿

|     |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 五万円 | 五万円 | 五万円 | 五万円 | 五万円 | 五万円 |
| 一万円 | 一万円 | 二万円 | 二万円 | 三万円 | 三万円 |
| 一万円 | 一万円 | 二万円 | 二万円 | 二万円 | 二万円 |

船附村上

理人殿博中殿

五千円

第十二回 育英生、インドマドラス大学博士課程に留学中の三上俊弘師は、ヴェーダレンタ哲学の一派である被制限不二一元論学派の研究をすすめておられましたが、平成十年五月二十八日インドにて交通事故により逝去されました。心からご冥福をお祈り申し上げます。

## 留学育英生からのたより

イギリス・ロンドン在住

第12回育英生 清水 晶子

理事長 黒田 武志(大圓)先生

先生にはお変わりなくお過ごしでいらっしゃいますでしょうか。  
お伺い申し上げます。

さて昨年四月にロンドンに参りましたからのご報告を申し上げます。ロンドン大学キングスカレッジでの神学宗教学部のPhD課程の第一年目も半ばを過ぎフリードヘム・ハーディー教授の指導のもと順調にプロジェクトに取り組んでおります。博士論文のテーマとして現在のジャイナ教における戒律と宗教的実践の乖離の問題ということについて考えております。今秋はインドのデリーに赴きジャイナ教徒の日常生活を直接観察調査する予定であります。これまでハーディー教授とはジャイナ教の場合と比較するため、南方の仏教徒の生活を文献と照らし合わせて詳しく調査した資料を読んできました。

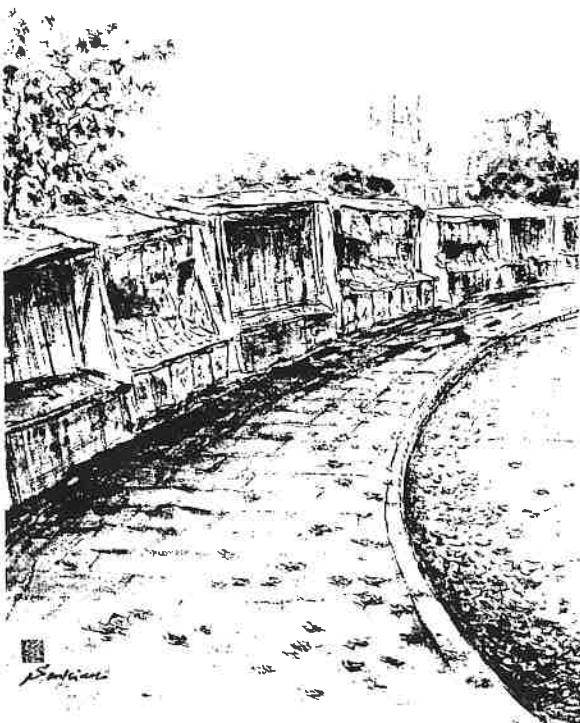
今学期よりジャイナ教の説話集カターコーシャとあわせてフィールドワークにそなえて、特にアメリカの人類学者達による新しいETHNOGRAPHYの方法に関して学んでおります。また昨年九月よりロンドン大学のアジア・アフリカ研究所(SOAS)で中級ヒンディー語のコースに通っております。インドで人々にインタビューするにはまだ力不足ですが毎週の宿題におわれながら何とか落ちこぼれないように続けております。

英国での滞在も二年近くになりました。理事長先生をはじめ育英会の皆様方には多大なるご援助をいただきまして充実した留学生活を送らせていただいております。

心よりお礼を申し上げます。今後共どうぞ宜しくご指導下さいま

すようお願い申し上げます。

時節柄御自愛と御健康をお祈り申し上げます。



## 留学育英生からのたより

イギリス・ケンブリッジ大学

第13回育英生 山口菜生子

拝啓 黒田先生、育英会の皆様、いかがお過ごしでいらっしゃいますか。

私の大学の三年の課程もようやくあと半年弱を残すばかりとなりました。異文化のシステムのなかで、文字通り右も左も分からず、ただ目前の課題をこなせるかどうかと不安に圧倒されつつ無我夢中になって勉強しているうちに、いつの間にか過ぎていった二年半でした。全寮制というシステムのなかでの教師陣や友人たちとの緊密な交流をベースにした異国での大学生活は、私に新しいものを目のあたりにする驚きを、日々もたらしてくれました。これまで味わったことのない世界を身をもって体験する喜びは、しかしながら、自分の足場を失う危機感と隣り合わせでもあり、自分の勉強の動機や方向性が異質な世界に呑み込まれて失われてしまうのではという不安が胸にわだかまつていくのを、日々感じてもまいりました。しかし、最近その分裂が、異質の文脈を学ぶなかで自分の場所を確かめ、なおかつこれを表現するという喜びとなって感じられるようになり、これは私にとって何よりも嬉しいことです。また、当初は歯が立たないと思われた課程をこなし、ともかく卒業のめどが立ったということ自体、いまだに信じられない奇跡のような気がいたします。振り返ってみると、大学のプログラムやカリキュラムの充実ぶりには目を見張るものがあり、此処で勉強できたことの幸せをあらためて深く感じています。

このように多くのものをもたらしてくれた大学生活を支えて下さった黒田先生、育英会の皆様にはとても感謝しております。本当に

ありがとうございました。

最後に、卒業後もここに残って新しい課程にすすみ、さらに自分の場所を確かめたいと考えていることを、ご報告させていただきます。

皆様のご健康と益々のご発展を心からお祈りしております。

敬具



## Foreword

“Sarananda Foundation”,the charitable institution authorized by the Sri Lanka government gave us Honor Award and the Title in the International Section,which was because our educational work to support young priests and students studying abroad was highly estimated.

The Title is “Dharma Keerthi Sri Lokartha Charlie”,which means to contribute to the development of Buddhism and to make efforts for the peace and the prosperity of the world.

This is due entirely to the efforts of people concerned of our educational work and to our supporters. I don't know how to express my thanks.

Last May,I attended the 30th anniversarie's ceremony of Los Angels Zen Center.The fact strongly touched me which Zen has taken root in the United States deeply even after the death of Rev. Hakuyu Maezumi.

The chief priest of Seiganji temple Seitsu Yamaguchi composed poem through observation of white men's actual Zen ascetic and discussing Zen

with them.

The title of the poem is “Visiting the Zen temple in the United States”

Coming for the question for Zen meditation and discussing Zen together.

The blue—eyes priest assumes his mantle.

Who knows the ambition of the old day’s teachings.

Listening to the pure sound of the spring outside the temple.

By the way,I visited Tohoku Welfare University as a tour of our denominations. The president Kôki Hagino says 21st century is the age of the heart, and responsible practice going along with nature and the space creates our own future.

The Buddha says people who know being content are happy, while people not knowing this are poor even they are rich. we must think over every day’s life and live with care.

Now we must be in harmony with the society, think a great deal of life and the nature, and contribute our efforts to the peace and the prosperity of the world and human race.

## 編集後記

思いを深くしている次第です。お互  
いに親を大事にしたいと思います。

▼東北福祉大学学長萩野先生には御  
多忙中にもかかわらず御投稿を賜わ  
り厚く御礼申し上げます。

▼昨年十二月に大本山總持寺監院江  
川辰三老師様とスイス、ローザンヌ  
大学の要請により、仏像、仏書を贈  
呈してまいりました。監院老師様に  
は寒い季節にご足労いただき厚く御  
礼申し上げます。

▼本号では福田孝雄先生、伊藤博・  
伊藤宣先生、阿部慈園先生から玉稿  
をいただき、読みごたえのある誌上  
になりました。ありがとうございました。

▼本号では善光寺には最も御縁の深  
い、伊藤喜三郎先生の御子息様の伊  
藤一章先生と錦戸新觀先生の御令嬢  
錦戸節子先生のお二人にお父様の想  
い出をお書きいただきました。亡く

ますと同時に善光寺留学僧育英会も  
十五周年になり、五月には記念式典  
をとり行う計画を立てております。  
後日、詳細なご案内をさせていただ  
きます。皆様の御参加をお待ちして  
おります。

▼九月はお彼岸の月です。御先祖様  
を大切にし、お寺詣りやお墓参りを  
いたしましょう。

▼エルニーニョ現象と言われた不順  
な夏も終り、皆様におかれまして  
は、愈々ご清祥のことと存じます。  
「成寿」28巻をお届け申し上げます。  
▼此の度、スリランカ「サラナンダ  
財団」より栄誉賞と称号を頂きまし  
た。これひとえに皆様方のお陰であ  
り、心から御礼申し上げます。

誌上では当日の盛大な式典の模様  
を豊富なカラー写真と記事でご紹介  
させていただきました。

▼本号では善光寺には最も御縁の深  
い、伊藤喜三郎先生の御子息様の伊  
藤一章先生と錦戸新觀先生の御令嬢  
錦戸節子先生のお二人にお父様の想  
い出をお書きいただきました。亡く

なつて後、お二人の偉大なご功績に

▼善光寺は明年開創二十周年を迎える

成寿 第二十八巻

平成十一年九月一日発行

発行所 成寿山善光寺

横浜市港南区日野中央一丁目十  
二番九号

電話 〇四五(八四五)一三七一

FAX 〇四五(八四六)二〇〇〇

印刷所 神奈川新聞社出版局





橫濱善光寺